

---

# ネギま？ 天空の彼方から

なべにゃ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギま？ 天空の彼方から

### 【Nコード】

N08930

### 【作者名】

なべにゃ

### 【あらすじ】

それは太古、創世の神が織り成す不思議世界から脈々と語り継がれる物語。

神はいます。貴方のすぐそばに。ただ見えないだけ。そんな神様が色んな世界で大活躍？

そして、『ネギま』の世界でも大暴れ！

神話好きですか？ファンタジー好きですか？そんな貴方に読んで欲しいです。

アンチの設定・オリジナル設定もありますので、ご注意ください。

## 01話 太陽と月の下で

空に浮かぶ島。

その島の中心に聳え立つ巨大な神山。

山の上部は、雲に覆われ頂上がどこにあるのかわからない。

そんな不思議な山の中ほどに立つ、大きな鳥居をくぐると、長く続く石畳があり、その先に小さな社務所があった。

白衣に赤い袴・・・通称『巫女服』と呼ばれる衣装に身を包んだ女性が、社務所に入ろうと扉に手を掛けると、ふわりと漂うほのかな匂い。

まさか！そう思い一気に扉を開けると、酒の匂いにまみれた空気の濁流がその身体に押し寄せる。

弱い者なら、一息で昇天してしまいかねない強烈な酒匂に、暫し立ち止まるも、カツと目を見開いて社務所内へ足を踏み入れる。

見開いた目に映るのは、まさにこの匂いの元凶。

今なお、怒濤のごとく酒を飲み続けるのは、この社の主<sup>ま</sup>。

怒り心頭の巫女の出現にも気にせず、また酒を注ぎだした。

「だああああああ、師匠！何やってるんっすか！」

怒りが目に見えるものなら、その身に纏う灼熱のオーラが見えたで



「ずるいつス！あんまりつス！横暴つス！わちきだつて楽しみにしてたんスから！それを1人でこんなに！あれ程待っててくださいねって言ったのに、それなのに、それなのに・・・」

怒りをぶつけられている人物はといえば、騒ぎ出した巫女を煩わしそうに見ながら、また、杯に酒を注ぎ出す。

「ああああ！！　言ってるそばから！」

再び、杯を奪おうと手を伸ばすが、今度は交わされ勢い余って床に転がってしまう。

ニヤリつと笑いながら、その様を右目で確認しつつ、そのままグビグビつと酒を飲み干すその男は、空になった杯を静かに卓に置き、『甘いわ！』と一喝。

「えぐ・・・えぐ・・・師匠・・・酷いつス、あんまりつス・・・」

両手を床に着け、さめざめと悔し涙を流すこの巫女の名は、『悟空』。

かの有名な西遊記に登場する、水簾洞の石猿『齐天大聖 孫悟空』とは彼女のこと。

そんな彼女がブイブイ暴れていたのは、遠くは中国 唐の時代、現世でいうところの西暦600年代より、修行の旅に連れ回され、猪八戒、沙悟浄と共に苦楽を共にし、菩薩に認められるまで頑張った話は、今も面白おかしく、各方面で語り継がれている。

その旅も終わり、無茶修行のご褒美として、菩薩に推薦にされ、闘戦勝仏せんしょうぶつとなり帰依した後も、師匠たるこの男の元で毎日こき使われているのであった。

「で、まさか酒の匂いに釣られて来た・・・ワケじゃないんだろう？ どうした？」

置いた杯から手を離さず、情けない格好で涙を流す不肖の弟子を、面白そうに眺めながら男は問うた。

「ああっ！ そうでした！ マジやばいっス！ 急ぐっス！」

「だから、何を急ぐ？ 何がヤバイ？ 主語が無いんだよ！ お前いつも！」

何を伝えたいのかさっぱりな弟子の焦り声に、呆れる男は、もう一度不肖の弟子に問う。

「あああ・・・あねさんっス！ あねさんから通信っス！」

弟子の言葉というか単語だが、それを聞いた男は素早く立ち上がり、と、急ぎ出口へと駆けだした。

秘酒の余韻に浸っていた幸せ気分は、すでに吹き飛び、真剣な表情で拝殿を目指す。

後ろからは、悟空が「まっってくださいっス」といいながら追いかけてくるが、男に待つ気配も余裕もなさそうだ。

拝殿に入ると、更に奥、本殿への扉の前で、身繕いをし、鏡で確認したのち、男は威厳を伴い堂々と扉を開ける。

そして、目の前、本殿の奥、宙に浮かぶ四角の枠に、輝ける光を放つ美女が優しそうな笑顔と共に映し出されていた。

「大変お待たせして申し訳ございません姉上。相変わらず美しい

ですな」

美しいのは当たり前。だが、それを讃えねば要らぬ小言や嫌味を言われかねないことも、長いつき合いの中から学んだ尊い経験だ。

決して崩れることのない笑顔の裏側で、どんな黒いことを考えているか知ることにはできないが、自分の姉である以上推して知るべし・  
・なのである。

「随分と忙しいようね？」

優しい言葉だ・・・男を気遣うように微笑んでいるように見える。聖母の微笑といってもいいだろう。

しかし、男は気づいている、目の奥は笑っていない。

寧ろ、機嫌が悪そうな気がしてならない・・・いや、間違いない。龍の尾を踏まぬように、頭の中で言葉を選びながら、背中に感じる冷たい汗に嫌な予感を感じながら、会話を続けるしかなかった。

6

「いや、丁度休憩をしていたところでした。久しく姉上の声も聞いておりませんでしたから、お会いしたいと思っていたところですよ。はっはっは・・・」

陽気に振る舞う男の陰で、うげーっとした顔をする悟空を無視して、晴れ晴れとした笑顔（偽）で姉と向き合う男は、早く用件を聞き出し、通信を速やかに終わらせたい思いで一杯だった。

「あら〜うれしいこと・・・なら、妾めかけのお願い聞いてくれるかしら？」

『キタアアアアアア！！』

断つても、嫌がっても、結局の所、『承諾』しか選べないことも今までの経験で学んだことだ、ならば、快く引き受けた方が得策であるというもの。

「大丈夫よ、そんなに警戒しなくても。簡単なことだから・・・あはっ」

しかし、姉が依頼が無理難題で無かったことが今までであっただろうか？

答えは断じて『否』である。

なにかにつけ、自分の手は汚さずに物事を解決したい、掌握したい、または、邪魔したいなど、様々な思惑やら対応の実行は、こうして弟である男のところを持つてくることが多い。

主に荒事が殆どなわけだが・・・厄介ごとには変わりが無く、男としては勘弁して欲しいというのが本音である。

しかし、力関係において逆らえるはずもなく、渋々、本当に渋々承諾するしかないのであった。

「して、そのお願い・・・とはなんでしようか・・・姉上」

「そうね、どこから話せば良いのかしら。そうね、詳しいことは、この娘こが話すわ」

そう言って、画面から消えるも、すぐさま別の女性が画面に現れた。

「お久しぶりです閣下、お元気そうでなりよりです。」

やや上気した顔で挨拶するのは、軍服に身を整えた気の強そうな黒

茶髪の美女。

敬礼をしながら挨拶するその様子から、非常に真面目な性格が伺える。

「やあ、ビルバ。君も元気そうで何よりだ。しかし、あれだ、俺はもう軍部を退いて随分と経つ。閣下と呼ばれるのは・・・な？」

なにやら事情がありそうな感じではあるが、久しぶりに見る元部下の元気な姿に頬が緩む。

会話が止まること懸念し、ジェスチャーで、話を促す。

「はっ！失礼しました。では、詳細をご説明致します。」

レポートをめぐりながら、真剣な目で報告すべき詳細を語り出す。

「現界、東欧全域から西欧の一部に、黒死病ペストが進行しつつあり、且つ食料不足並びに麦角の繁殖により人間も含め、動植物の生存率が激減しております。これは、今までにない規模速度であります。

また、魔女狩りなる殺戮行動も蔓延しており、人心の荒み様前例を見ない規模となっております。これらを統合的に推測した結果、情報部としましては、魔界の介入もしくは、示唆があったものと断定いたします。」

「ただの勢力争いの一端だろうか？欧州担当神族が後退しただけ・・・ですまない可能性がある・・・か？」

「肯定です」

「東洋担当神族としては、こちらに影響が出る前に、騒ぎを静め、神族寄りのエントローピーの回復に努めたい・・・か」

「肯定です」

「なるほど……そして、欧州に貸しを作り、現界介入の発言力を強化したい……といったところか」

男が持論を述べた後、新たな画面が、宙に現れ、輝ける光を放つ美女が映し出される。

その美女の笑顔とは対照的に、男の顔は不満を表していた。

「まあ含むところもあるけど、お友達が困っているみたいだし、助けてあげるのも友情よね」

腹黒い友情に興味は無いが、姉が言い出したことで撤回された試しはない。

諦めた表情で、腹を括るしかなかった。

「元凶の抹殺。腐敗地域の完全殲滅……でよろしいですか姉上？」

「そうね、でも、あまり派手にはしないで欲しいのよね、できればこっそりがいいわ」

『くっ、また無理難題を……』そう思いはしたが、口には出さない。顔には出ているかもしれないが、それはそれだ。

「軍部又は、情報部のサポートは貰えるのか？」

「肯定であります。軍部からはB17一個中隊、情報部からは、超神衛通信で私がサポート致します」

「まあ、そんなわけだから、よろしくね。」

そう言うと、美女が映っていた画面はブラックアウトし、宙に浮かぶ枠ごと消え去った。

やれやれ・・・そういつて溜息を吐き出すも、頭の中では、どういった作戦で行くかを練っていた。

「では、明日、0700時ゼロナナセロゼロを持ちまして、我々は、降馬頭オルバトウススサ主宿参ノノ王閣下の麾下に入ります。」

敬礼と共に、画面は消え、シーンと静まりかえる本殿において、ふうふうと息を吐き出す悟空と宿参スサノオノ王と呼ばれし男の溜息だけがハモっていた。

物語はまだ終わらない。

01話 太陽と月の下で（後書き）

.....

つつい書いちゃった感があります。

温かい目をお願いします。

## 02話 悪魔が来たりて笛を吹く

.....

今、ヨーロッパ全域で、数十万あるいは数百万の女性たち（一部は男性）が、無実の罪を着せられ、残虐な拷問のあげくに殺され続けていた。

「魔女」という烙印を押され。

虚意の自白により、爆発的に魔女狩りという殺戮が横行し、村そのものが全滅することもあった。

産婆が消え、薬剤師が、医者が消え、医療と出産に関わる人間が次々と殺されていき、人間という種の存続が絶望的になっていく。

子を宿しても産めない。

病気に成っても助からない。

隣人が信用出来ない。

家族が信頼出来ない。

ローマ教皇 グレゴリウス7世は、困り果てていた。

まさに、絶望の淵に追いやられていたと言ってもよかった。

そして、長く続いた神への信仰心が揺らぎそうになっていた。

世界は不作と不況のスパイラルに突入し、世を正し、統治すべき王族・貴族は己の欲望のみに忠実になり、人心の支えとなるべき教会にまで、その腐敗が蔓延しつつあったからである。

「神よ！どうかお願いです！今一度奇跡を！神の奇跡で人々を救い

賜え！」

キリストの像に向かい、一心を神へ願い、教皇は祈った。もう、何日も食べ物を口にしていない、それよりも、神の慈悲によりこの世界の澱みを是正してもらいたかったのである。

このままでは、世界が崩壊する。

教皇の直属機関からの情報を統合すると、そのような結論に達した。しかし、今の自分には、かつてのような力はなく、ローマ近隣にある教会への影響力を維持することが精一杯であった。

心ある真の信仰心を持った神官、信者は、日の殆どを祈りに費やした。

また、腐敗した神官、人々は、己の欲望を満たすためだけに力を、言葉を行使用する。

人の心は弱く移ろいやすい。

信仰心を持ちながらも、日々を生き抜くために他を犠牲とせざる負えないことに絶望しながらも、奇跡を待っていた。

深夜になっても祈りを止めぬ教皇を、お付きの神官は見守るしかなかった。

日付が変わり、月明かりさえも消えた教会の奥で、一心不乱に祈り続けるその姿に、神官は教皇への憧憬と尊敬そして、奇跡を願う己の心を新たに自覚することしかできなかった。

そして、それは起こった。

尋常成らざる神聖な気配に顔を上げると、キリスト像の目から、赤い涙が零れ出したのである。

驚き、さらに上を見上げると、像の真上に、2対の白い羽を広げた天使が舞い降りた。

教皇は思った、『奇跡キタアアアアア』と。

「ローマ教皇グレゴリウス7世・・・世の平和を願うそなたの心、父なる神へ通じたり。我、神より使われしものなり。今、神の奇跡を伝えん。心して聞け。そして、讃えよ。神の奇跡は、世界に伝わらん。」

教皇は、ひれ伏し、神への感謝を唱えながら、天使の発する言葉を聞き逃さぬよう、全身全霊を聴力へと傾ける。

「神への信仰心は世界を救うであろう。人間よ、神を信じよ、隣人を愛せ、疑うな、奪うな、殺すな、さすれば共に生きるであろう。神を信じぬモノには、神罰が下るであろう。」

そう言い残すと、霞のように天使は消え去り、神聖な存在感の余韻がその場に残った。

扉の外から、その様を一部始終見ていた神官は、驚きながらも、自分が見たモノが幻ではないことを確認するべく、キリスト像の前で固まる教皇の側へと駆け寄るのであった。

「き、きよ、教皇様！い、今、今のは！」

「おお！そなたも見たか！聞いたか！我らの願いは、父なる神へと届いた！ハレルヤ、ハレルヤ、これで世界は救われる！」

シーンと静まりかえった会議室に、数名の士官が着席している。皆、精悍な顔つきのモノ達。

これから行われるブリーフィングにやや緊張しているようだ。

時計の針が、0700を指すと同時に、ウィーンという機械音と共に扉が開かれた。

ハイヒールにもかかわらず、足音を立てずに室内に入った女性士官が教壇に立ち、着席しているメンバーを見渡し、全て揃っていることを確認した。

「諸君、ご苦労、私は今回の作戦において情報担当を拝命したビルバクシャだ。今作戦中の階級は中佐。では、早速だが作戦内容についてブリーフィングを始める。

今回の目標は、『笛吹』またはその眷属の抹殺である。作戦地域は欧州全域。なお人間、動植物に関係なく『魔の因子』を植え付けられた可能性のあるモノは、ことごとく殲滅せよ。

そして、この作戦は、極秘電撃戦を旨とし、欧州担当神族の支援は期待しない。決して姿を見られないことが絶対条件となるスニーキングミッションだ。

小隊長は、常に超神衛通信チャンネルをONにしており、作戦司令部からの情報に注意せよ。

降下ポイントは、現界ローマ教会大聖堂を中心に放射状にしてある。各小隊は確認し指定のポイントから作戦を開始せよ。

なお、今作戦は、宿参ノ王閣下<sup>スサノオ</sup>が指揮を執られる！では、閣下お願い致します」

脇に控えた席から、細身だが圧倒的な存在感を纏った宿参ノ王<sup>スサノオ</sup>と呼

ばれた男が教壇へと移動する。

「皆久しぶりだな、元気そうでなりよりだ。今回もやんごとなき方の思惑で、困難を極める作戦となったが、命がけでこなし無事に帰還することが前提条件だ。それを肝に銘じておけよ。」

もちろんオレも前線へ出るから、温いことしてる奴には神罰を喰らわすからな！

それと、今回の作戦名は『金の針』、オレのコールネームは、『特務大佐』だ。質問がある奴はいるか？」

<sup>スサノオ</sup>宿参ノ王より促された士官の1人が挙手し、立ち上がる。

「確認ですが、笛吹・・・ということは、低魔族ジャックバイパーとドブネズミどもが殲滅対象ということでしょうか？」

「そうだ・・・階級は低いが、憑依能力はAクラスの悪魔だ油断するなよ？」

それから、いくつかの質問に答えたのち、ブリーフィングは解散となった。

あとは、作戦開始時刻まで準備と静養が主な任務となる。

小隊長達は、自分の隊員とミーティングすべく移動していく。

「閣下、今回の背景についてはどうのようにお考えですか？」

会議室から移動し、執務室の中でビルバクシヤは、<sup>スサノオ</sup>宿参ノ王へと質問をする。

「まあ、あれだ、欧州神族は昔からそうだが、覇権争いが絶えない。」

北欧神族と東欧神族は特に・・・な。そこを突かれた形なのだが、進行速度が速すぎる。もしかすると、何柱か墮天したのかもしれんな」

出された紅茶に手をつけながら、なんでもないように話し出す。

『墮天』・・・一般には天界の一柱が、魔に転じ、天界に敵対する存在になることと思われがちだが、実際はそうではない。比較宗教学では意味は違ってくるのだが、聖と魔は表裏一体で、その時代の思想・願いが新たなエントロピーを生み出し、その結果、神が魔になり、魔が神になる。

数千年前に起きた、欧州神族の大戦では多くの天使・神族が、魔へと転じている。今は小康状態であるだけである。

何故なら、『魔という存在がなければ、聖という存在が際立たない』からであり、『聖なる神が、邪悪な悪と常に戦っており、そして聖なる神が必ず勝つ』そうであると強く想われているからである。

神族も一枚岩ではないし、創造神が長き眠りについた今となっては、その調整すら難しくなっていた。だが、高位の神と魔とされる者達が、最高評議会を定め、創造神の定めた世界のエントロピー調整することで調和を保ってはいたが。

「オレとしては、勝手にしてくれと言いたいところだが、姉上には逆らえないからね・・・与えられた責務を果たすだけさ」

作戦開始時刻より数日、まず、魔の因子を植え付けられた者、影響

を受けた者、信仰心を失った神官を含む教会関係者は、波状的に淘汰され、塵となった。そして、王侯貴族、そしてその親族など、魔の因子が確認されたものも当然、塵となった。これにより、『魔女狩り』を先導するものがいなくなり、人間同士の殺戮劇は収束に向かう。

また、『どこからか』運び込まれた食料を、残された教会関係者が担当地域への公平な配布を行うことで、人心の教会への依存度は格段に向上した。

あとは、その元凶を絶つのみ……。

煉瓦でできた地下通路、奥の方から何かが移動する音がする。その音……足音とでもいうのだろうか、何百、何千ともわからない移動する音。

見ると、ドラム缶と同じ大きさの灰色の目の赤いネズミが、必死に駆けている。

そう、今まさに追いつめられた、悪魔ジャックバイパーは、想像もしていなかった事態に驚きながらも眷属であるドブねずみ達を引き連れ、逃げ回っていた。

「HQQHQ、こちらA7エナインターゲットは、予定ポイントを通過」

「こちらHQ。通過を確認、追尾し、もれなく眷属を殲滅せよ」

「A7エナイン了解」

徐々に追いつめられて行く。  
徐々に追いつめられていく。

双方の思いが同じベクトルとなったとき、終演の地は、すぐそこにあった。

「ここまできて、なんだ！なんとかココを逃げ延びなければ……  
グガアアアアア」

突然、頭上から降り注いだ金色の杭に肢体を貫かれ、身動きが取れなくなった。

しかし、低級とはいえ悪魔であり、この程度の攻撃に屈するつもりはなかったが、肢体と地面を縫いつける杭が、純度99・8%の純金製であることに気づいたとき、希望は絶望へと変わる。

ネズミからネズミへと憑依することで、変わり身や移動をし周囲を翻弄してきた能力だが、純金製のモノが身体に触れていると使えなくなってしまう……それが唯一、悪魔ジャックバイパー弱点であったからだ。

『そう定められていたから』

故に、それを覆すことはできないのだ。

「運がなかったな……滅せよ」

身動きができぬまま、投げられた言葉と同時に、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王によって、金の杭でコアを貫かれた灰色のネズミは、断末魔を上げる間もなく塵と化する。

そして、その塵は、劫火滅却され、その存在を無い物とされる。親玉が消滅すると、数刻の後、連鎖的に眷属もただのネズミとなり、それほど時間をかかることもなく殲滅されていった。

長くヨーロッパ全域を恐怖に染めた悪魔にしては、極めて呆気ない結末となったが、それを数日でトドメを刺した手腕はまさに神の如し……であった。

「HQQHQ、こちら、特務大佐。ターゲットの消滅を確認。指示を  
求む」

「こちらHQ。消滅確認、お疲れ様でした特務大佐。直ちに帰還し  
て下さい。」

これにより、『金の針』作戦は完全終了となる・・・はずだった。

物語はまだ終わらない。

02話 悪魔が来たりて笛を吹く(後書き)

.....

神話混ぜ御飯感覚です。

生ぬるい目で見守ってください。

### 03話 少女には秘密がいっぱい

.....

作戦地域のさらに北、生い茂った森から廃村までの上空。

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は、光学次元迷彩をその身に施しながら、辺り一帯の気配を探る。

『金の針』作戦は、順調に終了したが、情報部より送られた資料により新たな事実が露呈したからである。

しばらくすると、森より飛び出した人影が廃村に向かい疾走し、それを追うように3つ、さらにその後から2つの影が競うかのように疾走して行く。

その速さは、とても一般人とは思えず、また、纏いしオーラは神族でも、魔族でもないように感じた。

人影は、1つの廃屋・・・もとは教会であったであろう半壊した建物を包囲するように移動した。

リーダーであろうか？1人のローブに身を包んだ男が扉らしきものを蹴破り、建物の中に侵入する。

室内では、朽ちたキリスト像の前で小柄な影が男達を睨み付けた。

「汚らわしき化け物といえど、もう逃げられんぞ！」

そう言いながら、小柄な影を取り囲むように教会内部へとジリジリと足を進める男達。

皆、ローブを身に纏い、手には大小様々な杖らしき武器を持っている。

「炎の精霊12柱、集い来たりて敵を撃て」

ふっ・・・と身をかがめた男の呪文のような言葉と同時に杖が輝きを増し、そこから炎を纏った12本の矢が飛び出す。

突如として現れた矢が向かう先は、教会奥にて身構える小さき影。

そして、周りにいた別の男達も、言葉を紡いだ後、同じように杖を向け、そこから矢のようなもの、玉のようなものを小さき影に向けて放つ。

最初の男が放った炎の矢が、小さな影に突き刺さる・・・と思ったその時！

突然、地表より迫り出した巨大な氷の固まりが、全ての矢を防いだ！

そして、氷を溶かした炎の熱が、水蒸気を発生させ、辺り一帯の視界を阻む。

さらに、モウモウと立ちこめる水蒸気に向かい、時間差で男達から放たれたモノが突き刺さった。

氷の割れる音、蒸発する音、また、なにかが爆発する音などが交差し、教会の奥は破壊の中心地となってしまった。

水蒸気が晴れ、爆心地ともいえるその場に、あったであろう小さき人影が無く、血の涙を流したキリスト像がその場にあり続ける奇怪な空間がそこにあった。

「やったか？」

「まちがいないだろう！」

「あれは、かわせぬ！」

男達は、不安と同時に、仕留めた達成感を押さえつつ、遺体となり

はてたモノを確認しようと奥へと近づいていく。

『ガコツ！』

何かが破壊されるような音・・・と同時に、地面から小さい影が男達の背後に飛び出し、『何！？』と振り返ったその身体に、黒い何かが突き刺さる。

小さな影は、素早い動きで、男達の背後を取るよう移動しながら、なにやら早口で唱えている。

1人の男の心臓に、青白く輝く剣を突き刺し、ほぼ同時に別の男に杖を向け、雷精を帯びた矢を放つ。

矢を受けた男は、呪詛のようなものを口にしながら絶命し、崩れ去る。

あつと今に、3人の男を倒した小さな影は、教会の中心から、周囲を警戒し、気配を探る。

「ふう・・・なんとかあったか。賞金稼ぎどもめ・・・」

そこに、一陣の風が入り込み、吐き捨てるように言葉を放つ小さな影がかぶっていたフードが、めくり上がり戦慄の素顔があらわになる。

他を圧倒する素早さと、躊躇無き攻撃、3人を瞬時に仕留めるその剛胆さ、経験に裏付けされた行動力は賞賛に値するであろう。

そんな戦い慣れした男達を手玉に取る、驚愕の存在が、こんな少女だとは！

少女は、それから警戒を怠り事無く、しかし、疲れた身体を休ませるべく、教会のさらに奥へと足を進めたその時、防御が間に合わぬ絶妙のタイミングで現れた刃が目の前に迫った！

「くっ！まだいたのか！」

少女は、自分に突き刺さるであろう刃・・・短剣であるが、それが急所に刺さるのを避けるべく身体を捻る。

「うがつ！」

短剣が刺さった衝撃と、自らが起こした回転力により、床に打ち付けられる痛みを漏らす。

「くっ、私はこんなところで・・・」

悔しさを滲ませながら、瞬時に立ち上がることができない事態に、どう対処すべきか考える。

その表情は、決して諦めていない。刃の飛来した方角、高さから、敵の位置を割り出す。

目をそちらへ向けると、空間が霞み、二人の男が出現した。

「ふっ、油断したな！だが、ここまでだ！」

「薄汚い吸血鬼め、ここが墓場だ・・・教会で朽ちるとは、なんとも洒落がきいているじゃないか」

すでに勝負は決したとの思いからだろう、油断することなく杖を構えつつも、男の言葉はやや多弁だ。

二人とも、賞金稼ぎといわれた男達だ、ある程度の場数は踏んでいるのであるう・・・少女に刺さった刃の深さが、命に与える影響はわかっているつもりだった。

男は、少女にトドメを刺すべく杖を向ける。

少女は、如何にそれを阻止するか頭をフル回転させる。

男の杖が光る・・・その時！

杖を握る男と、短剣を握りしめる男・・・二人の動きが固まる！

まるで時間が止まったかのように、男達はそこに立ちすくみ、身動きが取れない。

意識はある、意志もある、しかし、身体は動かない。

何故だ？

何が起こっている？

男達の頭の中が、そんな疑問で占拠されている中、自らの身体に刺さった短剣を、力任せに引き抜いた少女が、ややふらつとしながらも立ち上がる。

「ふふふ・・・最後の最後に残っているものが勝者なんだよ・・・」

そう言う少女は、手にした剣で、言葉すら口に出せない男達の命を刈り取った。

「はあはあはあ・・・」

もはや残された力は少なく、これ以上の戦闘は不可能だった。自身が使い切った魔力が回復するまでは。

男達は、見誤った。

相手は、少女といえど吸血鬼なのだ。

人間のそれとは違う・・・種としての強靱さが根本的に違うのだ。

刺さった短剣は、銀製ではあったが致命傷とならず、血は流れているが、失血死には至らない。

真に吸血鬼を倒すのであれば、心臓に、脳に、直接打ち込まねばならなかったのだ、『白い木杭』を。

それが、『定められた吸血鬼の倒し方』であるから。

そして、知らなければならなかった、吸血鬼にはどんな能力があるのかを。

床に直接座り込み、息を切らす少女に突然声を掛けるモノがいた。

「なかなか・・・興味深い」

少女は跳ね起きる、『まだいたか！』そう身構え、思い切り探ると、再び声がする・・・頭上からだ！

目を向けると、そこには2対の白銀の羽を広げた、神の使い・・・通称『天使』といわれる存在が眼に映った。

「何！？ て、天使だと！」

驚くの当然であろう、始めて見る想像上に存在。

聖書に記された神聖な存在。

神を否定し、神を呪って生きてきた自分とは真逆の存在。

信じられるものではない、しかし、今、目の前にいるのは紛れもない『天使』なのだから。

本物か？疑いを頭の中に浮かべながらも、否定する判断材料がない。今までの長き経験の中でも、神に属する存在に触れたことはない。

しかし、魔という存在の痕跡には、何度も会っているではないか！自分と言う存在、そして、自分を創りだした憎むべき存在は、紛れもなく魔に属する存在ではなかったのか！

だが、宙に突然現れ、ゆつくりと降下するソレから目を離さずにいながらも、そのものが内包する力の強さは本物だ。自分の力が全回復していたとしても、到底太刀打ちできないほどの圧倒的な力を感じる。

「信じなくていい、だが、真実だ」

驚愕は続く。

自分が頭の中、胸の内で考えていたことが知られているのだから！  
吸血鬼である少女の目の前に現れた現実から・・・推測するある一つの真実。

喉が渇く、身体が震える、言葉も出ず、四肢に力が入らない。

目の前にいる聖なる存在は、魔に属する私をどうするのか？

もちろん答えは一つだ。

一つしかないだろう。

滅ぼされてしまう・・・それしかない。

自分は『吸血鬼』だから！

確かに、今まで刈り取った命の数は数え切れない。

しかし、自ら殺戮衝動で刈った命など一つもない。

生まれを呪い、周りを呪い、それでも、生きることが諦めず、安住の地を求め、放浪を重ね、落ち着く場所を見つけても、年を取らぬ自分は長くそこに居る事ができない。

どこからともなく噂を聞きつけた『自称：正義の味方』が私を追いかけるからだ。

賞金稼ぎ、教会の犬 埋葬機関、ヘルシング機関（王国教騎士団）  
などなど。

最近は、正義の魔法使いなる者も加わった。

確かに吸血鬼は魔に属する存在だ、しかし、自分は何だ？

自分という存在が魔であるならば、その生まれを、存在を認めた神はなんだ！

自分が今、『ここに在る』ということそのことが、神が認めたことではないのか！

フィードバックされる憤りに胸を焦がしつつ、自分もここまでか・  
・そういう諦めの思いも無いわけではなかった。

2000年は生きた自分の生が、こうして神聖なる天使によって終焉を迎えることもまた、良いのではないかと想うからだ。  
薄汚い俗物に屠られるよりも、何百倍もいい。

「天使・・・様。私は・・・ここで貴方に・・・滅ぼされるのですか」  
有りつ丈の力を、想いを込め、少女は、上目づかい（身長的にそう  
なってしまうのだが）に天使を見あげ、自分の予想が言葉どうりな  
のかを確認する。

『ズキユユユユユン！！』

突き刺さった。

それは確かに突き刺さったのだ。

見識あるものが見れば、それは確かに突き刺さっていた。  
そして突き抜けた。

しっかりとその身に。

「くっ、オレとしたことが・・・なんてことだ」

天使が漏らす言葉は小さく、少女の耳には届かなかった。

しかし、それが幸いしたのであろう、天使は、天使たる尊厳を保てたのだから。

物語は、まだ終わらない。

03話 少女には秘密がいっぱい(後書き)

.....

書き走る姿勢ですが、楽しんでいただけるといいな。  
では、また。

## 04話 許し許される者

.....

天使は、少女に1歩近づく。

不安気な憂いの表情の少女に。

そして、包み込む、二対の白銀の羽で。

「え？」

天使の、予想外な行動に思考は真っ白となる。

自分を包む聖なる波動に、温かさに、フリーズする。

「オレは、魔を否定しない。そして、お前という存在を否定しない」

聞いた。

確かに聞いた。

今、天使はなんと言ったのか？

否定しない？

魔を？

自分を？

否定・・・しない！

そうだ、自分という存在を否定しないと言ったのだ。

即ち、それは、自分という存在が肯定されたということ。

吸血鬼である、魔に属する自分という存在が認められたということだ！

心の奥から、忘れていた・・・押し込めていた・・・そんな自分が吸血鬼となる前、人間として生を謳歌していた頃の暖かい感情が、

溢れだす。

枯れたと思っていた温かい何かが瞳より流れ出し、拭うことも忘れ、天使に抱きついた。

「私は・・・私は・・・」

言葉にならない。

言葉に出来ない。

そんな自分が制御できない。

ずっと、ずっとこのままでもいい。

そんな思いに囚われていた。

どれだけの時間が経ったのであろう。

羽を広げ直した天使が、1歩下がる。

「あっ・・・」

名残惜しそくに、おもむろにでた言葉。

手を伸ばせば届く距離・・・だが、それは許されない。

自分の存在故に。

自分の矜持故に。

「時間だ」

天使が発する言葉の意味を理解し、短くも長い逢瀬は終焉を迎えた。

「高みを目指せ、さすれば再び逢うこともあろう・・・」

その言葉と共に、霞のように消え行く天使。

空気に溶けるかのように、見えなくなる。

少女は、消えていく天使を、瞳に焼きつかせるかのようにしっかりと見つめる。

そして、足元に残された一粒の赤い石・・・後に記される『賢者の石』がそこで淡い光を放っていた。

恐る恐る石を手に取り、両手でギュツと握り締める。すると、何故だか、温かくなる。

ずっと感じてた孤独感が安らぐような気がするのであった。

天使は言った。

『高みを目指せ・・・』と。  
いいだろう！

神の国から見ているがいい！

自分のいう存在が、悪がどれだけの存在になるのかを！

「私は否定しない。私は認めさせてみせる・・・私という存在をな  
！」

自分に言い聞かせるように、敢えて大声で宣言する少女が、このうち限界にて、悪の代名詞となる二つ名で呼ばれるようになるとは、誰もわからないし、わかるわけがなかったのである。

ただ、時折、寝言で『天使様・・・』と漏らすことがあったことだけは明記しておこう。

無事作戦が終了し、舞台は再び、神山に移る。

報告書をまとめながら、執務室で、唸りながら、キーボードを叩く宿参ノ王スサノオと、黙々と仕事をこなすビルバクシヤの姿があった。

「で、閣下・・・件の吸血鬼は如何でしたか？」

画面から目を離さず、手を休めることなく、意識と言葉を宿参ノ王スサノオに向ける。

何気に、不機嫌な気がするのだが、どうであろうか。

「ん・・・まあ、いいんじゃないかと思った」

だから何がいいんだ！

存在か？

危険性が？

能力が？

容姿が？

性格が？

年齢が？

などと、知りたいが、悟られたくない感情を押し隠し、静かに言葉を選ぶ。

「はつきりと言っていたただかねば、私にはわかりませワタクシんが？」

「ああ、すまないな・・・邪悪な存在にはならないだろうということだ」

そうか、それならばいいのだ。

たかが吸血鬼、それだけだ。

だが、現界にとっては、その存在は脅威だろうが。

「それにしても、随分とお優しいご様子でしたが？」

優しいお姉さんが、茶目つ気のオイタを咎めるような柔らかな口ぶりだ。

だが、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王知っていた。

それは罫であると。

女性が優しい素振りを見せたとき、そこには、罫と危険が待ち構えているのだと！

「ん？まあ、気まぐれ・・・かな？」

明らかに、はぐらかした感はあるが、それ以上は言及されなかった。吸血鬼・・・しかも真祖。

現界の各反吸血鬼機関が追っている存在。

しかし、そのこと事態は宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王達には関係のないこと。

あくまで、『現界のこと』だからだ。

だが、人間が真祖となると、そこには必ず『魔の介入』がある。

それが、今回の事態とどう関連しているか・・・それを調査したのだったが、結果は白。

吸血鬼達は、関与していない。

なら、それ以上関る必要もない。

それが、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王の判断であり、決断であった。

ただ、あの真祖の少女の瞳に心動かされたことは事実だが、敢えて報告はしていない。

高々200年生きた吸血鬼に、たいした力はないからだ。

それよりも、あの場に現れた魔法使いたちの蠢動のほう为抓手が気になり

であつた。

『魔法使い』

太古の昔より存在する『魔』を信じ、探求し、その力を行使する者達の総称だ。

地域、機関によつては、違った呼び方をしようではあるが、『魔の力を行使する』存在であることには代わりがない。

現界において、一般人とは違う、不思議な力の研磨に人生をかける者達だが、その多くは、黙々と研究する場を求め、隠遁生活者が多い。

また、個人では制御できぬ魔法もあることから、集団で研磨・研究するものは、魔族・神族の力を借り、亜空間や、時空を越え、研修機関を設立したりするのだ。

ただ、現界では忌み嫌われることが多く、表立って現れることは少ない。

人間は、自分では理解できない不思議な力を恐れるからだ。

そんな魔法使い達が、今回、蠢動していた。

あの吸血鬼を追っていた集団もそうだが、純粹に悪を倒すというよりは、金や名声を得んがために魔に属するものを狩るといった意味合いが強いように見受けられたのだ。

時代が変わつたのか、それとも魔法使い達の生き方にレポリユーションアカデミーが起きたのかは不明だが、気にかかったことは確かだ。

一度学園のほうへ問い合わせてみるか・・・そんな思考をめぐらせていたのだが、ビルバクシャの一言で現実へと引き戻される。

「閣下が・・・『ペド』だとは知りませんでした！」

しーんと静まる室内に、突然フリーズする動き。

宿参ノ王は考える・・・

確かに、可愛かった。

庇護欲に駆られた。

小さな身体に、巧みな戦闘技術。

孤独が理解できたし、あの上目つかいには、『ズキーン』と来た。

だから、ちよつと優しくしちゃったけど、魔石も置いてきたけど・・・

ペドは無いんじゃないかな・・・ペドは！

「せめてロリと呼べ！」

そして、再び静まる室内。

「そ、そうでしたか、し、失礼しました。あ、あの、私ワタシこのあと用事はあるので、これで、失礼しますね」

言うだけ言って、そそくさと逃げるように、執務室から出て行くビルバクシャ。

あれゝ冗談だったのにな・・・そんな思いは誰にも伝わらない。

まあいいか・・・そんな風に気軽に考えてことを、数刻の後、後悔することと成る。

何故なら、ビルバクシャは情報仕官。

情報を集めることも、広めることもお茶の子さいさいだからだ。

その日から、宿参ノ王スサノオロリコン疑惑が一斉に、神界・仙界において広まった。

そして、ガッツポーズをするものも少なからず居たという。

さらに、何故か、少女に変身（年齢的に）し、コンタクトを取って

くる神族、仙人が増えたことがその話題に信憑性を加速させた。また、一部の神族からは、『頭文字G』的な生物を見るような目で見られたことも少なからずあり、心に小さな傷をつくったりしていた。

「神界一の引きこもり王に、オレはなる！」

と高らかな宣言と共に、今は、小さな社務所で、ひたすら酒を飲んだり、ネトゲに嵌ったり、ギコギコ動画に何かをUPすることが生きがいとなっていたりした。

密かに現界にもアクセスの手を伸ばし、自由を謳歌していたが、誰も咎めなかった。

一応、仕事はしていたのだから・・・

物語はまだ終わらない。

04話 許し許される者（後書き）

・・・

実は、書き溜めはここまでだったりして・・・  
頑張る所存です。

## 05話 地獄もいろいろ

.....

ぺったん！・・・

ぺったん！・・・

ぺったん！・・・

ぺったん！・・・

ぺったん！・・・

何の音であろう？と意識を向けてみると、それは押印を繰り返す音。1人の男が、机にある書類を一読しては、一押し。一読しては、一押し。

それをかれこれ数時間・・・押し続けていたのだ。人の集中力には限界がある、それは神とて同じ事。それが長いか、短いかの違いだけのことだから。

「うがあああああああやってられるか！」

男は、突然叫びながら、判子を床に叩きつけた。

床は陥没するものの、金印である判子が碎けるワケもない。

親の敵のように、金印を睨み付けるモノの、事態が好転するはないのである。

しかし男は諦めない。

新たなフロンティアを目指し、扉の外へと飛び出すのだった。

スタンブリンフェル  
押印地獄・・・とでもいうのだろうか？

男・・・宿参ノ王だが、『引きこもり王？』を目指し、扉を閉ざし、毎日毎日遊んでいたある日のこと、例の姉上が登場し、引つ張り出された（力任せに・・・社務所は半壊）のである。

その時居合わせた悟空は、『師匠、力になれなくて、ゴメンなさいっす』と言い残し、本殿の隅でガタガタと震えていたらしい。

とにかく、そんなワケで拉致された先では、『夏休みは明日終わるが、宿題は全然出来ていない』といった感じの修羅場が形成されていたのである。

突然舞い降りた不幸を神へ嘆く・・・なんて不毛なことはず、いやいやながらも、ぺったんぺったんと押印を繰り返すのであった。

そして、何日か経ったある日のこと。

秘書兼監視役の可愛い巫女さん（もちろん人間ではない。狐耳や狸耳さらに尻尾のオプションが・・・）の色香に癒されながらも、一つ、また一つと仕事をこなし、もう少しで終わる・・・といったところに、追加が入り、さらに、追加追加と、どれだけしても終わらない環境が出来てしまった。

偏に、宿参ノ王スサノオの姉の仕業だが、そのうち片づくだろうと、片づくだろう、片づく・・・って全然片づかねえよ！と脳内ストレスが頂点に達し、今に至るのである。

執務室という名の牢獄から、逃げ出すと、当然のように監視役の巫女さんが、詰め戻そうと画策する。

宿参ノ王スサノオの姉からは、『審議官しんぎかんにドンドン仕事をさせるように』と厳命が下っており、彼女たちも必死なのだ。

「宿参ノ王様あくどちらにいかれるんですかあく」

「少し、私たちと休憩しませんかあくうふっ」

と甘い言葉と共に、たわわに実った胸元を、さらに強調させながら宿参ノ王捕獲のために詰め寄る。

彼女たちの胸元から香る、甘くていい匂いが本能を刺激する。

このまま、可愛い巫女さんとウツハウツハな展開もありか・・・と逃亡心が折れそうになる。

宿参ノ王は心の中で叫ぶ！

オレ様は、チチシリフトモモスキー！

そんなオレ様が、彼女たちの誘い（100%罠だとわかっているが）を無下にしているのか？

否！断じて否である！

だが・・・。

冷静に考えれば、彼女たちは、自分の部下（仮）でもあるが、姉の部下でもあるわけで、どちらの命令を聞くかと問われれば（命がけの選択であるが・・・）間違いなく、姉を選ぶことは間違いない。であれば、そんな彼女たちとウツハウツハな展開があるわけがない。・・・いや、ちよつとくらいは・・・と思わないこともないが、たぶん、98%の確率で無いと言い切れる。

であれば、目の前に迫る『いけない果実』に惑うことなく逃げの一手が正解なのだ。

逃げなきゃダメだ、逃げなきゃダメだ、逃げなきゃダメだ・・・

そんな心理状況な宿参ノ王スサノオが、ひよいひよいつと彼女らを交わし、超加速で一気に押し押し通り敷地の外にでるのなぞ簡単なことなのだ。ただ、姉の報復が恐くて我慢していただけだから。

誰もいないところで、『姉上のお仕置きなぞ・・・こ、恐くなんか  
ないんだからね!』と強がっていたがそれは秘密だ。

そんな感じで、巫女さん達と戯れていたところで、秘書担当の巫女  
さんが、真面目な表情で報告をする。

「宿参ノ王様スサノオ、大神様より通信が入っております」

「げっ・・・いや、おっほん。開いてくれ」

宿参ノ王スサノオの命を受け、巫女が空間に現れたキーボードを操作すると、  
宿参ノ王スサノオの目の前に画面が現れ、扇子で口元を隠した姉である大神  
が映し出される。

「随分楽しそうね〜いいわね〜」

画面に映る女性は、楽しそうにコロコロと笑ってはいるが・・・目  
の奥は冷ややかだ。

もし、読眼術なるものがあるなら読みとれたであろう・・・

『ちゃんと仕事しろつうの!この愚弟が!』と。

そんな黒い感情を笑顔で遮る姉の登場に、冷や汗をかきながら、宿参ノ王スサノオは用件を聞かすには居れない。

とつと通信を切りたい一心からだが。

「して、御用向きをお伺いしましょうか？」

「仕事よ〜」

「いや、これ以上はちょっと・・・」

「大丈夫よ〜別件だから〜」

「いや、だから、これ以上は・・・」

「大丈夫よ〜書類仕事は後回しで構わないわ〜」

「・・・後回し・・・」

決して『しなくていい』とは言わない姉に、無情だ・・・と思いながら、目先の書類からの逃げられるのはとりあえず幸運かもしれないなかつた。

「私の箱庭に不穏な空気があるみたいなの〜詳しい調査をお願いしたいのよ〜」

「魔法使い・・・ですか？」

「そうよ〜学園からは、同盟アリアンゼではないかって回答だったわ〜」

「殲滅ですか？」

「そうじゃないわ。あくまで調査。進化の果てが絶滅ならそれは運

命。でも、介入は許さない。といったところよ」

「了解しました。では、ただちに潜行調査に入ります」

「お願いね〜でも、やりすぎてはだめよ〜い・い・わ・ね！」

「わかってますよ・・・」

微笑ましい姉弟の会話が終了すると、画面は消え去り、ほっとした空気があたりに漂う。

宿参ノ王スサノオを無理に連れ戻す必要が無くなった巫女さん達は、おずおずと持ち場へと戻っていく。

そして、その内の何人かは、メアドの書かれた紙を宿参ノ王スサノオ押しつけ、『絶対連絡下さいね』と耳元で囁いていたり、頬に『ちゅ』  
つとしていく強者も。

なににせよ、宿参ノ王スサノオは、神界・仙界でも名の通った神将であり、管理神であり、自分たちの憧れでもあるのだ、このチャンスを逃すまいと、給湯室ではキャツキャツと噂されていたのだ。

当の宿参ノ王スサノオとしてみれば、早く任務を負えて、ここに戻ろう・・・とニヤっとしながら考えていた。

それが、大神の手の平であることも気づかずに。

こうして、やつこさ外に出られた宿参ノ王スサノオは、下界を見下ろす。

ココは、龍山山脈の山頂近くであることから、見晴らしは最高だ。遙か遠くに見える浮遊島も、いくつか確認できるくらいだ。

「久しぶりに、箱庭の探検といきますか」

こうして、太陽神が守護する箱庭に、1柱の荒神が意気揚々と飛び込んだのだった。

物語はまだ終わらない

05話 地獄もいろいろ(後書き)

.....  
サブタイトルって難しいです。

## 06話 箱庭の中で

.....

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は、自らの羽で空を飛行する。

現界と違い、誰の目を憚ることなく空の旅を楽しむことが出来るのは壮快だった。

(神界・仙界には航空規制があるため、自由に滑空できない)  
何故なら、空を自由に飛び回れる種族は、この箱庭と呼ばれるムンドウス・マギクスには龍種・鳥種を除けば存在しておらず共に眷属に近い関係から、空は宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王のモノだった。

しばらくして、ボレアリス海峡を渡りきると、大きな大陸がその姿を現す。

現界でのユーラシア大陸に似た形・大きさだが、そこに住まう住人達は、存在の根本からして違うのだ。

そして、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は、そこに住まう全ての幻想種を守りたかった。姉が作り出した理想郷・・・最近は、全然管理に手を入れていないようだ(それ故、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は書類地獄に嵌められていた)が、きっかけはともかく、種が自らの力で巣立ち、育ち、文明を築いていく様子は好ましい。

ある種『定められた存在』である自分たちでは、それが叶わないと知っているから、だからこそ、父が子を愛しているかのような情を、持ち得ているのだと言い切れる。

ムンドウス・マギクスは広い。

現界では見られない『まか不思議現象』が沢山存在する。

そして、時折、神の気まぐれか、時空の歪みなどで現界と繋がったりすることがあり、箱庭に迷い込んだ人間もいたりする。当然、送り返されるが、監視官、管理官などが手を打つまでに、見聞きしたことが、空想・妄想の類とされながらも情報として流失することがある。

また、箱庭の産物そのものが、現界に流出することもあるが、その際には、速やかに特務部隊が派遣され隠滅させられる決まりとなっていた。

何にせよ、現界とは無関係ではないのだ、この箱庭は。

そして、今、問題とされている『魔法使い』

かつては、彼らも迷い人であった。

迷信・妄想とされていた箱庭の情報を頼りに、偶然や自らの力で次元・空間の壁を越え、この世界にやって来た人間達。

それが、今、この箱庭に存在する『魔法を使役する人間』の祖なのだ。

彼らが出現（侵入）した当時、この箱庭管理評議会は紛糾した。

この箱庭には、もともと魔法という概念があった。

そして、魔法研究も盛んに行われていた、競われ、争われることもあった。

しかし、全ては神の掌の範疇たなこころであったし、安定したものであった。

だが、ここに『魔法使い』という不確定要素を許していいものか？神・仙人といえど、完全でもないし、完璧でもない。

であれば、人間とて同じことではないのか？

また、当時設立したばかりの学園関係者アカデミーからは、よい刺激になるのではないか・・・そういう意見もあり、結果、最高評議委員の判断

により可決された。

それから千数百年・・・魔法使いを含め、人間の数は、数億人を越えるまでになった。

村ができ、町ができ、国ができた。

沢山の国が隆起し没落し、統合や消滅を繰り返し、争い、和平し、今に至る。

そして、世界に原住民である幻想人種と、移住民である魔法使いとの垣根はない。

いつの間にか融合された文化・慣習は、ある意味、箱庭管理評議会を満足させる結果となった。

長い歴史の中で、円熟していく文明の構築は、やはり同じような進化を遂げるようではある。

ただ、現界より魔法文明に偏っているためか、何故か町並みは南国チックであるが。

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は、『情報は足で稼ぐんだ！と誰かが言っていた』ということで、オステイアにある酒場で飲み始めていた。

いつもの神官服から、旅人風の服装に変装？しているが、どこか違和感があり、目立っているようだ。

「お客さん、ここでは初めてみる顔だね・・・」

カウンターに座った宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王に無表情なバーテンダーが話しかける。街のメイン通りから奥に入ったさらに奥にある酒場、当然、この街の裏側に近い店の一つだ。

「旅の途中でね・・・観光がてら。そんな感じさ」

なにげない風に、またグラスに口をつける。

そう広くない店内には、カウンターとテーブルが幾ばくか。

店の人間は、とりあえず目の前にいるバーテンダー1人のようだが・

「・・・俺が言うのもなんだが、ここら辺は危ないですぜ。」

グラスをキュッキュッと拭きながら、無表情ながらも目は宿参ノ王スサノオから、奥のテーブルへと移す。

一応、警告なのか・・・店での騒動は勘弁して欲しいだろうが、客を気遣っているようではないと思われるのだが、その表情から真意は読みとれない。

ギギツつとイスを引きずる音がした後、男が二人カウンターまで近づいてくる気配を感じる。

宿参ノ王スサノオを挟む様な立ち位置で、カウンター席にドカツと腰を下ろす男達。

「なあゝにいさん、暇なら俺たちと、ちょいっとギャンブルでもしねえかい？」

余り小綺麗とはいえない格好をした、やや背の高い男がニヤツとしながら話しかけてきた。

まっとうな一般人なら気後れしてしまうであろう風貌の男達、所謂いわゆるチンピラである。

もう1人の男は、ガツチリした肉体派的な体格で、ネギ背せ負かってきたカモを逃がさない積もりのようだ。

「ギャンブル〜?」

少し酔った振りをしながら、胡散臭うさんくさそうな目で、チンピラを見返す。何処でもいるんだよ、こういうところにはさと、思いながら確かに時間はたつぷりあるのだ、精々からかってやるうと、チンピラ達の誘いに乗ることにした。

どうやら、常習的にココでは行われているようで、二人組がいたテーブルには、トランプが散乱している。

3人は、その席に座り直すと、ルールやらレートやらを確認し、バーテンダーに酒の追加を注文する。

肉体派の男が正面に座り、もう1人の背の高い男はディーラー役のようだ。

そして、ゲームはポーカー、交換は1回、掛け金の上乗せは3回までということ勝負は始まったのだった。

5枚カードが配られ、手に触れる。

そして、感じる微量の魔力。

初っぱなからイカサマの匂いを感じた宿参スサノオノ王であるが、黙って手にしたカードを確認する。

「チェンジ」

新たに2枚のカードを引き寄せる。

「レイズ」

ニヤツと宿参ノ王スサノオは口元をつり上げると、手元から銀貨を1枚取り出す。

男もそれに応じ、掛け金を上乘せする。

「ショー・ダウン」

宿参ノ王スサノオはスリーカード、男は1ペアであった。

「にいさん、ついてるね」

男は、全く悔しがることなくカードをディーラ役へと渡す。

どうやら、最初勝たせて、最後に根こそぎ奪い取る心づもりのようだ。

そして、再び勝負はスタートする。

「チェンジ」

「レイズ」

「コール」

無口に、無造作に、勝負を繰り返す。

じわじわと、しかし確実に、男達の手元から金貨・銀貨は数を減らす。

5回、10回、15回……

勝負は、回数を重ね、かれこれ20回は越えた。

宿参ノ王スサノオの手元には、金貨・銀貨が小山に。

対する男は、未だかつて無い焦りと動揺に、汗をぬぐっていた。

『 こんなのはずでは 』

そう、ふらりとやってきた旅人。

魔力感知に引つかからないことから、一般人であろう。  
ならば、と男達は思った。

自分たちの仕込んだイカサマカードでの勝負なら、いつも通り必ず勝てる。

そう、必ず勝てるはずなのだ！

カードに仕込んだ微量の魔力印で好きなカードを配る事が出来るのだ。

ゲームを支配するのは自分たちのはずであった・・・今までは！

「どうした、随分と汗っかきのようだが？」

スサノオ  
宿参ノ王の言葉に、男達の動機はさらに激しくなる。

自分たちのイカサマが見破られたワケではない。

そんな仕草は、欠片も見えないし感じない。

ならば、なぜ勝てないのか？それも1度たりともだ！

答えは2つ。

1つ目は、自分たちに見抜けないイカサマとしている。

2つ目は、自分たちのイカサマを撥ねる退ける強運が、目の前の人にあるのだ・・・と。

だが、負けるワケにはいかない、自分たちがここで生きていくためには、舐められるわけにはいかない。

そういう職業だからだ。

何をしてでも勝たなければいけない！

「俺が1度も勝てないなんておかしいじゃねえか！ああん！にいさん、あんたイカサマしてるな！」

睨みを利かせ、身体中に力を入れ、大声で恫喝する。

勝負に勝てなければ、テーブルをひっくり返せばいい。難癖つけてでも。

それが、男達のやりかた。

最終的には力づくでも、『勝て』ばいいのだから。

だが、それは目の前の相手に対して、最も選択してはいけない方法であったが、不幸な男達は、まだ気づけていなかった。

物語はまだ終わらない

06話 箱庭の中で（後書き）

・  
・  
・  
・  
妄想力に表現力が追いつかない。

## 07話 出発地点

.....

男達は、動けない。

突然、目の前が真っ暗になり、身動きが取れない。

そして、とんでもない痛みに、声が出せない。

万力に挿まれているような・・・そんな痛みが今男達を捉えていたからだ。

そう！宿参スサノオノ王の手で、それぞれが顔を掴まれていたのだ！

「があああああ・・・」

「自分の負けが込んできたからって、難癖つけてくるたあいい度胸だ」

そう言っつて、さらに力を込める。

「あぐあがががが・・・」

「このまま、握り潰すか・・・」

その言葉に反応するかのように、テーブルをバンバン叩いて暴れ出す。

だが、しっかりと顔を掴まれているためそれ以上の動きが出来ない。

『ギリ!』

一段また力を込める。

「おとなしくしないと……顔が……なくなるぞ」

その言葉の圧力と、顔を掴めれている現実が彼らを従順にさせる。

「今からお前達に質問する、正直に話せよ？嘘をついたら、このまま殺す」

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王が解放する殺気に、頷くしかない。

ゴクつと唾を飲み込む音が聞こえて暫くして、質問は始まっていく。

「お前達は、魔法を使えるな？」

「つ、使える」

「この街の裏の組織に属しているな？」

「ああ」

「この街にそう言う組織はいくつある？」

「い、五つだ」

「お前達の勢力は、何番目だ？」

「3番目くらいだ」

「お前達のボス会わせる」

「・・・・・・・・」

『ギリッ！』

「あだだだだだ」

「わ、わかった！」

その言葉を聞き、素早く手を男達から離すと、懐から取り出したクナイを真後ろに向けて投撃する。

『目にも止まらぬ』とはこういうことなのか、投げたモーションも霞んで見えたが、その瞬間には、クナイは既に突き刺さっていたのだから。

そう、クナイは、深々と突き刺さっていたのだ！

カウンター越しにいる、バーテンダーの左目へと！

身体を支配する意志の消失した・・・バーテンダーであったモノは、血液を空气中に飛散させながら、重力に贖あがなうことなく後ろへと倒れていく。

そして聞こえるのは、倒れながら、棚にあるビンを道連れに、地面へと崩れ落ちる音。

「おっと・・・思わず投げちまったか。」

まるで、タバコの灰を不意に落としてしまったかのような軽さ。

1つの命を消失させた男の言葉とは思えない。

いや、どうでもいいのだ。

宿参ノ王にとつて『男』に価値はなく、また自分に害意を向けたモノも同様に価値がない。  
それを知ったところで、今更意味はない。  
すでに彼は、輪廻の輪へと戻ったのだから。

「オレに殺意を放つと殺すよ」

真っ赤に輝く瞳で、目の前の男達を睨み付ける宿参ノ王に、心臓を驚掴みされたような恐怖で身動きが取れない。

本能は叫ぶ、速く逃げろと！

しかし、動けない、それもまた本能故！

男達は気づくのが遅すぎた、そのことに。

自分たちは、関わっていけないものに、関わってしまったのだと。

結局、有り金の全てを奪われ、身が軽くなつた男達は、変わりに恐怖をその身に背負い、後ろからついてくる宿参ノ王にビクビクしながら、アジトへと足を動かす。

打ち込まれた恐怖という名の楔が、魂に深々と刺さってしまった男達、従うしかない。

魂は叫ぶ、『決して逆らうな』と。

暫くして、3人はオステイアの中でも、少しは名の通つた商会の裏口から、地下への階段を降りる。

木製の扉の前で、背の高い男がノックをある間隔ですると、その扉の左側にある扉が開き、それなりの身なりをした小太り男が1人やってきた3人を怪訝そうに睨む。

「おい、こんな時間にどうした。それと、後ろの男は誰だ？」

小太りの男に睨まれ、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王に頼まれ案内してきたのだが、用件はボスに直接聞いて欲しいと、男達は汗を掻きながら話をする。

「で、あんた・・・なんの用だい？」

中に招き入れずに、扉の前でのやりとりにウンザリしながらも、その用心深さは褒めて良いと感じた。

「ここのボスに話がしたい」

「ボスは、いない」

「なら、呼べばいい」

「どこの馬の骨かもしれぬお前に従う謂われはない」

確かにご用聞きではあるまいし、その筋の組織であるココの門番が、はいそうですか と通せるわけもない。

「忠誠心は立派だが、こいつらに紹介を頼んだんだ。それでもダメかい？」

「だめだ」

「なるほど、なら押し通るだけだな」

そういうと、予備動作もなしに放たれた拳に殴られ、小太りの男は

吹き飛ぶ。

そのまま、室内へと侵入し、中にいた数名を睨みだけで押さえ込み、ズルズカとさらに奥にある扉へと手を掛ける。

豪華な扉を開けると、こざっぱりした感じではあるが、程々の調度品を揃えた大きめの部屋になっていた。

高そうなソファーには、新聞を読みながら、コーヒーを読む、やせ形で白髪の男がそこにいた。

「随分と賑やかだな・・・客人」

男は、新聞をテーブルへ放ち、しっかりとした目で、宿参ノ王スサノオを見る。

気後れも、怯えも、そこにはなく、堂々とした姿である。

「あんたが、このボスかい？」

先ほどまで放っていた殺気は消え去り、面白そうな男を見たとはかに、白髪の男をマジマジと見る。

にらみ合うというよりは、見つめ合うといった様子だが、白髪の男が先に切り出す。

「私がボスだとしたら、何の用なんでしょうか客人」

そこでまた、視線が交差する。

「ん・・・若いな。あんたはボスじゃないな、2番か3番ってとこか」

落ち着いた様子で、白髪の男を物言いと、落ち着き具合を観察した宿参ノ王スサノオは、そんな感想を男に伝える。

「だそうですが、如何致しますか？」

宿参ノ王スサノオから視線を外さないまま、口にする言葉。

誰に向かつて話しているのか？

しばらく、視線の交差と静寂と沈黙がその場を支配する。

「招き入れる」

天井に隠されたスピーカーから聞こえた声に反応して、白髪の男は立ち上がると、奥にある壁に手を当てる。

すると、それを認識したのであるうか、壁であったものが消え、いつのまにか扉がそこに出現したのだ。

「随分と用心深いんだな」

白髪の男が扉を開け、宿参ノ王スサノオに中に入るように促す。

思ったことをそのまま口にすると、中から、一見長身の優男が豪奢なイスから立ち上がり、『臆病者だからな』軽く応える。

書斎の隅にセットされたソファに誘うと、『飲み物を』と白髪の男を下がらせる。

「初めましてだな、俺は、サンソン。サンソン・レーヴェンブロイだ。レーヴェンブロイ一家の元締めをやっている」

「そうか。オレは、オナス。ある方の使いでここに来た。」

偽名で名乗りながら宿参ノ王スサノオは、右手を優男に差し出す。

二人は、上っ面的にこやかにしながら、ガシッと握手をする。

「では、ご用向きを伺いましょうか」

サムソンと名乗った優男は、警戒の念は解かないまま、にこやかに用件を聞き出そうとする。

サムソンだけにはわかっているのだ、目の前にいる存在が、人間でなく、亜人でも、霊の類でもないことを。

何故なら、この男、アジトの入り口に魔法認識ゲートを設置しており、アジトに侵入するモノが何者かを誰にも悟らせずにチェックする用心深さなのである。

故に、この書齋へと辿りつける者は、そのチェックの結果、判断した人物だけなのだ。

不合格または、不審者は、ここに来るまでに排除または、処理される。

そして、今日。

優雅な午後の一時を迎えようとしたとき、組織の末端構成員が『ナニカ』を連れてきた。

人でも、霊でもないものを。

人種・種族を網羅したデータベース上にない存在。

隠された魔力は測定できず、力ある者なのか、そうでないのかもわからない。

悪魔か、はたまた、新世界から来た亜種なのか。

サムソンは悩んだ、どうするべきか？

わからないものには、近づかないのが自分の主義である。

しかし、何故か湧き出る知的好奇心を、抑えることができなかったのだ。

直に見たい。

直に話したい。

その存在を確認したい。

それが、正解だったのか、過ちであったのかは、後に語られる歴史書に記されるのであろうか？

物語はまだ終わらない。

## 07話 出発地点(後書き)

.....

ストックないので、緩やかな更新になります。  
宜しく願います。

## 08話 とある街の裏側

.....

「お前の組織をこの国で、一番にすることができる」

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王が口にした、突然の言葉の大きさと重さに暫し呆然とする。そして、その可笑しさに思わず笑ってしまう。

この国、ウエスペルタティア王国は、この世界の起源ともいわれ、何千年もの歴史があるともされている。そして、ここは首都であるオスティア。

幾多の組織が跋扈し、他国からの諜報機関、闇の組織など、入り交じったある種世界の中心といってもいいほど情報が集まり、伝播していく希少な場所。

闇がうごめく最大の都市と言えなくもない。

その中でも一応、この街での勢力争いでは、第三位の勢力を維持しているのが、レーヴェンブロイ一家だ。

その15代目であるサンソン・レーヴェンブロイは、亜人と人間のクォーターであり、魔法ももちろん使える。

年齢は若く見られるが、亜人の血を引くため見かけ通りではない。表や裏で、何千もの手下を養っている手腕は、小国の宰相並とも言えるだろう。

剛胆にして老獪、それがサンソン・レーヴェンブロイの持ち味なのだ。

そんな男が考えること。

数多の情報から、損と得。

可能か不可能か。  
安全か、危険か。  
それは誰のためになるのか。  
組織の長としての責務。  
組織の維持、拡大。  
夢と野望。

色んなことが思考の渦となるが、結局の答えはでない。  
大きすぎるのだ、その言葉が指し示す先が！

ウエスペルタティア王国、メガロメセンブリア、ヘラス帝国とほぼ  
3分する大国の裏側。

その1つに、レーヴェンブロー一家の名が大きく語られることにな  
るのか？

はは、馬鹿げてる、できっこない、この街での立ち回りですら、難  
しいのに？

しかし、野望が無いわけではない。

いつか、この街で1番となることが自分たちの目標であることは間  
違いないのだから。

それが、『街1番』でなく、『国1番』となるだけではない  
か。

そして、目の前の男は、それができると言っている。

それを成す『力』もしくは、『策』があるということだ・・・

乗るか反るか・・・

「NOと応えた場合、どうなりますか？」

思考の海を渡りきり、率直に損得で判断しようと言葉は直球で投げる。

打者は、キチンと打ち返す。

「他の組織をNO.1にするだけだ」

「……その場合、ここはどうなりますか」

「跡形もないだろうな」

即座に帰ってくる回答は計り知れないほど重い。

サンソンは、決断を迫られているのだ、しかし、信用できるのか？  
他の組織の戦略ではないのか？

常識的な疑問が、心を疑心暗鬼とさせる。

もう少し情報と時間が欲しい……そう思うのも当然であった。  
目の前の男を分析しきれない……

「オレを……普通の物差しで測るのはやめておけ」

読心術なのか？

そう疑問を持ってもおかしくない。

「そうじゃない、だが、わかる。それだけだ」

急に全身を駆けめぐる寒気……

身の毛がよだつとは、このことか。

考えることに時間を使いすぎ、忘れないのか？

目の前に座っているモノは、人ではないのだぞ？

本能が警鐘を鳴らす、サンソンはわかっていた。

『もう手遅れだと』

逃げられないのであれば、開き直すしかない。  
そうやって窮地も何度か凌いできたではないか。  
腹を括りしかないのだと自分に言い聞かせる。

「条件を聞きましょう」

後は、どれだけ有利な条件で握手できるか・・・老獪な若者は、真剣な目で宿参ノ王スサノオの話スサノオを聞くことにしたのだ。

いくつかの取り決めをし、宿参ノ王スサノオとサンソンは手を握り合う。  
条件の殆どは、まずはこの街の全てを牛耳ることから始まることとなるが、それでも、旨味は十分にある。

思いの斜め上の好条件に、つい口が滑ってとしても、それは仕方がなかったと思われるが・・・

「もし、私が、あなた方を裏切るもしくは、謀たばかることがあったら・・・」

その言葉は言い切ることが出来なかった。  
急激に部屋に満ちる高濃度な殺気に、息が詰まったからである。

「逆らったら殺す。裏切ったら殺す。もし逃げたとしても、世界の果てまで追いかけて必ず殺す。ただそれだけだ」

裏の世界を渡り歩く自分にすぐさま『死』をイメージさせるこ

の殺気。

本能は理解している、逆らうことなどではしない。

「わ、わかりましたから！」

油断すれば喰いちぎられる・・・この『死神』に。

後は、精々生き残るために努力するだけだ。そう心に誓うサンソンであった。

そして、程なく、サンソンは自分の想像する相手の実像が、現実なのだと思い知る。

死神が舞い踊る7日間と後の歴史書に記される、オスティアの裏の激動。

レーヴェンブローイ一家と常に小競り合いを繰り返していた、NO・2の勢力のボスが急死。

突然、部下達がいる前で、喉を掻きむしりながら血の涙を流し、血を吐き出し、体中から血を流し、神に許しを請いながらも、顔を激痛に歪めながら息を引き取る。

さらに同時刻、別の場所でも同組織の幹部級が原因不明の急死を遂げる。

その苦悶くもんの表情を見た部下達は、巷ちまたに流れる『死神』の噂に恐怖したという。

都市伝説かもしれない。

昔なのか、最近なのか、年代も定かではないのに、何故か1度は耳

にしたことがある話。

田舎から出てきた1人の少女が、都会で恋に落ちた。

しかし、夢のような甘い日々は、突然終わりを告げる。

恋した相手が悪かった。

男は、三流詐欺師を繰り返すチンピラだった。

いつのまにか、見たこともない大金を借金として背負わされ、表の仕事だけでは追いつかず、夜のいかがわしい仕事まですることに。

それでも、惚れた弱みか男のために、身を粉にして、寝る間も惜しんで働く日々……

お金さえあれば……借金が無くなれば……そう思いながら、男のために少女は働き、年を重ねていく。

そんなある日、少女は見てしまった。

愛すべき男、将来を誓った男が、楽しそうに女連れで歩いているところを。

我を忘れて詰め寄る少女、しかし男は冷たくあしらひ、こう告げる。

『騙されるお前が悪いのだ』と。

少女は、嗤った。

私は何だったのかと。

汗を掻き、身を粉にし、寝る間を惜しんで働いた。

金を稼ぐために、好きでもない男にも抱かれた。

全てを捧げて生きてきたと言っても良かった。

もう、何も残っていない。

そう、私には、この汚れた身体と、虚ろな魂しか残っていない。

自分を呪い、男を呪い、世界を、神を呪った。

疲弊しきつた精神が、この世の全てを呪い尽くした。

その想いが叶ったのか、女は嗤いながら事切れた。  
そして、悪霊ゴーストになった。

しかし、肉体から解放されても、魂の苦痛は続いた。  
死して尚、苦痛に苛む悪霊ゴーストが、冥府より死神を呼び寄せた。

死神は、その憤怒の炎に包まれた魂の奥底に、悲恋に絶望した少女の涙を視た。

哀しい輝きに見せられた、死を刈り取るべく降臨した神は、少女の悲しみを掬い上げた。

死神は告げる。

汝の悲しみを糧に、願いを叶えよう・・・と。  
魂の奥底で涙を流す少女は、死神に願った。

『二度と私のような悲しみを生み出さない世界にして欲しい』

その願いを聞き届けた死神は、少女の魂を神の国へと送り出し、自らはこの地に残った。

死に神は誘う、死の国へ。

悪に染まり、闇に染まり、邪悪へ進化し、欲望にまみれ、人そのものを喰い散らかす存在の背後へと忍び寄る。

死に神プレゼントが与える死に様は、その身に刻みし罪の数、それに応じた苦痛と死。

そうして、刈り取られた魂は、冥界の奥にある『地獄の特別室』で終わることのない、許されることのない罰を受け続けるのだという。

earth to earth (土は土に)

ashes to ashes (灰は灰に)  
dust to dust (塵は塵に)

そして、魂の抜けた亡骸が地面に倒れ落ちた後、その場に残される  
焼き印。

壁に、床に、または、その身体に。

『ジユウウウウ・・・』

焦げた臭いと共に残されるその印が、死神の仕業であると、人知れ  
ず語られる。

瞬く間に広がる噂と実情。

世界の裏側に身を置く者、脛にキズのある者、または、何かしらの  
罪の意識を持つ者は、魔法とも、新世界の術とも違うその『奇跡』  
の所行に恐れおののく。

だが、多くの犯罪者達、裏に蠢く巨魁達は、鼻で笑う。

奇跡は1度だけだ・・・と。

そして、次の日から、レーヴェンブロー一家除く、全ての組織で同  
じことが起きる。

強欲なボスをもつ組織。

傲慢な幹部が力を振るう組織。

女を喰いものにする組織。

弱者から蜜を吸い上げる組織。

他人の不幸を餌に、自分の欲望を肥大化させた者から順に、苦しみ  
の果てに、冥府へと収監されていく。

それに伴い、オスティアの抗争は一気に加速。

噂はさらに加速する、オスティアに降臨した『死神』のことを、レ  
ーヴェンブロイが『死神』の加護を得たと。  
そして、7日の後、オスティアの裏側での勢力図は大きく塗り替え  
られていたのだった。

物語はまだ終わらない。

08話 とある街の裏側（後書き）

・・・

あれ、ネギまはドロに？

と思わず、お付き合いくだわい。

## 09話 闇からの漫食

.....

ここは、王族や貴族が主に利用するというVIP御用達の店。

メニューに金額など明記されるはずもなく、全て時価。

そこで振る舞われる全てのものが、金額に見合った素晴らしいものだと太鼓判を押される5つ星を許された、この街の最上級にランクされる超高級レストラン。

庶民が気軽に入ること、近づくことさえできない。

ある意味認められたものしか入れない、そんな店の一角で、祝杯を挙げる者達がいた。

「乾杯」

ワイングラスを片手で掲げ合う二人の男。

喉を潤す年代物のワインがグラスからなくなると、給仕がしとやかに注いでまわる。

男達の他に客らしき者は見あたらない。

変わりに、厳つい男達が、テーブルの対峙する二人のVIPを警護するかのよう、邪魔せぬ距離で控えていた。

「今回の結果に、オレは『一応』満足している」

王都オスティアの裏側をわずか7日間で、圧倒した男の言葉は、とても重く意味が深い。

その言葉に隠された、または含まれたモノを感じる頭の良さが無くても、この場には居れまい。

サンソンは、ワインを一口飲み込み、『モチロンです』といった顔で、対応する。

「これで、大方我々の勢力下に入ったでしょうが、全てを取り込んだわけではありません、少し時間は掛かると思いますが、追って掌握できると考えております」

自分の能力と組織の力、手札を全て使った結果に、サンソン自身も満足しているようだ。

多少の取りこぼしがあつたとしても、些細な<sup>ちがひ</sup>ことだ。

現時点の圧倒的な勢力を維持できれば、何も問題ないのだから。そう、維持できれば。

「お前を選んだことは、間違いではないかつたようだな。」

「ありがとうございます、オーナス様」

恐怖と圧倒的な暴力で今は沈静化している現状も、時間が経てば、騒がしくなることが予想される。

だから、その前に、なんとしてでも、目の前の男、オーナスの意に沿う形を作らねばならない。

何故なら、自分もその恐怖の対象と成りえるからだ。

「当分の間、忙しいままだろうが、それも力あるものの義務と思つんだな」

寝る間もないほどの忙しさ、謀略と圧力、支配力と組織力、金も使い、コネも使い、街の裏側に関して約7割は配下に置いた。全てはこれからだ。

少しの沈黙があつてから、謎の男オーナスが響き渡る声で語り出す。

その声は、直接・・・魂に響くような強烈さと、衝撃を与える。

「太陽は、強烈な光で世を照らす、月は、柔らかい光で世を照らす。その光が強ければ強いほど、影は濃くなり、闇は深くなる。ならば、その黒い世界が虐げられる謂われはない。『光と闇』それは共存することによって初めて世界に調和が訪れるのだ」

一息つき、ワインで喉を潤し、そして、グラスを高く掲げながらオーナスの言葉は続く。

「オレは、世界の裏側から、世に平和をもたらす存在を作る・・・闇を輝かせる存在、それが、  
『Ethiopian<sup>ユキビヤ</sup>ingra<sup>ニークラ</sup>』  
だ」

太陽神が生み出した、新しい世界で、初めて出来たと言われる国。ウエスペルタティア王国の初代女王、アマテルが語りし神話の一説。

世界に光あり、光あるところ、また闇もあり。

これらは相反しつつも、一方がなければもう一方も存在し得ず。

光は善ではない。

闇は悪ではない。

互いが互いに惹かれ合い、反発し合うことで世界は存在し続ける。

互いが愛し合い、認め合うことで、世界の調和は保たれる。

ウエスペルタティア王国から派生し、世界中へと生活の場を、移していった人達の中に刻み込まれた・・・忘れられた言葉。

サンソンもまた、その一説を先代から、今のイスを譲り受けたとき、語られたことを思い出した。

語り継がれる言葉は、それ自体が力も持ち、影響力を持つものだ。

会合が終わり、自分の書齋に戻って来てからも、オーナスの言葉が頭から離れない。

『Ethiopian<sup>ニイグラ</sup>igra<sup>ユキビヤ</sup>』直訳すれば、輝ける漆黒という意味だが、この世界の重要拠点には、それに関わる存在が、数多くいるという。

組織としての実態は不明、しかし、そこに確実にあるというのだ。サンソンもまた、その力を認められた証しとして、漆黒の宝石をあしらったブレスレットを拝領した。

まさに、自分の為だけに作られたようで、ピッタリと収まる。

そして、その宝石から伝わる波動が自身に力を与えてくれるようで、身体能力や魔力といった基礎ステータスが向上しているようだ。

オーナスは言った。

『組織内の階位が上がれば、より大きな力を得ることになるだろう』と。

オーナスは、恐るべき存在だが、自分たち日影に生きる者に力を与えてくれると確信した。

暗雲の中に、一筋の光を見た・・・そんな気持ちになっていた。

世界を股に掛ける巨大組織：『Ethiopian<sup>ニイグラ</sup>igra<sup>ユキビヤ</sup>』・・・その行く末に、自分はどんな夢を見るのか？

その為に、今、自分が出来る最大限のことを成し得なければならぬという、燃え上がるような使命感が、心を高揚させる。

そして、その日を境に、オスティアの街は大きく変わることとなる。

女も、子供も、また、力弱きものも、気力とやる気があれば、生きるステージをランクアップさせられる街に育っていく。

そこには、レーヴェンブロイ一家の支援組織が1枚噛んでおり、生活力向上をスローガンに職を手当していく。

好景気も相まって、停滞していた数年前を疑うかのように、活気づいていくのだった。

また、街の裏側においても、悪質、残虐、悪徳が過ぎると速やかに粛正される影の組織が蠢くようになり、その元締めもまたレーヴェンブロイ一家であった。

ユキビヤ Ethiopian ニイグラからの支援を受けたことが大きく寄与したが、表に、裏にと影響力を広げていき、その組織力は、数年でウエスペルタティア王国全土へと広がっていく。

レーヴェンブロイと言う名は、ウエスペルタティア王国の中で義賊、任侠の代名詞とされ、ボスであるサンソンは、裏街の英雄扱いであった。

ただ、その英雄も、『死神』に狙われぬよう、細心注意を払いながら生きる臆病者ではあるのだが。

そんなある日、裏街の英雄宛に、一通の招待状が届く。

宛名には、ユキビヤ Ethiopian ニイグラの文字。

行き先は、ボレアリス海峡付近にある島らしいが……

ウエスペルタティア王国とヘラス帝国の狭間にある街、オキブンバウンデ。

そこから、組織の幹部だけが通れるゲートで移動すると書いてあった。

そして招待内容は、『来い』の2文字。

当然、行かない……といった選択肢に未来は無いのだろうか。

着いた街から、専用のゲートをくぐると、出た先は、まさに絶壁の孤島。

高くそびえる岩肌が、世界と切り離された壁のようにも感じる。

地図には載らない『ウビモメスト』と言う名のこの島は、海から上陸することは叶わない。

硬く滑りやすい岩肌が、人の手を拒む。

魔法の力で飛翔しようにも、魔海流から発生する荒れ狂う竜巻と、島から生じる磁場の力が、魔力そのものを飛散させてしまうのだ。

誰の侵入も拒む島。

誰も足の踏み入れたことのない島。

地元の漁師や、船乗りからは、世界から隔絶された島、神の住まう島などとも呼ばれていた。

ゲートの先にある、白い洋館まで歩いていくと、中から、メイド服に身を纏った、キビキビとした動きの乙女達が、来訪者を迎え入れる。

「お待ち致しておりましたサンソン・レーヴェンブroy様。こちらへ」

案内されるがまま、メイドに付き添われ、部屋の奥へとついて行くと、その先にドアが見えた。

近づけど、近づけで、一向にたどり着かないそのドアを良く視てみると、余りにも巨大過ぎて、遠近感が狂わされていたことを理解する。

昔話に出てくる、古の巨人いにしえでも部屋に入れるつもりなのか？そんな疑問が湧くほど大きなドアだったのだ。

ススス……

巨大なドアが、音も静かに開いた途端、中から溢れる光の量に、思わず目を瞑ってしまふ。

恐る恐る目を開け、光を手で遮りながら中の様子を伺つと、中には既に、何人かの存在が目視できた。

とりわけ、一番奥にいる人物は、サンソンがこの世で最もおそれる存在であった。

「ようこそ、サンソン・レーヴェンブroy殿。我々は、貴君を朋友と認めますぞ！」

白色の導師服に身を包んだやや背の低い人物が、良く通る声で、サンソンを迎え入れた。

「ああ、ありがとう」と握手を交わすも、中にいるメンバーを目で確認すると、言葉を失う。

自分が座るべき席に案内されるが、驚きのあまり身体が動かない。

まほネットや、新聞、雑誌などでのみ顔と名前を知ることができる・そんな世界の超VIPと言われるメンツが何人が揃っていたのだから。

また、見たこともない人物もいるようだが、数年前までは、オステイアの片隅で生きてきた自分とは、遙かにランクの違う人間であることは間違いない。

サンソンが、やっとイスに座ることができたのち、まず最初に感じたのは、急激な喉の乾きだった。

物語はまだ終わらない。



09話 闇からの漫食（後書き）

・・・  
また、少し離れてしまったような気がします。

## 10話 円卓の使途達

.....

厳粛な空気に包まれた会議場に、定刻がやってくる。

「諸君、それでは始めるとしよう」

一番奥に座する宿参ノ王スサノオが号令を掛けると、その円卓についている全ての眼差しがその集まる。

『輝ける漆黒の使徒』

そう呼ばれるEthiopianエチピアingraイングラの最高幹部。

この魔法世界：ムンドウス・マギクスの裏側を支える者達を中心。地中に伸びる根のように、その細くとも確実に繋がるネットワークの根幹に位置する者達。

種族による特性もあるのだが、各自さまざまな能力の特化性を持ち、盟主オーナススサノオ（宿参ノ王）に最高の忠誠を誓う者。

「改めて、紹介しよう、王都オスティアに根を張るサンソン・レーヴェンブロイだ。『裏街の英雄』と呼ばれているそうだがな」

ニヤリつとしながら、サンソンを紹介し、その二つ名を浸透させた張本人に視線をやる。

見られた男は、何のことやらと意に介せず、ニヤリと笑い返すのだが。

そして視線は、サンソンに移る。

「皆様初めまして。只今ご紹介に与りましたサンソン・レーヴェンブロイと申します。若輩者ではありますが、よろしくお願い致します。」

裏世界の超VIPを前に、緊張しながらも、挨拶はとりあえずできたことに安堵する。  
イスに座り直すが、自らを観察するような視線に緊張は解けずいた。

こればかりは慣れるしかないか・・・そう思いながら汗を拭く。

「挨拶も済みましたな。これでサンソン殿も我ら『輝ける漆黒の使徒』となる。猿行者殿・・・」

白色の導師服に身を包んだやや背の低い人物が発した声に反応して、猿行者と呼ばれた・・・猿面冠者の面をつけた、赤い布地に金龍の刺繍が施されたチャイナ服を大胆に着こなし、露わになったそのラインを惜しげもなく晒している女性が、サンソンに近づき、目の前に小箱を静かに置き、そして、自分の席に戻っていく。

サンソンが、目の前に置かれた箱を、促されて開けると真紅の宝石をあしらったブレスレットに目を奪われる。

「漆黒と真紅。2つ揃って初めて使徒の証となります」

猿行者の澄んだ声で、はっと意識を戻し、手元にある宝石の力に手

が震える。

じいっと見つめていると、思考が、意識が、そして魂が吸い込まれてしまいそうなの。そんな真紅。

血液よりも濃厚で、それでいて透き通るその深い色合いが、なんともいえない。

ユキヒヤ  
Ethiopian<sup>ニークラ</sup>ingraの最高幹部が身につけるモノなのだ、ただの宝石でないことはわかるつもりだ。

後で知ることになるのだが、漆黒の石は、自身の能力向上を目的とし、真紅の石は、さらに能力の底上げと自動防衛と情報共有・伝達の機能もあるらしい。

色んな意味で、最高幹部を守る矛と盾の役割があるのだ。

様々な情報の流入に、てんてこ舞いしているサンソンを置いて、最高幹部会は進んでいく。

「メガロメセンブリアのほうに、きな臭いと報告があった。レッド、残月、皆に話せ」

マスク・座・レッド・・・

『忍術』を極め、潜入、追跡、諜報、暗殺など様々な能力に秀でる仮面の忍者。

真っ赤なマスクで顔を隠し、赤いマフラーを靡かせる様は、赤い疾風。

『この世で忍び込めぬ所はない』と豪語し、忍者軍団を束ねる若き棟梁。

何故、赤なのかと聞くと、『三倍速が可能なのは、赤だけだからだ』

とクールに応えるナイスガイだ。

「俺が調べた結果だが、ガーゴイルが動き出した節がいくつかある」  
レッドの言葉に、円卓の使徒たちが、やや驚きの表情となる。

組織でNo.1の諜報力を持つとされる、この男の言葉に嘘はない。  
尊大にして傲岸不遜、野望達成のためには、自分の部下でさえ平然と殺す非情さと、卑劣な手段すら『合理的に事を進めているだけ』  
と言い切る狡猾さを持つガーゴイルと言われる謎の男。

組織の力を持つとしても、その存在を正確につかむことが出来なかった。

新世界と旧世界を歩き来し、居場所を攪乱していることまではわかっているのだが・・・

「それについて私わたくしから・・・ガーゴイルの正体は今だ不明ですが、彼と彼の組織が狙っているものが判明いたしました。」

青い三角の魔術師御用達的な帽子を、ちょこんとかぶった、壮麗の美女。

白昼の残月と呼ばれる、儂げで、保護欲を刺激される女性だが、そのおたやかな外見とは異なり、その内に秘めたる魔力はとてつもなく、『独り魔導炉』とも云われる。

ノクティス・ラビリスにある、『遙かなる高まりの塔』に住まいし熟練の魔法使いなのだ。

年齢は、200歳とも300歳とも噂される色々と危険なお姉さんである。

アリアドネー魔法学校の理事も勤める魔法界の重鎮であるのだが、色香に騙される（本人にそんな気はない・・・はず）男が後をたたず、また保有魔力量に対する嫉妬もあり、放逐された過去を持つ。

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王に付き従うのは、他に理由があるらしいが……

「どうやら、彼の目的は、この魔法世界の征服または消滅。そして、この『蒼水石<sup>ソウスイセキ</sup>』が狙いであることも掴んでいます」

残月も持つ、握り拳よりも大きな、涙滴型の蒼い宝石。

宝石自体が淡い青く美しい輝きを放っている。

その宝石を、懐<sup>ふとく</sup>にしまうと、残月は、盟主の言葉を待つ。

「ここにいる皆知つての通り、残月の宝石は、至言の宝だ。なんとも守らねばならない、しかし、宿主<sup>やどぬし</sup>が残月である以上、オレが預かるワケにもイカン。しばらくの間、塔を最重点地区とし、衛生邀撃準備を怠らないようにしろ」

「ありがとうございます盟主。そして皆様、宜しくお願い致します。」

恭しく盟主オーナーナスに礼をし、続いて円卓の使徒達にも礼をする。使徒達からは、任せておけ、だの、大丈夫だ、などの声がする。

「追加情報ですが、『正義』という名の免罪符を力弱き魔法使い達に売りつけているのもガーゴイルである可能性がでています」

漆黒の使徒が皆、苦虫を噛んだ顔で虚空を睨む。

Ethiopian<sup>エチオピア</sup>igra<sup>イーグラ</sup>は、偽善団体ではない。

世界を裏側で支え、人々を平和へと誘き、世界の調和を目的とした緩人道的調和追求指向型の超極秘組織なのだ。

それに対して、世界各国にある、弱小組織では、『正義』を振

りかざし、悪行を平気で行つ愚か者が横行していた。  
正義＝善 の方程式。

彼らは、それ以外を否定し、滅ぼすことが世界の、そして、自分たちの為だと信じて疑わない。  
当然、目に余る悪行を輝ける漆黒の使徒達が許す筈もなく、人知れず、抹殺しているのだが……

人の心を惑わす魔性の言葉…… 『正義』

正義を口にすれば、何をしても許されるらしい。  
そう誤解されても仕方が無いほど、正義の名の下に、自分を正当化する愚か者達多い。

愚か者達は気づかないし、気づけない。

『正義』と呼ばれるモノは『1つではない』ということ。  
そして、正義は押しつけるものではないということ。

使徒達は云つ、『力無き正義に意味はなく、理想だけの正義などゴミ屑同然』だと。

使徒達は云つ、『正義に群がるゴキブリは、無駄に増えるから質が悪』と。

こうして、最高幹部会では、『ゴキブリは、見つけ次第殲滅』が可決されたのだった。

この決定が、世界を揺るがす大戦争に発展するとは、その時には誰にも予見できなかった。

物語はまだ終わらない。



10話 円卓の使途達（後書き）

．．．．．  
そろそろ．．．ね？

## 11話 神話と盟約

.....

「始まったスね〜」

「ああ」

「何でかしらねえ〜」

カウンターに座って、二人の美女と美少女に挟まれながら、虚ろに酒をあおる男から滲み出る、哀愁が場の盛り上がりを許さない。

ニヤンドマにある地味な酒場。

哀愁と仲良くしてる男は、もちろん宿参ノ王。スサノオ

長年の苦勞・・・主に部下に丸投げであるが・・・が水泡と化す自体が勃発。

そして、プライベートな残念会が、今ここで催されていたのだった。

「わちき達・・・頑張ったスよね？」

右側に座る美少女・・・チャイナドレスに身を包む、えんぎようじや猿行者こと、

ご存じ孫悟空。

彼女もまた、スサノオ宿参ノ王に丸投げされた懸案を推し進めるために、結構・・・頑張った。

「そつよねえ〜頑張ったわよねえ〜」

心ここにあらず的に相づちを打つのは、左側に座る美女、白昼の残月。

コンペで敗れた中間管理職的な思いが募る3人だ。

## 作戦名『女神の天秤』

Ethiopianigraエチオピアの超長期世界調和持続計画。

計画の目的は、世界を小さく揺らしながら、大きく偏った事象が起きないようにコントロールし、長期的な調和な世界を維持すること。

順調に推移していく計画に、漆黒の使途達は油断したと言っても過言ではない。

原因は、ズバリ、謎の男：ガーゴイルであろうことは間違いなく、彼が主宰する『完全なる世界』と称する秘密結社の非人道的行動に先手を取られたことだ。

メガロメセンブリア元老院執行部の穏健派を暗殺。

ウエスペルタティア王国国王の洗脳。

新世界への転移ゲートの破壊。

ヘラス帝国の政治中枢の籠絡と囲い込み。

その他、細かくは色々あるのだが、なんにせよ短期決戦的な力技で押しやられてしまった。

挽回しようにも、間接的な支配を旨とする漆黒の使途達には、3大国の頂点を直撃されたことで、一気に世界が傾こうとしている事態を、なんとか抑えようとするだけで手一杯な状況であった。

金と物を押さえることで、戦争自体を継続困難な状態にし、沈静化を図りたい。

最終的には、武力による介入も辞さないのだが、そうすることで崩れるであろう世界のバランスが読みきれない以上、今は、慎重に行動せざるおえない。

諜報部によれば、近々、大決戦が行われるらしいとの情報も入っており、どうするべきか頭を悩ましていた。

「最近・・・内政フェイズばかりだよな・・・」

「・・・そおつスね」

「そろそろ、暴れてもいいんじゃない？」

「わちきは別にかまわないっすけど・・・」

「けど？」

「やりすぎちゃっつスよね？絶対」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「「「はあ〜」」」

こんな感じで、昼間っから呑んでくれている3人？なのだが、『そろそろ酒の在庫が尽きそうだ』と青い顔をしたマスターに告げられ、どうしたものかと思案する。

スサノオ  
宿参ノ王的には、ココで解散して、猫耳族の美少女がわんさかいる会員制パブに移動したいところなのだが、お供兼お目付役の二人が離れてくれない、というか・・・ひつついている。

「そうっただわ、ここは、アレよ！旅行でも行きませんか？浮き世を

離れて、二人つきりで！ね？ううさまあゝいいでしょあゝ」

と腕に絡みついき……。

「だめっス！師匠を野放しはできないっス！わちきが姐さんに怒られるっス！」

と腰に抱きつく始末……。

なんだか、幸せの縮図がそこにあるのだが、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は知っている。こんな甘い時間が続いた試しがないことを。

『こんな時に限って』

という事態に巻き込まれるに違いないということ。

そして、それは、的中する。

『お楽しみのところ、大変恐縮です』

空中に現れた、近未来的なスクリーン。

本山情報担当士官からの通信に、『ああ・やっぱり』と思いつながら、超神衛通信で連絡を寄越す内容だ、なんらかの緊急性を持っていることは間違いない。

『ヘラス帝國 皇帝ロムスカより、盟約履行要請の術式が確認され

ました』

それだけ伝えると、スクリーンは消える。

神族専用超空間通信でのやりとりは、『手短に』がルールであるが、内容は驚くべきモノである。

神話は語る。

太陽神がこの世界を作り出したとき、共に生み出されし生命に加護を与えたもつた。

それは、火であり、水であり、土であり、風であった。

自然の力を担うべき精霊を、多く世界に使わし、生きる糧とした。

ある日、平和と生命に満ちあふれた世界に、初めて起こる戦争。

外敵と遭遇し、失われていく命。

侵略者との戦いに摩耗していく世界。

人々は、太陽神に祈りを捧げる……

世界を守護すべき管理神にその願いは届き、神は、力を行使する。

天は啼なき、海は荒れ、人々は恐れた。

神と神の軍団は、その強大な力で、外敵を悉ことごとく討ち滅ぼし、侵略者を殲滅する。

自らの命を犠牲にし、神への祈りを捧げる少女……当時の魔術・祈祷の術は命を糧とすることが普通であったが、神の降臨を見届けると、その命を失った。

しかし、祈りを捧げた少女の魂は、天高く昇る途中で、押しとどめられた。

降臨した神の奇跡の力で、少女は命を取り戻し、真紅の勾玉を授かる。  
神は告げる。

『この地が再び汚けがることあらば、その純粹なる血を糧に、我は再び降臨せん。これ神と人と大地の盟約とするなり』

これは、この世界に国という概念ができる随分前、神を崇め、自然に密着した生活がなされていた時代のことである。

『神の怒り』と『神の守り』を得られる盟約として、族長のみが、種族の秘匿として口伝で、伝えられてきた伝承と宝玉。

そして、その盟約を結びし種族が、今のヘラス帝國の王族なのである。

盟約が結ばれてのち、一度もその履行を促されることはなかった。

種族の危機は何度もあったが、自分たちの為だけに使って良い『

力』ではないと伝えられていたし、神の守りには、神の怒りも併せ持つ諸刃の剣なのだ。

その盟約が、今、履行されようとしていた。

いや、まだ、前段階だが。

宿参スサノオノ王は考える、箱庭の状況と命の消失率。

盟約の履行に値するかどうかを。

「本山に帰るぞ」

短く言った後、払いを済ます為に、懐から、金貨の詰まった袋を力ウンターに置く。

当然、この店は、組織の運営する酒場なので、秘密が漏れることは

ない。

外に出る・・・と思いきや、出口とは違う扉を開け、中に入り、さらに奥の扉をくぐる。

そこから、さらに地下へと進み、専用ゲートから本山へと移動するのだった。

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は、本山の執務室から、世界各地の漆黒の使徒達へ、指令を出していく。

勿論、オーナスとしての仮面をつけて・・・だが。

神話の再来予知伝達、世界の波乱についての予想と対策、戦争の短期決戦方法、戦後処理とその資金配分など、ひとまず動き出したら、やるべき事は山のようにあった。

当然、組織はフル稼働、収束へ一手を打つための準備は、上々のようだ。

世界の動乱収束の為の大舞台に携われると知り、幹部達はいつにも増して、眼がランランとしている。

こいつら、全員『M』か？と誤解されそうなくらい、気持ちよさそうに仕事している姿に、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は、やや引き気味だが。

物語はまだ終わらない。



11話 神話と盟約（後書き）

・  
・  
・  
・  
・  
・  
そろそろかな？

## 12話 神・・・降臨しせり

・・・・・・・・・・・・・・・・

「父上は、何をしておるのじゃ・・・」

ヘラス帝國の首都ヘラス。

その王城のさらに中心部、古の塔いにしへのと呼ばれる王族だけが入ることを許される建物。

塔といつても、石垣が360度に渡り積み上げられた広場。

その石垣の高さは半端ではなく、王城の高見の櫓からもその中を見ることが叶わない。

円筒型の古い壁に囲われた場所にあるのは、祭壇。

古き民が信仰する太陽神が祭つてある祠があるのみだ。

その中で、この帝國の主たる皇帝は、何日も籠つて何かしているらしいのだ。

『らしいのだ』というのは、この塔、王族といえど、王位継承権最上位の者しか入れない。

扉に掛けられた魔法が侵入者を拒むからだ。

故に、ヘラスの皇女テオドラといえど、王の許し無くは扉の前までしか近づけない。

扉の前を守る衛士と皇帝直属の近衛兵と共に、不安げに待つことしかできないでいる。

メセンブリーナ連合との戦いが激化してきた今日こんにち、戦いの最前線で指揮を執らねばならぬ皇帝が、こんなところに籠つておれば帝國全体の士気に関する。

兄達はその代理として赴いてはいるが、テオドラとしては気を揉む

毎日なのだ。

すると、古びた鋼鉄製の扉が内側から開き、やや疲労した皇帝が出てきた。

「テオドラ・・・今よりすぐ、身を清めここに来なさい。私も準備ができ次第ここに来るゆえ」

そう告げると自身付き従う近衛兵と共に居室へと去っていく。いったい何なのか？

中では何が行われていたのか？  
そんな疑問を抱きながらも、父である皇帝の言葉に従うよりない。テオドラは、急ぎ準備をするため、自らも居室へと足を向ける。

数刻の後、皇帝は先祖代々が受け継がれてきたという民族衣装を身にまとい、テオドラもそれに準じた衣装を用意されていた。  
しいていえば、時代錯誤な、原住民のような服装・・・とりわけテオドラの衣装は肌の露出が多く・・・というか、布地が少ない。  
街に繰り出せば、露出狂か痴女と後ろ指を指されかねない・・・そんな服装だが、王族が纏いし高貴なる波動により神秘的なるモノへと見るものを魅了する。

そして二人は、再び開かれた扉の中にその姿を隠す。

祠を中心に敷き詰められた幾何学模様には石畳。

そして、そこに施され奇怪な魔方陣。

古き文字で描かれたその綴りを、テオドラには解読できない。

「父上、ここはいったい？そして、今から何を？」

当然のように疑問をぶつけるのだが、時間が惜しいとばかりに、皇帝は手をかざす。

「よいかテオドラ。これから行うこと、語られる言葉は、王族の秘中の秘。本来なれば、私が独りで行わねばならぬところであるが、その資格を半分消失してある。それ故、その半分をお前が補うのだ。」

そういわれ、手渡されし真紅の石。

王が王たる証として、受け継がれ宝玉。

テスラの王は、この石を身につけて初めて皇帝を名乗れるのだから。その石から伝わる神聖な波動を受け、身が竦<sup>すく</sup>む思いがするのは気のせいではあるまい。

「オペレ！デビレービ！」

その言葉に反応し、祠を中心とした石畳に光が籠る。

「デエルス ウティナミク アブメモラービ クワエレン ファイブ  
ース デイフブース ウィスベニ ウィスベニ ウィスベニ……」

父が唱える古代言語。

そこに込める魔力は、全身全霊をかけたもの。

ビリビリを感じるその波動に、テオドラは身を硬くする。

そして、呪文がその効力を発揮したのか、魔方阵が、赤い光を帯び始める。

それと同時に、手にした宝玉から漏れる赤い輝きが急激に膨張し、天空へと突き抜ける光の矢となる。

空を覆っていた雲が裂け、光の渦が降り注ぐ。  
眩い光の柱が……天まで伸びているようにも見える。  
余りにも美しい、美しすぎる光景に息を呑む。  
今まで見た、どんな景色、絵画よりも神秘的で、魂が震えるような  
感動を覚える。

そう、魂の震えがそこにあつた。  
血が騒ぐ、心が震え、身体が震え、喉の渇きがやってくる。  
これはなんだと自問するが、驚愕によって思考がそこで止る。  
光の中に何かが見える。

そう、巨大な何か遣つて来た！

今まで、感じたこともない強大で破壊的な魔力。  
神聖な存在であると本能的には知覚しながらも、恐れずにはいられ  
ない。

大気を振るわせるその波動に、周りを囲む壁が軋む。

城の外からも見えるであろう、この光の巨大な柱を。

見たものは恐れるであろう、この現象に。

空と大地が、光の柱でつながれたその光景に。

その光を見たものは無論、その波動を感じたものも、恐れおののく  
であろう。

まるで世界の終わりを感じさせる1シーン。

魂の欠片に少しでも、太陽神の加護を受けし生命は、大地にひれ伏  
すであろう。

獣は静まり返り、精霊は鳴りを潜め、人もまた同じく動くことすら  
できない。

かろつじて呼吸を許される……そんな状態に置かれていた。

光の中から映し出されしその姿は、古の伝説、伝承にある世界を災厄から守りし神。

強大無比にして無双の破壊神、あまねく遍く海を治めし暗黒の金剛羅漢。  
天馬を駆使する黒龍眼、神将 オルバトウススサノオ降馬頭主宿参ノ王がここに降臨したのだ！

天空より降臨し神の姿にひれ伏しながら、皇帝ロムス力は、神に届きし願い盟約の儀が成功したことに安堵する。  
だが、その傍らかたわで神の姿を見つめ続ける娘のことを忘れていた。

「なんじゃ！？なにが起きているのじゃ！」

何の説明もないまま、父に言われるがままにこの場に存在するテオドラには、事態がまったく理解できなかった。

本能では知覚しているのだ、目の前にいる存在が『神』であることは！

しかし、そのことに冷静でいられるほど年齢も経験も重ねているわけではない。

混乱にし、取り乱したとて、攻められることではないだろう。

「我、古の盟約いしえにより、ここに降臨しせり。古の血いしえを引きし民よ、汝の願いを述べよ」

ビリビリと感じる言葉にこも籠りし聖なる力と霊圧に気を失いそうになるが、気丈にも耐えてみせるだけの気概はあった。

傍らの皇帝は、王としての威厳と王威でそれを受け止める。

「神よ、我々古き民を侵略者よりお守りください」

皇帝の言葉の意図を宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は考える。

今、この世界で争う二つの勢力、南の古き民「ヘラス帝国」と北の新しき民「メセンブリーナ連合」。

しかし、古き民の血は、新しき民にも混じり、世界に広がっているのだ。

故に、北の民は非亜人とは言い切れない。

簡単に割り切れるならば、超極大広域殲滅魔法を放てば済むことなのだが……

北の民には、新世界からの移民が多い。

とりわけ、魔法使いとされる者たちの横行は目に余るようになってきた。

中には、高等魔術と称して、魔族や異世界の魔物を強制召喚し、戦力としている者もいた。

正規の手続きを踏まぬ……つまり契約という双方合意による使役関係を結ばぬ強制召喚は、召喚師の精神力・魔力はもちろんだが、この地に流れる地脈の力を多大に必要とする。

そのため、強制召喚の乱発は地力の衰えを招き、しいては、世界を破滅へと導く邪法であるといえる。

アリアドネーにある魔法研究所では、強制召喚魔術は邪法とされ厳重に管理されているが、メガロメセンブリアでは、そうではない。

逆に、個人の持つ魔力が少ない魔法使いほど、強制召喚魔術に偏る傾向があり、その研究は進んでいると言える。

近年では、地脈の力を魔力変換し、強力な攻撃魔法を使役する者も出てきており、危険視はされているのだが。

地脈の力は無限ではない。

魔法使い達は、無尽蔵にある力としているが、その行為が、『無

銭飲食』となんら変わりがないことに気づいていない。

しかし、そのツケは確実に大地を蝕んでおり、このままでは、地力の低下によって、魔力リンクがキャンセルされ、太陽神の手を離れるかもしれない。

そうなれば、神の魔力あつてのこの世界に、破滅と荒廃だけが残る結果となる。

つまり、ここでいう侵略者とは、『この世界の魔力を無駄に浪費する魔法使いを指す』と解釈できる。

なるほど、長い目で世界の危機であり、ここでヘラス帝国が負ければ、その危機はもっと早くやってくるだろう。

であれば、神の力を行使することに依存はなく、盟約の履行は問題ないといえる。

しかし、現状の高天原モードでは、世界そのものを壊しかねない。なんせ、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は、手加減が苦手だから。

つつい、やりすぎて（壊しすぎて）怒られることが多いという実績を持つ破壊神なのだから。

数発広域魔法を撃つたのち、出雲モードに切り替えるしかないか・  
・めんどくさそうに考える神がここにいた。

物語はまだ終わらない。

12話 神・・・降臨しせり(後書き)

。うわうわ、うわうわ。

### 13話 神の怒り

.....

ヘラス帝國は、軍事大国といってもいい。

1国で抱える師団の数は、世界でトップクラスであり、軍事に関する人間に数も桁違いである。

種族における優劣はあるのだが、成長過程や寿命が亜人とされる者たちは、純粋な人間とは違っており、その熟練度もおいても桁違いになってしまふ為である。

そして、それに対抗するように、メガロメセンブリアと中心とした周辺諸国は連合を組み、協力体制を敷いた。それが、メセンブリーナ連合なのである。

もともとは、先住民族と、移民たちは、ある意図をもって、別々の大陸にて住み分けがなされていた。

2大陸は、コンテレンペスタージ海峡を隔て、じっくりと歴史を重ねていく。

しかし、オスティアとメガロメセンブリアの友好が始まると事態は一変する。

それは、大陸を繋ぐ橋、グレートブリッジが建設された為である。

オスティア側は、南北の友好と和平の架け橋の為に。

メガロメセンブリア側は、長期的な侵略の為に。

思惑の違う二つの国は、水面下ですれ違いながらも、その目的を果していく。

そうした、暗躍（主にメガロメセンブリアが中心だが）の果て、メセンブリーナ連合はさらに勢力を拡大し続けていったのである。

そんな中、『アルギユレー・シルチス亜大陸進行』と呼ばれる戦争の発端は、小さなきつかけ・・・边境でのイザゴザが原因・・・で、始まってしまっ。

後の歴史書では、『戦争を吹っつけたのはヘラス帝国』とされているが、そこに、メガロメセンブリア元老院の暗躍が無かったとは言い切れない。

冷静に考えると、元々大陸で覇を唱えるヘラス帝国に、戦争や侵略に旨みが多いわけでない。

戦争における浪費と消耗を考えれば、明らかに『得』があるのは、メセンブリーナ連合であり、メガロメセンブリア元老院と中心とした魔法使い達であると容易に想像できる。

そして、現在。

始まってしまえば、後は勝つしかなく、力押しで、メセンブリーナ連合をコンテレンペスタージ海峡まで押し出し、オスティアの奪還することで、南大陸の殆どをヘラス帝国の支配下に置き、短期間で戦争を終了させようと考えていた。

しかし、ヘラス帝国軍は、オスティア攻略戦を展開するも2度も失敗し、国境までの撤退を余儀なくされる。

それは、メガロメセンブリア元老院の暗躍により、帝国中枢への工作が効果を発揮し、帝国は高級将校・政治中枢たる議員の籠絡と囲い込みに成功していたからである。

そこで、戦争の長期化が懸念される中、皇帝の決断により、帝国は、最終決戦用『大規模転移魔法』の実践投入を敢行し、オスティ

ア攻略戦に終止符を打とうとしていた。

しかし、大規模転移を成功させるためには、転移先に広大な土地が必要とされ、その予定地には、当然メセンブリーナ連合の軍隊がひしめき合っているのである。

「つまり、我に戦争終結の諸端を作らせる……ということであるな？」

宿参ノ王<sup>スサノオ</sup>は、空中より、皇帝ロムスカを睨む。

神である、このオレに露払いをさせるとは良い度胸じゃねえか……そう考えもしたが、民族間戦争の最終決着は自分達の手でつけたい……という思いもわからないではない。

ならば、派手に見せ場をつくらせて貰うとするか……宿参ノ王<sup>スサノオ</sup>が手をかざすと、ロムスカとテオドラは透明な球体に包まれ、天空へと強制的に連れ去られた。

シャボン玉のような透明な球体の中で、父とその娘は、これから行われるであろう神の奇跡がどんな形で行われかを考えるが、先祖が歴史書の記述だけでは、想像の域を超えることはできない。

巨大な神の輝く姿を真直に見ながら、改めて『神』という存在を知覚するのであった。

神とその盟約者たちは、またたくまに、オスティア上空に移動し、眼下に見える大陸の様子を確認する。

ウエスペルタティア王国の北端、グレートブリッジを挟み、メセンブリーナ連合の軍隊が進軍を開始していた。

宿参ノ王は、そこにある者全てに声を届ける。

その霊圧により、人々は本能が持ち得る『 怯え 』というものを感じた。

何故なら、それは神の怒りが籠った言霊であり、決して購う事ができないことであるからだ。

「我は、オルバトウススサノオ降馬頭主宿参ノ王 神に仇なす愚か者どもに、その怒りを与えしものなり」

光り輝く巨大な神の姿をしたものが、突如、天空より飛来し、脳裏に響く言葉。

しかし、明らかに物理法則を無視した姿に、心の強気者、精神の強いもの、または、魔力の強いものなどは、侮蔑または、失笑の表情をしていた。

ある者は、幻聴・幻惑の魔法であると断じ。

ある者は、帝國の罫であると思ひ。

ある者は、新世界の術の類ではないか、と想像し周りを鼓舞しようと勤めた。

だが、その全ては間違いであったし、彼らはそんなことよりも、すぐにでもするべきだった。

そう！『逃げる』ということ。

それも、素早く、どこか遠くに！

スサノオ宿参ノ王の姿がそこにある者に認識されたことを確認し、神の奇跡を行うべく、広域殲滅魔法の詠唱を瞬時に終わらせる。

それは、原始の炎であり、神の怒りであった。

新世界にて、旧約聖書で記されるソドムとゴモラを滅ぼした天の火であつた。

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王が指し示すその先に、現れたのは、外宇宙から召喚せしもの。

『 直径1キロほど小惑星 』であつた。

真つ赤に燃え上がるその炎の塊は、地上から見れば太陽に見えたかもしれない。

そして、それは、緩やかな落下速度で、グレートブリッジを越えていくと、突然、空中で爆発する。

6000度の高熱で熔けながら、その場一帯に降り注ぎ、ばら撒かれる小惑星の欠片。

水を蒸発させ、岩を溶かし、土を溶かし、人を溶かす。

あらゆるものを溶かしながら、もしくは、焼きながら、その地にある全てに。分け隔てなく与える消滅という現実。

まるで火山が噴火した後に残された大地に様変わりしたそこには、命を有する生物は存在していなかった。

真つ黒に焦がされた大地は、まさに地獄の様であつた。

上空よりその一部始終を見ていた・・・いや、見せられていたロムスカとテオドラは、神の奇跡が、怒りが、いかに強大無比で、とんでもないものだということを脳裏に焼き付けることとなつた。

自分達の願いがもたらした結果に、気を失いそうになる。

神の怒りが落ちた場所には、何も残らない。

人も、動物も、虫も、草木も、土も、水も、空気さえも、その全てが無に返るのだ。

『 時は今 』

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は、そう伝えたと、瞬時にロムスカとテオドラを、王城へテレポートさせる。

そして、王城に待機する全ての将兵を、大規模転移魔法で送り込むべく指揮をとらせるのだった。

対岸にて、神の怒りを見た・・・生き残ったメセンブリーナ連合軍は、浮き足立った。

まさか、帝國が、このような攻撃手段を持っているとは露知らず、戦力の大半が消滅したといってもよかった。

神が、本物かどうかはわからないが、もたらされた現実は、信じないわけにはいかない。

地獄のような大地に変わり果てた友軍がひしめいていた場所を、呆然と見詰めることしか出来ないでいる。

そうこうしている中、帝國の最終決戦用『大規模転移魔法』により転移された帝國軍が終結し、メセンブリーナ連合軍を攻撃し始める。

心を折られた連合軍に、抵抗する力は殆どなく、数刻もせず、その場にかかる勝ち鬨が、帝國の大勝利を現していた。

物語はまだ終わらない。



### 13話 神の怒り（後書き）

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
物語内の時間経過速度が遅くてすみません。

## 14話 少女の願い

.....

魔法世界における戦況は、一変した。

それは、もちろん宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王の広域殲滅魔法によってだが、それをきつかきにヘラス帝國軍は勢いを強め、直接メガロメセンブリアを攻めることも可能かと思われた。

そして、そのことは、各国の内部事情を露わにするきっかけとなるのである。

まず、メセンブリーナ連合であるが、トップであるメガロメセンブリア元老院執行部は、紛糾していた。

緊急報告にて知ることとなった、消滅した連合軍の事ことである。そして、規模・威力もさることながら、その情報を一切漏らさずに電撃的に撃ち込まれた戦略級広域攻撃魔法の存在について、である。もし、それが、この首都である、メガロメセンブリアに直接撃ち込まれた場合はどうするのか？どうなるのか？そんな不安や疑問が持ち上がるのは当然のことであった。

超巨大魔法都市国家の威信に掛けて、その攻撃から首都を守らなければならぬし、戦略級障壁は設置してあるものの、報告にあった広域攻撃魔法の威力に負けない保証は無いのだから。

また、その規模の広域魔法は、何十人も魔法使いが、何日も掛けて準備し発動させるものである。

その情報が、内通者を通じてこちらに知らされなかったことの、怒りと怯えもそこにはあった。

生き残った兵士からの報告書には、『神が現れ、太陽が落ちてきた』と書かれている。

平時であれば、笑い飛ばしていただろうし、そんな報告すら気にしないだろう。

なにをバカなことを・・・そう考えるであろう。

しかし、連合の魔法研究所の極秘開発チームでの分析を照らし合わせると、幻術の類ではなく、現場での残留魔力は、測定不可能という恐るべき結果であった。

軍事大国ヘラス帝国の底力を垣間見たようだ。

太古の昔より存在する、ヘスラ王族が伝える秘宝や秘術。

眉唾の幻想や神話における過剰記述、または、誇張の類であると考えられてきたが・・・。

（メガロメセンブリアでは、亜人を侮る傾向が強い為）  
ウエスペルティア王国が持つとされる秘密と共に、是が非でも手に入りたい。

それが、メガロメセンブリア元老院執行部の目的であり、世界征服の第一歩であった。

知識欲、独占欲、に支配されているメガロメセンブリアの魔法使い達は、ここで、傭兵や新世界からの増援追加を決め、戦争は長期化の様子で呈していた。

そして、ヘラス帝国では、最前線での勝利に沸く民衆をよそに、帝国中枢にて巣くう害虫・・・いや、高級将校・上級執務官などの存在をどうにかせねば・・・と悩む皇帝の姿があった。

所詮、戦争での勝利など一時のこと、その後の帝国運営のほうがかに問題であった。

このまま、では、帝國は内部から食いちぎられてしまう。  
離反者が内乱を起こせば、ここぞとばかりに連合は攻めてくるだろ  
う。

王族とそれに従う者達は、離反者と連合、2つの敵を同時に相手せ  
ねばならず、その先に勝利をもたらすことが非常に困難であると簡  
単に予想できる。

この勝利を機転に、一気に攻め進められればいいのだが、皇帝の思  
惑通りに軍部は動かない。

内部の敵を排除するのが先か、外部の敵を排除するのが先か、皇帝  
は迷い続けている。

皇帝としては、圧倒的な『 皇帝が呼び出した神の力 』に恐れお  
ののいた両者が、このまま大人しくなることが最良だったのだが、  
現象面だけでは、弱かったようだ。

再び、奇跡にすぎることも考えたが、あの時見た光景は、耐え難く、  
敵といえど、あのような死に様をさらさせるようなやり方は、同じ  
世界に生きるモノとして賛同できるものではない。

そして、その頃、<sup>スサノオ</sup>宿参ノ王は……

ヘラス帝國の城内部に設けられた特別室で、皇女テオドラによる歡  
待を受けていたのだった。

戦時中にも係わらず、大歓待といっても良いほど盛大に振る舞われ  
ていた。

<sup>スサノオ</sup>宿参ノ王を中心に、大胆な服装の美女たちが、周りに侍り、高級食  
材をふんだんに使った料理に酒、男なら誰でも憧れる酒池肉林的ウ  
ツハウツハな状況が……今、まさにここにあった。

そして、当然のように、<sup>スサノオ</sup>宿参ノ王の真横で、酒を注いだり、食べさ

せたり、垂れ掛かったりと、世話をやいているのは、テオドラ自身であった。

皇女テオドラはいった。

「大神官殿に粗相があつてはいかんのじゃ！なれば、妾が相手するしかあるまい！」と。

王族としても使命感からか、大いなる力に恐怖したからか、わからないが、宿参ノ王スサノオがこの姿に落ち着いてからは、何があつても側におり、片時も離れない。

何故、こうなつたのか・・・それは、数刻前のこと。

盟約履行による神の奇跡が大地に振り注いだ後、2人と1柱は、再び、ヘラス王城にある古の塔いにしえに戻ってきた。

本来であれば、このまま宿参ノ王スサノオは役目を果たしたとして、天空へと帰っていく予定であつた。

しかし、そこにいた、もう1人の王族 皇女テオドラが・・・手に持つ宝玉を握りしめ、願つてしまった。

それが、意図してなのか、無意識なのかはわからないが、盟約の条件を満たされた場所で、純血を保つ王族の血筋にある彼女が願うその思いは、言葉に出さなくとも、真紅の勾玉を通じ、宿参ノ王スサノオの胸に届いたのである。

そこには、悲しさがあつた。

そこには、寂しさがあつた。

そこには、苦しみがあつた。

そこには、悩みがあった。  
そこには、驚きがあった。  
そこには、怖さがあった。  
そこには、怯えがあった。

そして、そこには、憧れがあった。  
そして、そこには、強い願いが込められていた。

『こんな強い神様が、ずっと側にいてくれたらいいのに!』

なんといつても、宇宙開闢以来200億年が経過し、そこに存在する世界は多種多様であり、その中で担う神の役割とは、これまた多種多様を極めた。

原則として、管理神の資格がある1柱が中心となり、いくつかの宇宙又は、惑星群を受け持つこととなる。

(地球は、特別環境保護対象惑星であるため除外)

そして、この魔法世界、太陽神より管理神の委譲を受けた(強制的に)宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王の管理下にあるのは、ご存じの通りなのであるが・・・

各世界の管理神が与えた神具・・・この場合、真紅の勾玉を指すが、それを媒体とした強い願いは、大本山(神様が集う大陣営)へ送られる。

そして、『 願い事管理事務局 』にて、願いの可・不可をマニュアルに準じてジャッジし、申請許可を与えるのである。申請許可が下りたモノは、各管理神の住まう本山に転送され、その『 願い事管理官 』により各部署に回され、履行される仕組みなのだ。

強い願いを叶えると、神族側のエントロピーが増大するので、比較的、神頼みはバカに出来ない程度に叶えられている。

そして、一応、想いが強ければ強いほど、強力な拘束力と実行力を持つ（ハイリスク・ハイリターンということ）のだが、神が直接力を行使するモノ、命に関わるモノは、管理神がジャッジをするのが決まり事となっている。

ところが、ここで、不幸のメリーゴーランドが作動していた。

この日、願い事管理官が二日酔いで、遅刻。

上司に怒られながらも、溜まってるデータを急いで処理するべく、手と頭をフル稼働。

そして、一息ついたところで現れる、気のゆるみ。

細々とした願いの中に紛れた大金星。

いつも通り、『はいはい、許可許可』とマウスをクリックすると・・・そこに現れた大本命。

ミスに気づいた管理官は、真っ青になりながら、上司へ報告。

上司は、また、その上司へ報告。

まさに、お役所仕事・・・

「一度受理された願いが、取り消しになった前例はない」

前例と責任問題を嫌う、大本山の願い事管理事務局 事務次長（280012歳）は、こう述べて、申請をそのまま履行するよう指示。

そうして、本山に戻ってきた願い事は、正式に受理されることになったのである。

当然、受理された報告は、直ちに宿参ノ王スサノオ伝わるが、その時点ではどうすることもできなかったといえる。神といえど、定められたルールは守ることが原則だからだ。

宿参ノ王スサノオは、一端、高天原モードで、现し身アバターを造ると出雲モードいしせに切り替え受肉する。

傍目には、天空に光り輝く巨大な神が、地上に降りるにつれ圧縮していき、光が収まった後、そこには、純白の神官服を身に纏い、2対の羽を背負う青年が現れたようも見えたであろう。

「娘よ、汝の願いは叶えられた」

神将　オルハトウススサノオ降馬頭主宿参ノ王再びここに降臨。

物語はまだ終わらない。



## 15話 神と願いの関係

.....

「娘、汝の名はなんと申す」

キラキラと輝くオーラを纏った宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王に問われ、「え？」という表情で固まっている。

しかし、それも束の間、気を戻し、王族としての気品を損なわぬ程度ではあるが、テオドラは自らの名乗りを上げる。

「ヘラス帝國第三皇女 テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアと申します」

『なんでこう・・・王族や貴族といった生き物は・・・長い名前になるのだから・・・普通、覚えられねえよ!』

発祥が日本系の神である宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王にとっては、昔から思っている疑問の1つだ。

いったい誰が最初にこんなことを考えたのか、全くもって不可解だ。そんな風に思いながらも、自らに課せられた義務を果すべく、霊圧調整をしながらも、どうするべきか・・・と考えを巡らせる。

従来どおりであれば、このような神を1柱縛り付けるような願いは、無効のはずだ。

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王<sup>スサノオ</sup>の神であれば当然のことだが。

これが妖神や仙人クラスなら、まだ、ギリギリ、なんとかセーフかも?といった感じになるが・・・

それは、神が留まり続けることで、その土地や環境に及ぼす影響の

過大さと、各神に与えられている責務が果せなくなることが問題になるからである。

だが、無効になるはずの『お願い』が承認されてしまった。(その背後にどんな流れがあったかを、宿参ノ王は知る由もないのだが)つまり、この件には、あるやんごとなき方の意思(主に悪戯的なものだが)が、そこにあるということに間違いはない。

実は、天界トップクラスの破壊神と呼び声高い宿参ノ王スサノオといえど、逆らえぬものがある。

それは、姉である大神と女神・・・2柱の存在だ。

(宿参ノ王スサノオは、気づかれていないと思っっているが、皆知っていたりする)

現実世界でもそうかもしれないが、弟は姉には勝てない・・・それも2トップなら、なおさらである。

忍びに忍び、耐え難きを耐え、いつか花開くその瞬間ときまで・・・と思っっているかは定さだかではないが、なにせよ勝ち星がいままで1つもないことは事実だ。

そして、件くだんの『 願ねがい事管理事務局 』。

どこかの偉たかあゝい女神様が言いました・・・

『 困こまってる方なたの願ねがいを叶かなえるって良いことだし、気持ちいいわね。もっと、ジャンジャン叶かなえちゃいましょうよ！ 』

今まで、各世界、次元を管理する管理神の裁量(気まぐれ)に左右されていた『 願ねがい事業 』が、その言葉で、大本山直営管理の元、一定数のノルマを課せられる神もいるほどの、運用と結果を

求められる厳しいものになってしまったのだ。

当然、その余波に巻き込まれた哀しい1柱……宿参ノ王スサノオに科せられた運命は、端から見るに喜劇、本人にしてみれば悲劇が待ちかまえていた。

大本山総務局が、100念に一度集計する『 エントロピー増減報告書 』で明らかになる各神の営業成績……というか、努力結果、多大な貢献が認められたものは、階位が上がるなどの報償もあることから、結構今でも、積極的に頑張っている神は、かなりいたりする。

しかし、頑張らない神もいる訳で、まあ、神にも得手不得手があり一概にはいえないが。

そして、我らが宿参ノ王スサノオは、めんどくさがりなワケで。酒飲んだり、遊び回ったり、引き籠もるの大好きなワケで。

能力はあるけど、仕事はしたくない神……自称No.1を誇つてる駄目神なワケで。

そうすれば、当然、成績は……ガタ落ちなワケで。

その結果、どこかの偉あ〜い女神様が言いました……

「 ワースト10に入る快拳を成し遂げた弟に、私は深く感動したわ！ 私からのご褒美を存分に受け取りなさい 」

願事管理事務局の局長室で、プルプルと拳を振るわせ、真っ赤な顔で、端正な美貌を歪めながら、弟に告げた女神がいたそうです。

そうして、宿参ノ王スサノオ自身の平和は終わり、姉の『 お願い 』という名

の指令で動く馬車馬となり、今に至るのである。

ただ、その姉の指令を遂行することで、自由は捨てた（捨てられた）が、地位や称号はかなり上がった。

なので、今では名実共に、かなりお偉い神様といえるのであるから、姉の深い愛・・・恐るべし。

ちと、邂逅が長くて恐縮ですが、目の前にて緊張の面持ちな皇女テオドラに対しても、科せられた任務は果たさねばならない。

適当にごまかして、後ではれたら、トンでもない目に（姉から）遭うことは確実だ。

そして、実際何度も脱走（自由への）を試みるも、その都度、酷い目に逢って来たのだが・・・

しかし・・・懲りない神がここにいた。

「テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア、  
汝にこれを与えよう」

『誰もオレの自由への飛翔を止めることは出来ないんじゃない！』と心の中で叫びつつ、懐から、淡い光を放つ漆黒と真紅のの宝石が1つづつ填ったブレスレットを手渡した。

神から手渡して、物を贈られる荣誉にいたく感動している美少女がそこにいたが、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は、お構い無しに言葉を続ける。

「半径、3光年の範囲で近くにいるから、困ったことがあれば念じるといい・・・じゃあ、そういうことで！」

と、軽く片手を上げて、その場をそそくさと離脱しようとした……  
したのだ。

羽を広げ、そのまま飛翔しようとする……そのまま、浮かび上がり、上空へ逃げられれば、宿参ノ王スサノオの思惑通りになっただろう。

頭上に落下してきた『タライ』がなければ！

浮き上がるうとしたその瞬間、宿参ノ王スサノオの頭上に、タライが直撃する。

それも、鋼鉄製の重くて硬いモノがだ！

ぐわああああん……

そんな音がし、タライの底は宿参ノ王スサノオの頭の形にベコツと凹んでいく。

この硬いタライの底が、凹む衝撃とは如何程のものか？

そして、神将である宿参ノ王スサノオに気づかれずに、タライをぶち当てることができるその神業！

タライに刻印された文字を見れば、誰の仕業か明らかなのだが……

『次逃げたら、ドラム缶』

頭を抑えながら、ぐおおおおお……と叫び声を上げ……転がる神を、呆然と見つめるテオドラは思わず、『クスッ』と笑ってしまふ。

宿参ノ王は、見逃さない神である。  
気に入らない相手と標的。  
美味しい酒といい女。

すくつと立ち上がると、『ごほんっ』と咳払いをし、パンパンとホコリを掃つ。  
コリを掃つ。

「やっと笑ったな」

にやりとした宿参ノ王に、思わず赤面してしまったのは、気恥ずかしさであろう、『なっ』とした顔になっていた。

「人がモノのように死んでいく様を見たのは……初めてか？」

「は、はじめてですじゃ」

「神の奇跡は、表裏一体。願いが強ければ、その分、何かを失いかねない」

「……」

「お前にその覚悟があるなら……いてやるよ。ま、この国が安定するまでならな」

その言葉で、初めて、自分が願った『想い』が故に、神がここに留まるうとしている事実気がついた。

そして、その願いの重さも同時に感じていた。

しかし、この不安定な情勢の中、力強い存在がそばにいてくれる安心感が、怖さや重さを跳ね除けた。

「よ、よろしくお願いしますのじゃ」

深々と腰を折り、頭を垂れるその姿に、『しかたねえなあ・・・』  
思いながら、先ほど自分に打ち込まれたタライの文字を見て、冷や  
汗をかいたのは秘密だ。

物語はまだ終わらない。



15話 神と願いの関係（後書き）

．．．．．  
なんとか、なんとか、すみません。

## 16話 竜宮城

.....

「か、神様・・・取り敢えず・・・といいますが、その、なんとお呼びすればいいのですじゃ？」

そうか、そうだった・・・コレは予想外の展開・・・名前か・・・名前・・・チチシリフトモモスキー・・・だめだ、神の威厳以前に、オレがいやだ・・・宿参スサノオノ王の名を出すわけにも・・・むむむむ・・・オーナスは、まずいし・・・

「テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア・・・神の名は、軽々しく口にして良いものではないのだ。しかし、名がないとなると、なにかと不便であることも承知。オレは、一計を案じた故、それに従え」

「わかりましたですじゃ、それと、私のことは、テオドラとお呼び下さい」

そして、宿参スサノオノ王は、『ココだけの秘密だから・・・』と語る。己は、日常的に依代よしろにいることが多く、その依代よしろとは、この身体アウターであり、龍山山脈の頂上付近にある神殿にて世界の動向を観みているのだと。

神殿では、大神官と呼ばれ、この世界をつくりなされた太陽神への依頼を受け、この地にいることになったとした。

故に、自分のことを、『大神官』と呼ぶことし、名は秘匿とすること。

『神』であることも秘匿とし、神の代行者たる大神官という地位にて、『ヘラス帝国の皇女であるテオドラの求願により、この戦争を終結させるべく与力することにした』ということにする」と。

大神官として、神の力を『かみおろし神卸しという秘術により偉大なる力を使うことができる』ということにすること。

その点と踏まえ、神の奇跡に頼りすぎると身を滅ぼすことになるので、自分の力を当てにし過ぎないこと。

ただし、その身を守る事に関しては、容赦なく力を行使用するので、逆鱗に触れぬよう注意すること。

そして、見返りとして様々な要求をすることとなるが、原則叶えること。

そのような事をテオドラに語り、取り決めとした。

テオドラは、「流石は神様じゃ」と納得をし、神の意志に従うことにしたのである。

「じゃあ、まずは・・・」

神・・・いや、大神官様の最初の要求がなんなのか・・・ゴクリつと喉を鳴らし、緊張がその身に走る。

あのような、強大で強力な奇跡を起こすことができる人物を、自分の近くに居てもらったための代償・・・。

「酒だ！美味しい奴をたのむぞ、それと料理だ！」

スサノオ宿参ノ王が望むその要求の・・・なんとというか『小ささ？』に、ぽかんとしてしまうテオドラであったが、すぐにその頭脳はフル回転をし始める。

考える！考えるのじゃテオドラ！心の中で叫び、意識を集中させる。そして、さきほど、大神官様が語った言葉を頭の中で反芻する。そう、確かに言ったのだ・・・彼は！

『見返りとして、様々な要求をする』

つまり、現象に対する報酬が、見返りということになる。

では、今、見返りとして要求されているものは、何に対してなのか？ そうだ、彼が報酬を要求するに對して、叶えられた現象とはなんだ？

私が願った『ずっとそばにいて欲しい』という『思い』ではないのか！

であれば、ここで生半可な、中途半端な歓待でもしようものなら、私自身の想いが軽く視られてしまうに違いない。

そして、私が衝撃を受けた感動も、怖さも薄っぺらいモノのように扱われてしまうのではないか？

駄目じゃ駄目じゃ駄目じゃ！

私が初めて感じたあの想いは唯一無二の大切なもんじゃ！

どうすればいい？

どうすれば、私の想いが本物で、大切に、掛け買いのないものであること証明するには？

そして、テオドラが出した結論はこうだ。

彼の要求：「酒と料理が欲しいなあ」

美味しい酒とおいしい料理好きだけどうぞ！

「まあ、こんなもんだろ。程々で帰ろうかな（天へ）」

この3段活用を・・・

彼の要求：「酒と料理が欲しいなあ」

飛びきりの酒と豪華な料理＋珍味色とりどり、そして美女や美少女での大歓待！

「え？こんなに感謝されてるの？なら、ずっと（永遠に）テオドラのそばにしようかな！」

と言う感じに、してしまえ！というモノだった。

うむ、我ながら見事な作戦じゃ・・・そうと決まれば、急いで準備するのじゃ！

竜宮城作戦と名付けよう。

ん？そうすると、乙姫様は私になるのか？ふむ、なんだか、その、照れるのお・・・

魔法世界に、浦島太郎の童話があるのかどうかは定かではないが、そのように名付けられた作戦は、後に一人歩きし、様々な噂と暗躍を作り出すこととなる。

そんなこんなで、脳内会議での結論に達したテオドラは、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王を超VIP用特別室まで案内すると、『準備いたしますので、暫<sup>しば</sup>しお待ち下さいませ』と言い残し、城に残った家臣達に大号令を掛けたのであった。

すぐに、戦時中にも係わらず、城内はもとより、城下の商会や商店へ一斉に使いが走り、高級食材・珍味・高級酒、そして、美女が集められたのであった。

単純に、『一仕事おえた後の一杯』が飲みたかった宿参ノ王スサノオの言動が、波乱の幕開けとなってしまうた。

『用意が出来ました』と案内された部屋には、ずらりと、色とりどりの際どい（ココ重要）衣装に身を包んだ美女、美少女が並び、一体、何百人分？というような料理が用意されており、また、集められる限りの酒という酒が備えられていた。中でも、始祖から続くとされる（眉唾だが）秘蔵の超熟成貴腐ワインは、必見であった。

こうして、一番奥のペアシートに座らされた宿参ノ王スサノオの横に、引付くように座ったテオドラの大号令の元、酒池肉林的宴が動き始めたのである。

もちろん、他の男衆（皇帝も含む）は完全に閉め出され、室内にいるのは、女性ばかり。

そして、テオドラは、宿参ノ王スサノオのホスト役として、目を爛々と輝かせながら世話を焼いていた。

アレが食べたいと言えば、アレを自ら食べさせ。コレが飲みたいと言えば、コレを自らお酌をする。何かを考えているような素振りの時は、胸に垂れ掛かる。

一国の皇女の行動とは思えぬ歓待ぶりに、周りの女中や、親衛隊な

どは、一体何事？っていうか誰なのその人！といった感じなのである

当然、注目の的は、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王であり、しかも、神官服に、高貴なオ  
ーラを纏っている人物とあって、その場に集う者達は、いったいど  
この王族なのか？とか、貴族？とかヒソヒソ情報交換に勤しんでい  
たりするが・・・

しかし、こうして皇女たるテオドラ自ら、甲斐甲斐しくお世話して  
いる状況を見るに、最低でも王族、又は新世界の超VIPではない  
のか？などの憶測も飛ぶ。

しかも、このような状況（美女わんさか）で、尚かつ皇女テオドラ  
がピッタリ吸い付いてるにもかかわらず、にやけた顔ひとつせず、  
さもそれが当たり前のように、悠然としているのである。

知らぬ者が見れば、テオドラが彼の気を引きたい一心で居るように  
見える。

また、知っている者達からは、『皇女様ご乱心！？』という風に見  
えている。

それが、更なる憶測を呼び、この場にいる者たちの妄想をかき立て  
るので立てるのであった。

物語はまだ終わらない。

16話 竜宮城（後書き）

もつとキャラヲを喋らせたいのに・・・

## 17話 帝国の夜明け

.....

「昨晚は、随分とお楽しみでしたね？」

日の光を感じ、ベットから身を起こそうかとした矢先。  
誰であろうと驚くとだろぅ・・・  
一人で寝ていたはずのベットに、女性の存在が有った時には。

「勝手に入り込むなど、何度言ったらわかるんだ？」

布団に残された温もりと、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王の残り香をクンクン・・・とご満悦な姿で惚けている。  
しばらくして、存分に満たされたのか、キリッとした顔で、反論するのであった。

「お言葉ですが、『勝手に入った』などと！言いがかりはよして下さい」

「いや、違っだろ！オレは了承した覚えはねえよ！」

「・・・・・・・・・・」

「不思議なことに・・・・・・・・偶然、前を通ったら、突然、ベットに吸い込まれてしまったんですよ！」

「そんなレアスキルもってねえよ！・・・・っていつか、偶然もねえ！」

「・・・・・・・・・・」

「そんな！・・・・あんなことやら、こんなことやら、とっても激しく私を可愛がってくれましたのに！・・・・覚えていらっしやらないのですか！」

「まったく覚えてねえよ！」

「・・・・・・・・・・」

「残月・・・正直にホントのことを白状したら、ご褒美あげようかと思ったりするかも・・・」

「すみません、妄想の中でのことでした・・・」

即答する残月に、やれやれと思いながら、着替えるを終える。

そして、そのまま部屋を出ようとしたところで、思い出したかのよ

うに残月に向き直る。

「そついや、なんでお前がここにいるんだ」

「ひどいです、昨日はあんなに……」

残月の言い終わらないうちに、『それはもいい』と、拳骨をその頭に落とす。

『うぎゅうう』といいながら、頭を押さえる様子は、とても『独り魔導炉』と呼ばれる魔女には見えない。

案外、素はこんなものなかもしれないが……。

「痛いです！なにするんですか。」

「ん？ご褒美？」

「私にそんな属性はありませんから！」

そんな残月を見ながらも、宿参スサノオノ王の思考は別のところに向いていた。

表に居座るつもりはなかったのだが、結果的にこうなってしまった以上、ある程度の干渉も許されるのだと考えて行動せねばならないが、結局のところ、最終的な因果のツケは自分に戻って来るのであるから、注意が必要だ。

「本山の見鏡で覗いてたんだ、ある程度把握できているんだろう？」

こうなってしまった以上、表と裏から同時に戦争の早期終結を目指すしかない。

あくまで、この世界の住人を中心としたストーリーにしておきたか

ったのだが、そうはならないだろう。

一度、使途に作戦の変更を協議するか・・・予想可能レベルを超えて話が進みすぎている、このままでは、もしかすると、あの時のような失敗を繰り返すかもしれない。

「残月、この流れ、以前・・・いや、遙かなる昔を思い出させる節がある」

「そ、それは、まさか・・・」

古代史にも、記録メディアにも、口伝にも残らぬ・・・いや、残してはならぬとされた禁忌。

世界は1つしかないと信じていたあの頃の、還らぬ思い出、封印した記憶。

「気のせいかもしれないし、思い過ごしかもしれない。しかし・・・

「この世に偶然はない。全ては必然・・・ですね？」

「そうだ。そうなるかも知れないし、ならないかもしれない、全てはこれからだ」

考えを決断に変え、宝玉による使途通信を使う。

空間に画面が現れ、サングラスをしたアラブ人のような男が、畏まるのが見える。

「商人達に『この戦争で儲けられるだけ儲けるように』と徹底させる、支援対象はヘラス帝國のみ」

『畏まりました』と消えた画面を確認し、戦争は武力だけで決まるもんじやないってことをわからせてやるか・・・そう呟いた。

宿参ノ王スサノオから直接指令が出たことで、輝ける漆黒の息がかかる全ての商会・商人は躍起になり、『命がけで』儲けを出すことだろう。

これで、メガロメセンブリアを始め、メセンブリーナ連合では、食料・武器・資材が高騰するだろう。

一般市民にも影響は出るだろうが、全てはフォローできないし、しない。

全て、国へと責任と不満が向うように仕向けるからである。

魔法が全てだと思っている阿呆どもに、魔法使いが至上の存在であると驕り高ぶる者どもに、己の愚かさを身をもって味あわせてやるさ。

なんにせよ、行き着く先の集合場所は、冥府の特別室と決まっているがな。

宿参ノ王スサノオとしては、メセンブリーナ連合そのものは潰さないつもりだ。

だが、二度と他国を侵略することが出来ぬくらい叩くつもりではないのだ。

後は、どこまでにするか・・・それだけなのだが。

「残月・・・猿エサにも伝えておけ、出番は一番最後・・・だと。それまで、大人しくしておけとな」

その言葉を聴くと、残月と呼ばれた女性は、まるで掻き消えるかのように、霧のように、ぼやけてなくなってしまった。

初めからそこに存在していなかったかのように。

やっと独りになったのことで、部屋の結界を消し、時間の流れを正しいものにする。

切り離されていたこの部屋の存在が、今、世界とつながった。

数分もしない内に、部屋のドアにノック音が響き、来訪者の存在を告げる。

メイドが、朝食への連絡に来たのかと思ったが、ドアを開けると、団体様、皇帝一家とそのお付きの者達だ。

やれやれ、朝からハードなことだ・・・そんな思いが走ったが、しかし、部屋に入ってきたのは、1組の親子・・・ヘラス帝國皇帝一家だけであった。

扉を閉めると、皇帝、皇妃、皇女の3人は、スサノオ宿参ノ王の前にて膝をつく。

この帝國で一番位の高いと思われる人間が、傳く・・・きっと、扉の向こうにいる者達がみたら、一体何事かと思うであろう。

「ふむ、その様子では、テオドラに聞いたか・・・」

顔を伏せ、3人は沈黙したまま、スサノオ宿参ノ王の言葉を待っているようだ。

または、神の怒りに触れることに怯えているのかもしれない。

それも仕方のないことだろう、あの神の怒りを直接見てしまったのだから。

この国が安定するまでは、ここで力を振るうことに決めてはいるが、自分の力に頼りきる国になってしまつては困る。

そして、よからぬ欲望を持ちうる者も現れるかもしれない。

過の昔、ザンキワラン座敷童子を閉じ込め富を手に入れた愚か者のように・・・

「オレは、大神官。名は秘匿。大いなる太陽神の使いは『帝國に宣託を与えた』と述べて周るがいい」

神は、自らを隠し、だが、帝國の安寧の為に力を貸すと宣言した。  
皇帝は、暗雲立ち込める帝國の未来に晴れ間を感じた気分になった。  
・いや、本当に心の闇が晴れていくように身体が軽くなっていく。  
ならばこそ、自分のできることを推し進めるのみ。  
決断をした皇帝は、自らの娘に、『粗相のないように』と言い残すと、皇妃と共に部屋を出て行くのであった。

物語はまだ終わらない。



17話 帝國の夜明け（後書き）

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
毎日更新できる作家様方にあこがれる・・・  
マイペースですみません。

## 18話 戦争

.....

「はらへった・・・」

1人の兵士、いや、魔法使いの本能は・・・もはや口癖になっていった。

アリアドネーの学士課程を卒業し、アリアドネー魔法騎士団候補とはなったものの、最終選考で落とされ失意に負けて、田舎へ帰ってきた。

しかし、実家に帰ってきてても、職はなく、親の脛を嚙りながら、まほネットしながらゴロゴロする毎日。

だって、魔法しか使えない自分にできるは知れている・・・実際、まともな求職がない。

こんなんだったら、攻撃魔法ばかり専攻しないで治癒魔法学んどくんだった・・・。

そうすれば、医者のみねごとで食っていったかもしれないのに。

そんな過去の自分を罵倒しながら、結局の所、食うために軍隊に入った。

今、世界は戦争の波に晒されていたから、入隊を希望すれば即採用だった。

自分の住んでいる田舎は、メセンブリーナ連合の統治下にあるそう  
で、親に相談したら『メガロメセンブリアへ行き一旗揚げてこい』  
とお送り出された（追い出された？）からだ。

入隊募集ポスターには、『正義の力で世界を一緒に救おう！』と大きく書かれ、まほネット界のアイドル ティファアちゃんグウィンクしてくれてた。

採用規定には、『魔法使い優遇』とも書かれ、これは天職にたどり着いたかも！なんて思って入隊受付へすぐに走った。

最初は良かった。

士官待遇で、兵舎の部屋も1人部屋だし、給料も良いし、飯はタダだし。

軍隊といっても、一般兵士と違い、魔法部隊はそんなにキツくないし、指揮官の号令で攻撃魔法を撃つだけから。

初めての戦場では、『人間相手にする』といったことに怖さがあったけど、『コレが軍隊の仕事なんだ』と先輩がいうのでそんなもんだと割り切っていた。

いや、正確に言うと、割り切っていたつもりになっていた。

あの戦場を見るまでは！

あれは酷かった・・・自分たちの部隊は、いつもなら後方で待機しているんだが、その時に限って最前線へと出張っていたんだ。だけど、それが自分の命を救った。

『神の声』が聞こえ、突然現れた太陽のような眩しいモノが、上空から飛来し、そして凄惨な音と共に爆発した。

その後は、この世の地獄だった・・・飛び散った何かが、辺り一面に舞っていた人や物を全て蒸発させていった。

そして、焼けこげるような臭いが辺りに立ちこめ、驚きと吐き気に這い蹲はいつくばった。

真っ黒に焼けこげた大地と、燃えカスとなった友軍。

こんなことが起きるなんて想像もしてなかったし、一歩間違えていたら、自分はその場に転がる『焦げた何か』になっていたんかと思うと、寒さと怖さが一気に駆け上がった。

アレはなんだ？

産まれて初めて、死と隣り合わせの場所にいることを知覚した。そしてその後、更なる悪夢が現れる。

大規模転移魔法でやってきたヘラス帝國の大師団がその現れたからだ。

戦意を喪失している連合軍は、抵抗らしい抵抗も出来ず総崩れとなる。

伝令から撤退の二文字が伝わると、兎に角逃げることだけ考えた、他に何も考えられない、ただただ逃げることだけ。

だが、命からがら前線基地へ戻ってきたものの、戦線は大きく変わる事になった。

勢いを増す帝國軍に押される連合軍という状況。

一時は、首都メガロメセンブリアまで迫る勢いであった。

連合軍はさらに、問題を抱えることになる。

当然のように起こる人材不足。

兵も指揮官も足りない状況、そして、集まってくる傭兵と乱れる規律や風紀。

戦争の影響だろう、何故か急騰する物価、その影響で支給が遅れるとなり、食料の配給も滞る。

士官待遇とはいえ、下っ端の自分達も、他の兵士と変わらない。

食事の量と回数を減らされ、『これも全て帝國のせいだ!』と罵ることしかできない。

兎に角、次の戦いで、武勳を上げられれば、もう少し待遇も改善されるかも知れない……

そんな思いを描く兵士は、この連合軍には沢山、いや殆ど全員と

言っただろう。

自分たちの立ち位置には気づくことなく、上層部の言われるがまま、『正義』の旗印の元、敵を滅することが仕事なのだから。

だが、彼らは自分たちが負けるなどとは思っていない。

最近加わった傭兵の中に、戦線を押し返す傭兵集団つわものたちがいたからだ。その強さ、活躍ぶりは、連合内では有名になりつつあり、そのリーダーは帝國の兵士達から『赤毛の悪魔』と恐れられているらしい。連合から「千の呪文の男」として讃えられているのだが。

兎に角、彼らは強かった。彼の率いる傭兵集団『紅き翼』は、1師団扱いとなり、戦場を勝利に導くために連戦しているのだ。

「また、赤毛の悪魔が出たそうじゃ」

午後のティータイムを優雅に過ごしている、大神官こと宿参ノ王スサノオと、実は暇人？皇女テオドラなのだが・・・

「悪魔と言っても人間だろう？」

「ですが、戦線が奴らによって押し返されておるのですじゃ、帝國軍の弱点を突かれていますじゃ」

ここ数日の間に、大きな激突が数回あったが、その殆どに『赤毛の悪魔とその一味』が参戦しており、帝國軍は、良くて引き分け、悪くて後退と、ずるずると戦域を押し留まれていった。

原因は、広域殲滅魔法を撃ちまくる赤毛の悪魔とその一味が、無秩序に戦場を暴れまわるので、対処が難しいことと、帝國の軍隊としてのあり方に問題があった。

帝國軍は、亜人が多い・・・ほぼ亜人であるといっている。  
そして、亜人には亜人の種族があり、部族や種族単位で部隊を構成している。

当然指揮官は、帝國軍将校や仕官なわけだが、どうしても部族間の軋轢が問題となり、1つに纏まりきれないことという弱点があった。

なので、戦闘力の高い戦士の数は多いのだが、戦術的集団戦では今ひとつ真価を発揮しきれなかったのだ、混戦になれば尚のこと。それに加え、広域魔法に対抗するべき手段や、赤毛の悪魔と渡り合える戦闘者が不在ということもある。

めんどくさい・・・宿参スサノオノ王の心の中は、その言葉で埋め尽くされていた。

制約さえなければ、直接全てを焼き尽くしてやるのに。

しかし、この戦争を『神の力』だけで終わらせてはいけない。

この世界の住人達の手で、為しえる必要があるのだ、何故ならば、もし再び同じようなことが起こったとき、人は全てを神に委ねてしまっただろう、そうすれば、生も死も全て惰性になってしまう。

故に、宿参スサノオノ王はめんどくさがったのだ。

だが、そろそろ本腰を入れて終わらせなければならんか・・・今の生活（お城でウツハウツハ）も楽しいが、そろそろ飽きてきたしな。

赤毛の悪魔か・・・とりあえず潰しておきますかね。

神の本音は、誰にも聞かせられない危険なものだった。

物語はまだ終わらない。



18話 戦争（後書き）

．．．．．  
少し短いですが、キリが．．．ホントですよ．．．

## 19話 激突

.....

後一步。

何故に手が届かない。

メガロメセンブリアまで、後少しなのだ。

そんな思いを胸に、最前線基地の作戦司令室に各戦域での状況が報告されるにつれ、焦りと怒りを募らせる司令長官は、部屋の中をぐるぐると歩いていった。

『まずい、まずい、まずい……』ぶつぶつと呟きながら、司令官は尚もグルグルと歩きまわること止めようとしなかった。

その様子に、周りに着席する司令部士官達も不安げだ、一体司令長官は何を苛いらついているのか？

確かに、前線は押されている……一部の突出した敵戦力『赤毛の悪魔』によって。

しかし、時間は掛かるかもしれないが負けはないはずだ、士気は高く、各地から集まる物資の量も今までの比ではない。帝國を支援、または賛同する者達からの後押しは、半端なく逆に管理や整理に時間を取られるくらいなのだから。

司令長官が戦線膠着の焦りと不安は、何も戦力や物資を懸念するものからではなかった。

彼は知っていた、この戦いを観みて居おられる神の存在を。

その神が使わされた……神の代行者が帝國に居ること。

数日前に目の前で起こった大粛正で受けたプレッシャーの驚異から逃すべれる術がないことも。

今の、この状態が続けば、自分の行動は、帝國の意にそぐわぬ、神

の意志にそぐわぬ不忠なモノと思われるかもしれない。

今でも、心より皇帝と帝国に忠誠を誓っていると宣言できる・・・しかし、『その責務を全うしているか』と問われれば、結果の出せていない自分の命運は・・・。

贖う為には、勝たねばならない、自らの力を示さねばならない。

だが、どうすればいい？

帝國軍の士気は上々だ、しかし、戦術レベルでの師団運用が難しい。各部族の族長が急遽参戦を表明し、我こそは我こそはと、戦地へ突入していくのだ。

ナニカに駆り立てられるかのように、ナニカに怯えるように。きつと彼らも、自分と同じなのだろう・・・そう考えている。

彼らは感じたのだ、『神』の存在を、そして、怯えたのだ、『今の自分たちの立場』に。

口伝で伝わりし、世界創造伝、神魔大戦争伝など、神話という寓話に自分も胸をドキドキさせた時代があった。

いつかは、神の元でその力を振るえる日が・・・なんて思いを持った少年・少女時代を過ごした者が殆どである亜人達に、舞い降りた神の気配は、まさに絶対であった。

故に、戦力となる戦士は続々と集結し、士気もすこぶる高い。だが、指示命令系統に支障をきたして今日に至り、冒頭へと戻るのである。

グルグルとぶつぶつと妖しげな行動を止めない司令長官の元に、来訪者を知らせる伝令が入る。

『大神官様がお見えです』と

身体中の汗腺が開いたのではないだろうか・・・そんな気持ちになるほど、衣服が汗でびっしょりになる感覚に襲われる。

神聖なる神の代理人、大神官様・・・彼は公平だ。

王族にも、貴族にも、平民にも、巫人にも、移民にも、動物にも、妖精にも、妖魔にも。

彼は寛大だ、慈悲深く、大いなる意思の元に我々を照らし続けてくれる太陽のような存在。

しかし、彼は公平故に、その聖属性故に、容赦がない。

悪は認める、だが、邪なるモノは認めない。

生き様に『正しさ』があるか、『邪でないか』が彼の境界線。

彼は、自分のことをどう判断されるのであろうか・・・司令長官は、周りの時間が止ったような錯覚に陥るのであった。

そして、独り、煌く波動を放ち、純白の神官服を身にまといながら、歩み寄る男の姿が作戦司令部に現れる。

その姿を見たものは、皆、ごく当たり前のように頭を垂れ、腰を折る。

恭順の本能なのか、神威なのかはわからない、だが、不思議と充足感に包まれるのだ。

「司令長官・・・苦労しているようだな？」

おお！なんたることか、大神官様は、自分のことを労い、心配して頂いている。

そんな思いが胸に広がると、喜びと罪悪感がその身を駆け巡る。

この方を心配させてしまう自分、その責務を果せない自分、不甲斐無さに胸が締め付けられるようだ。

どうすればいいのだろうか・・・やはりここは、自分が先陣を切り、己の忠誠心を示さねばなるまいか。

「この戦い、我が導こう、軍権暫し預かる」

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王の言葉に、司令長官は『御意』と答え、膝を折る。  
ここに、後の歴史書に大いなる戦いと記される大分烈戦争終焉への  
序幕が切つて落とされた。

帝國軍と連合軍は対峙する最前線、一発触発の緊張に包まれながら、  
今か今かと待ち構える兵士達。  
そこに、響くは大いなる意志、純白の神官服は場違いなほど際立つ  
ていた。

皆、その姿に心奪われる、光り輝くその波動をその身に受ける。

「ここに集う帝國の戦士達よ、我は見届けよう、その勇敢な姿を、  
そして共に歩むとしよう約束されし黄金の大地へ！」

例えようのない幸福感と高揚感、その言葉を聞いた者は恐怖を感じ  
ない、ただただ神の為に戦うのが全てとなる。

そこに差別はない、区別もない。

あるのは、神の為に戦う意志・・・それだけだ。

早く、早く、戦わせてくれ！

神の為にその力を振るわせてくれ！

勇敢な死は、人生の終わりではなく、神に約束された黄金の地へ向  
うための門でしかない。

古より伝わりし、亜人たちに刻まれた言葉。

戦士達の鼓動はドンドン早くなる。

「全軍、一丸となり、神に渾成す愚か共へ、その力を示すのだ！雄  
たけびを揚げよ、突撃！」

「「「うおおおおおおおおお」」」

神の戦士となった帝國軍は、一匹の龍となり、怒涛のごとく連合軍へ噛み付いた。

突破力に秀でた者が先陣を駆け抜け、破壊力に秀でた者は、次々と敵兵士を砕いていく。

傷つこうとも、血を流そうとも、その歩みは止らない、また一人、また一人と己の生命を懸け敵兵士を喰いちぎって行く。

戦士達は、戦う・・・神の為に。

戦士達は、戦う・・・仲間の為に。

戦士達は、戦う・・・愛すべき故郷の為に。

戦士達は、戦う・・・己の勇敢さを示さんが為に。

神に背を押された帝國軍を、真正面から受け止めた連合軍は、すでに総崩れとなった。

荒れ狂う嵐の前に立ち竦み、逃げ惑い、瓦解していく。

多くの屍を踏み越え、多くの命を奪い、それでも、まだ、連合軍は止らない、止れない。

このまま一気に、連合軍の首都メガロメセンブリアまで攻め落とす勢いであつたのだが・・・

上空に現れた1部隊・・・急遽、連合司令部より要請を受けた赤毛の悪魔とその一味『アラルブラ紅き翼』

怒涛のごとく攻め続けるその志気に驚きながらも、帝國の勢いを止めるべく戦いに投じていく。

「ヘカトントキス・カイキリアキス・アストラブサト百重千重と重なりて走れよ稲妻

キリブル・アストラペー千の雷!!!」

赤毛の悪魔こと、ナギ・スプリングフィールドが放つ広域魔法が、帝國軍の戦闘集団へ撃ち放たれた。

雷系の上位古代語魔法の威力に、帝國軍に震撼が走る。

ナギは思った、これで奴らは止るはずだ、あと2・3発コレを撃てば、撤退していくだろう、いつも通りなら。

そう、いつも通りなら！

しかし、今日は違った。

今日は、いつもとは全く違った。

ナギは考えるべきであった、この進軍の速さと犠牲を省みない怒涛の攻勢の原因はなんであるかを。

広域魔法を受けても、傷ついても、倒れても、帝國軍は止らない。

倒れた味方の屍を踏み越えて、さらに進軍していく様子は、まさにハイサーカ狂戦士であった。

「ナギ、今日はいつもと違が・・・なにか大きな力・・・魔力なのかこれは!?!」

「来るぞ!?!」

ナギの後ろ控えていた、アラルプラ紅き翼の一員である魔法使いアルビレオ・イマと、ゼクトは戦域上空に転移してきた何者かを感じ取る。

「やっと現れたか阿呆ども・・・って餓鬼か」

超距離転移の残留魔力現象なのか、黄金の粒子が轟くその空間に、

純白の神官服を纏った宿参ノ王スサノオが、やや呆れ顔で現れたのだ。

「罪も、死も知らぬ餓鬼であるなら、それもまた道理よな」

会話にならぬ言葉を発する宿参ノ王スサノオに、敵と判断したナギが、得意の電撃魔法をぶちかます。

「ケノテ来れ カネ虚空の雷 デ薙ぎ払え レイ雷の斧!!!」

「さらに、魔法の射手!!!」

ナギが得意とする連続魔法攻撃。

中型高威力上位古代語魔法に無詠唱近接魔法。

タイミングはドンピシャ、この距離で外したことはなく、決まれば即死の無敵コンボ。

『勝った』そう思い、どうだといった顔でアルとゼクトに目をやるのだが……

墜落せずに、その場に留まり続けるその男の姿に、驚くとともに、警戒を弛めないアルとゼクトがいた。

「不意打ち結構。勝てば官軍。生き残ってこそその勝者だな」

高圧電撃を受けたにも関わらず、『何もなかった』のようにそこに在り続ける男の言葉に、さらに警戒の色を強くするが、ならば、とアルビレオが唱えていた遅延魔法、高圧重力魔法を即座に撃ち込む。

必殺の間合いで放たれた魔法だが、宿参ノ王スサノオが片手を翳すと、手のひらで受け止めるように暫しその場に停滞し、それも一瞬のこと……握り潰される。

「むう……魔法が効かぬ身体か？」

ゼクトの眩きに、危機感を募らせる紅き翼達。<sup>アラルフ</sup>

魔法が効かぬなら、物理攻撃で、と真空の刃を放ちながら、肉薄するサムライ・マスター青山 詠春と無音拳のガトウ・カグラ・ヴアンデンバーグ。

並みの者なら、既に身体を維持出来ぬ程の衝撃を与えたはずだが、  
「何もなかった」のようにそこに在り続ける宿参ノ王。<sup>スサノオ</sup>

「そんな又ルイ攻撃じゃ、オレの障壁は抜けねえよ」

物語はまだ終わらない。

## 20話 大神官 対 紅き翼

.....

「何もなかった」のようにそこに在り続ける宿参ノ王<sup>スサノオ</sup>。

「そんな又ルイ攻撃じゃ、オレの障壁は抜けねえよ」

高位の戦士や魔法使いは、無意識の内に耐魔攻撃、耐物理攻撃の障壁を巡らしている。

下位の攻撃が抵抗され易いのはその為である。

当然、霊圧を下げているとはいえ、神将である宿参ノ王<sup>スサノオ</sup>の障壁を人間が抜ける可能性は殆どないと言える。

仮に、英雄クラス<sup>レジエント</sup>または、超騎士クラス<sup>ハイ・ロード</sup>、超越クラスならば、その肉体に纏わせた魔力や気力を直接ぶち当てることにより、コアへの直接攻撃を可能にできるかもしれない。

しかし、目の前の男達は宿参ノ王<sup>スサノオ</sup>のコアには届かない、神と人間の差は、「戦車」と、「蟻」のようなもの。

どれだけ優れた蟻でも、蟻が蟻である限り、戦車を破壊することは不可能だ。

絶対的に超越した存在である神や魔に、単独で立ち向かうことは、無謀ではない・・・無駄なのだ。

「くっ、俺様の雷撃が・・・ならば、最強呪文をぶち込んでやるぜ」

胸元から取り出したメモ帳をめくりながら、呪文を唱え出すナギを  
目の端に捕らえ、『未熟者が』と師匠たるゼクトがぼやき、不肖の  
弟子の為に時間稼ぎをしてやろうと動き出す。

「ト・シュンポライオン・ティアコネット 契約により我に従え・ヤクラーティオー・フルゴリス 雷の投擲!!!」

稲光を纏った高速飛来する雷精の槍が宿参ノ王目掛け撃ち出され、  
即座に背後に転移した超近距離にて、ゼストの杖が溢れんばかりの  
光を放つ。

「サギタ・マギカ 魔法の射手 セリエス 連弾・ルーキス 光の199矢!!!」

激突し消滅していく光精の発光現象により、辺りは眩しさ故に直視  
できぬほどの白色に染まる。

そして、眩しさが晴れぬ間に、詠唱を完成させたナギが、自身が会  
得している個体殲滅最強呪文を上空から撃ちつけた。

「ウエニアント・スエトリアウマス・カルクハルグチネオネフレット・テンベスタース・アウストリーナ 来れ雷精 風の精 雷を纏いて 吹きすさべ ヨウイス・テンベスタース・フルゲ 南洋の嵐 雷の暴  
リエンス 風最大出力!!!」

巨大なドリルのように、超高速回転で目標へ驀進していく雷の渦。  
持ちうる魔力の殆どを消費するその電圧は、2億ボルト。

自然発生する雷の電圧に匹敵する・・・必殺即死級の超極悪攻撃呪  
文だ。

遙か遠くからも見えたかもしれない、突然あらわれた稲光が、宙に浮かぶ者へと吸い込まれていくのが。辺りに存在する雷精が根こそぎ集められ、1個体へとぶつかっていくのが。

黄金の渦に巻き込まれた哀れな者は、事切れ、焼きただれ、元の姿を悲惨なものへと変えたであろう・・・誰しもそう思う、呪文を放ったナギ本人さえも、自身の勝利に疑う余地はなかった。

この距離、この威力、例え神魔といえど滅せられる・・・現時点での最強魔法使いとしての自負と経験がそう確信していた。そう、並みの神魔であれば、コアまで達していただろう。

並みの神魔であれば！

「があっはっはっはっはっは・・・」

視界に頭になったそのものは、黄金の粒子を従え、回転する空気の渦を従え、古の戦衣いにしえいくさゆいせもに身をつつみ、さも面白そうに、胸をそらして、大きく笑っていたのだった。

油断・・・といえはそうであろう。

雷神・風神を従える嵐と海を司る神の障壁に宿りし術式の親和性なのか、ナギの呪文は、障壁に干渉し、その電撃は宿参スサノオノ王アハタの現し身へと降り注いだのだ。

奇跡的偶然が起きたといってもいいだろう。

しかし、コアを守る多重結界である呪圈スヘル・バウンドを抜くことはできなかった。

だが、その電撃により現<sup>アバター</sup>し身を作り変える必要が生じたのは確かなのだ。

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は、神の作りしその身を大ダメージを与えたことに、驚きと喜びを感じたのだ。

人間は、時にして不可能を可能にする。

神が創り給うた人間という可能性は、神の想像を超える時がある。それが喜びを創りだすか、悲しみを創りだすかは、わからないのであるが……。

なににせよ、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は、この目の前で驚愕している赤毛の餓鬼、ナギ・スプリングフィールドに興味を持ったことは確かだ。ここで潰すには惜しい……そう思えるほどの興味であるが。

『スー様、連合前線基地の破壊および占拠が終了するようですが』

脳裏に響く戦況連絡に、そうか時間か……そう思い、やや残念な気持ちになったものの、これ以上の戦域拡大は、損失が大きすぎる故、ここまでで留めておく必要があった。

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は、紅き翼<sup>アラルブラ</sup>の面子を放置し、さらに上空へと飛翔した。

そして、神術により大地を太陽の光で埋め尽くすと、大音声で言葉を綴る。

「帝国の戦士達よ、勝ち鬨を揚げよ！我らは勝つたのだ！」

神の代理人、大神官からの言葉に、戦い支配されていた感情は、緩

和され、掴み取った勝利を喜ぶ歓声が大地に響き渡った。  
そして、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王が照らした光を浴びたものは、治癒能力の一時的な向上効果により傷が癒えていく。  
死して、魂の抜けた肉体以外は、ほぼ健康体へ回復されていったのだ。  
更なる神の御業<sup>おんわざ</sup>に、戦士達は、膝をつき、神への感謝の祈りを奉じていくのであった。  
後始末は、使途たちに任せる連絡を取り合った後、再び、紅き翼<sup>アラルプラ</sup>の面子の目の前に舞い戻る。

「悔しくば、力をつけるのだな・・・さらばだ凡体諸衆」

そう言うと、超空間転移により、その場から掻き消える。

「俺様の魔法が全く通じなかった・・・」

魔力枯れを起こし、打ちひしがれるナギを見ながら、アルビレオ・イマは冷静に敵の分析をしていた。  
一瞬で超距離転移をする技術、ナギの個体殲滅最強呪文が効かない障壁、広範囲治癒魔法・・・  
神官服を着ていたことから、防御と治癒に特化した魔法使い・・・  
なのか。

「やっかいな隠し玉が現れましたね」

「まったくじゃ」

馬鹿弟子は、これでも師を凌ぐ魔力と攻撃力を有している連合最強の魔法使い。

そのナギが繰り出した超接近でのアレで倒せない敵。

こちらへの攻撃はなかったものの、一切のダメージを通さぬあの障壁は曲者じゃな・・・そう思い、対抗策を至急練らねば拙いな・・・ゼストは内面沸き起こる焦りを拭えなかった。

帝國の大勝利は、瞬く間世界に伝わり、雌雄を決すは帝國との味方が多数を占めた。

また、連合は、大敗退したものの、首都への進行を防いだ功労として、<sup>アラルブラ</sup>紅き翼の面子を英雄と称し、まだ戦えると大々的に触れ回った。そこには、まだ諦めぬメガロメセンブリア元老院の魔法使い達の權益への執着が見て取れたが、連合瓦解となると世界の情勢の殆どが塗り変わることとなるため、それに属する者達は追従するしかなかった。

ここに、首都メガロメセンブリアを目の前に睨み合い<sup>ベルム・スキスマティックム</sup>大分烈戦争は幕間を迎えたのである。<sup>まくあい</sup>

物語はまだ終わらない。

20話 大神官 対 紅き翼（後書き）

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
執筆遅くてすみません。

## 21話 それぞれの想い

.....

ヘラス帝国の大勝利と共に、その陣頭指揮を執ったとされる『大神官』の名もまた、魔法世界に轟いた。

その姿は、畏怖堂々、そして、天空海闊とした物言いは、一目で人々を魅了するという。

そんな彼の日常は、謎に包まれていたが、帝国内では誰も不満を口にするものはいなかった。

神秘とは、隠されるものであり、公にされぬものであるし、帝国の臣人達が信仰する太陽神の導きがあったことは多くのものが見聞きし、実際に経験していることが寄与していたからである。

だが、その戦果に喜びを感じたものの、第三皇女テオドラは、自身を揺さぶる深刻な悩みをその胸の内に抱えていた。

帝国を勝利へ導いた神の代行者・・・『大神官』スサノオ宿参ノ王。

実際は『神』そのものであるのだが、名と真実を知るものは父上と自分だけ。

その秘匿されし名を知っているということだけが、絆のようにも思えている。

しかし・・・

帝国の勢いは、間もなく連合を飲み込むかもしれぬ・・・いや、そうあらねば戦争が終わらぬのであるが。

その戦争が終われば・・・天に還るであろう我が神は。

神を独占などできるわけもない、頭ではわかっている、でも、その

ことが胸を締め付ける。  
そんなときであった、テオドラ宛に手紙が届いたのは。

ウエスペルタティア王国の王女アリカ・ アナルキア・ エンテオ  
フュシアは、何をどうすれば良いのかわからなかった。  
世界を取り巻く情勢は、常に非情であった。

父王は当てにならず、帝國と連合の境界地域にある我が国の立ち位  
置は不安定すぎた。

だが、連合に組する我が国は、今更・・・帝國に膝を折るわけにも  
行かず、魔法世界の文明の発祥の地であるという矜持だけが我が国の  
全てであった。

そして、我が国を迂回し連合軍本体への直接攻勢をかける帝國軍の  
存在に怯える日々。

いつこの国へ矛を向けるかは、ヘラス皇帝の掌ひとつか・・・また  
は、先日の大激突にて聞こえし『大神官』なるものの思惑しだいな  
のか。

噂によれば、彼の者は太陽神を祭りし神殿の神官だということではない  
か。

それが本当ならば、何故、我が国ではなく、帝國に与力するのか！

ウエスペルタティア王国の初代女王は、アマテルという女魔法使い  
と言われている。

彼女は創造神の娘であり、その血を引きし者には神聖なる不思議な  
力が宿ると言われているが・・・

神の血族といえないこともない我ではなく、帝國に力を貸す神官に  
怒りと絶望が心を掻き巻く。

創造神の血を引くという言い伝えの真偽、神に見放されたのではと  
いう不安、古いだけの浮遊大陸に籠る愚かな国の王女でしかないと

いう焦燥。

自分に残された時間は少ないのかもしれない・・・そんな時、ふと閃いた。

天啓であつたかもしれない。

王女アリカは、手紙をしたためた。

相手は、ヘラス帝國第三皇女テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア。

年のころは同じくらい、以前、この戦争が始まるずっと前、とある舞踏会で言葉を交わしたことがあるのだ。

彼女なら、彼女と私となら、連合と帝國の・・・いや、我が国の行く末に力を貸してくれるかもしれない。

そんな一抹の願いを込め、蠟で封をするのであつた。

ナギ・スプリングフィールドは、思い起こす。

勉強が嫌いだった。

決まり事を守ることも苦手だった。

自分自身が納得できないことは、やりたくなかった。

だから、魔法学校も途中で辞めたし、家も飛び出してきた。

覚えた魔法と自分の魔力さえあれば、なんでもできると思っていた。世界に飛び出し、色んな場所を観て、色んな人と出会って、駄目だなんて感じた。

今までの自分のままじゃ、今のままの自分じゃ駄目だと感じた。

生きる術すべも、世間の常識も、魔法の錬磨も、力の使い方も、なにもかもが中途半端だった。

持ち金が尽きて、傭兵斡旋所で仕事を受けて、金を儲ける日々の中、ナギは師匠に出会った、仲間もできた。

色んな世界の理を吸収しながら、今まで否定してきたことや、納得

いかなかったことに、理解が追いついてきた。

だからかもしれない、戦争が始まり、他の傭兵が身の振り方を決めていく中、ナギは国ではなく、個人の依頼を優先した。

ナギとその仲間の力を必要としてくれる誰かの為に、仕事をしたかったからだ。

そして、ウエスペルタティア王国の姫様からの個別依頼に応じて、戦争に参加した。

いつの間にか、自分のその仲間 『アラルブラ紅き翼』は、敵を倒し、連合を勝利へ導く。』 英雄』と言われるようになっていた。

だが・・・

勝てなかった。

自分の持ちうる力をぶつけても倒せない相手がいた。倒せない以上、それは負けだ。

最強を自負してきた自尊心が、自身の心を傷つける。

『最強とは誰に言われたことなのか？』

ただ世界を知らなかっただけではなのか？

真成る強者とは、なんだ？

自分の力は、魔法は、あいつに勝てるのか？

『いや、勝つ！ 必ず勝つ！ 絶対勝つてやる！』

心の炎を燃やし、再起動を果たしたナギは、師匠と共に、更なる攻撃呪文を求め、その習得に努めた。

連合軍の再戦準備が進む中、自分と仲間達は、連合軍ではなく、対

大神官の作戦や戦術について煮詰めていくのであった。  
自分は1人じゃない、仲間の力を結集すれば、勝てぬ敵などいない！  
その思いこそが、アラルプラ紅き翼を最強の傭兵部隊と呼ばせる大きな要因であつた。

決戦の時は近い。

その時、テオドラは、アリカは、ナギは何を考え、どう行動するの  
か。

そして、スサノオ宿参ノ王は！

物語はまだ終わらない。

21話 それぞれの想い（後書き）

日本語・・・難しいです。

## 22話 姫と英雄

.....

部屋に残された酸素濃度は15%。

息苦しさ、呼吸速度の向上、動悸の早さから推測する。

そして、開け放たれた扉から流入した空気が、密室であったこの空間の酸素濃度を押し上げたのだと判断するならば、扉が開かれる前は？

空気中の酸素濃度が、15%以下になると蝋燭の炎が消える。

さらに、12%以下になると、人体に多大な影響を及ぼすのだ。

10%を切ると、身体が動かなくなり、6%になると意識が飛ぶ。

部屋の調査をしていた残月は、空気中の酸素濃度の不自然さに気がついた。

何も知らない人間であれば、その違和感に気づくことすらないだろう。

調査に来た者が自分以外の者であれば、魔法や、オカルトの類であると勘違いするだろう。

だが、自分には判る・・・これは、自然現象ではない。

これは・・・科学だ！

この魔法世界では、科学というものは発達していない。

いや、正確にいうならば『発達させていない』と言った方が正しいのかもしれない。

自然と魔法の調和・・・それがこの世界の理ことわりの基礎だ。

一定法則の上で、誰もがその恩恵にあずかれる科学と違い、その者自身の力量に激しく左右されるのが魔法だ。

何故に、こんな不便な力に頼るのか、持つ者と、持たざる者の違いがハッキリと出る力。

そこには、ある原因があるのだ、この地に根ざす魔法使い達すら想像もできぬ大きな原因が。

そのことに何も疑問を持たないが故に、その理を新世界にも通用させようとする。

科学の存在を知らない故に、科学を否定するという現実。

魔法が世界の全てだと思う、思わされている現実。

だが、それは、不幸せなことではない、なぜならば、それがこの世界の常識であるからだ。

だから、この世界に住まいし者は違和感を感じない、感じるはずもない。

そんな世界で、科学を駆使する者がいる。

科学の存在すら知らぬこの世界で・・・だ。

異世界または、新世界からの侵入者であることに間違いはないだろう。

だが、それ以外にも可能性として最も考えられる相手が居る。

それが、ガーゴイル率いる謎の組織『完全なる世界』

魔法に支配されたこの世界で、その存在を隠し活動するその力・・・残月は、科学の力を強く感じたのである。

それは、残月自身の生い立ちがそう思わせるだけで、勘違いかもしれないと思うときもある。

しかし、残月は知っている。

『この世に偶然はなく、全ては必然である・・・と』

あの時、宿参ノ王スサノオに助けられたのも、今、こうして生きていることも、全ては必然。

神の神・・・創造神の掌たねいじゆなのか、気まぐれかも知れないが。だが、そのことには感謝しているし、それが最良の結果だったとも思っている。

だからこそ私は・・・

違う、今はそんなことを考えている場合じゃない。

そう思い、頭をブンブンと振り、思考を切り替えると我が主へと通信を急ぐのであった。

事件は数刻前に遡る。

帝国の皇女テオドラが、数名の護衛と共に、空間転移ゲートから姿を消した。

ウエスペルタティア王国とヘラス帝国の狭間にある街、オキブンバウンデで落ち合う約束をしていたらしい。

相手は、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア・・・ウエスペルタティア王国の姫である。

何故に、こうなったのか。

理由は定さだかではないし、今更そのようなことは些細なささいことなのだ。ただ重要なのは、皇女テオドラとアリカ王女が、その街のとある場所から連れ去られたという事実だけなのである。

精鋭といつてもいい魔法感知、防御に秀でた護衛は全て意識不明の重体または、死亡。

かろうじて、意識が戻った護衛の1人からの報告で、事が知れたわけであるが、駆けつけた担当官は首を捻ったことだろう。

会合が行われたとされる場所は、暴れた形跡もなく、忽然と姿を消したように見える。

神隠しにでもあったかのような、不思議現象。

残されたカップと紅茶にも不可思議な形跡はないのだから。

しかし、なんの手がかりも無いと思われたその場所に、現れた黒衣に青いフェイスマスクをつけた女性らしき人物は、『大神官』様の使いであると言い、その場を調査しだったのである。そして、数分もしない内に、その場からいなくなる。

掴んだ何かから、真実を導き出したかのように・・・

同じ頃、戦域から離れた連合の補給施設を一つ一つ襲来している集団があった。

元々の依頼主がアリカ王女であるにもかかわらず、元老院執行部の護衛を優先させる連合への不信感と、帝國戦域内で孤立したアリカ王女を助けたいというナギの気持ちから、連合と袂を分かつことにした紅き翼だ。

そんな彼らに緊急連絡が入る。

何者かにより、アリカ王女が誘拐されたというのである。

王国の護衛官経由で、そんなことを知ったナギと紅き翼アラルブラの面子は、独自の調査ルートで情報を集めた。

頭脳派である、アルビレオ・イマとゼクトの推理と判断により、囚われているならば帝國のではなく、連合の施設であるだろうと考え、一つ一つ力づくで探していくことにしたのだ。

そんな中、今までは、警戒する者さえいなかった施設の一つに、密かに物見の姿を伏せる施設を発見。

様子を見ようというアルの言葉を遮り、猪突猛進するナギとそれに

続く脳筋英雄達・・・

そして、施設の地下にある牢獄で、英雄と姫は再会を果たす。

「助けに来たぜ姫さん！」

何もない地下牢で、現れた英雄の姿に涙が零れそうになる・・・が、生まれ持ったの気丈さが人前で泣くことを許さない。

「遅いぞ我が騎士」

ほんのりの薄桃色に色づいた頬の熱を感じながらも、素直になれない自分を自覚する。

王女である自分と、ただの少女である自分・・・目の前の英雄はどちらの私を観ているのだろうか。

胸に住まう疑問は、怖さ故・・・口にすることはできない。

だからこそ、王女である自分を全面に押し出すしかないのである。

「さ、俺に掴まれ、ここから脱出するぜ」

「待ちなさい」

アリカ姫を抱き上げようとするナギに、ちょっと待ったをかけた。理由は明白、人前で恥ずかしいことと、隣の牢に居られてるテオドラを心配してのことだ。

「テオドラ様、助けが来ましたが、一緒に脱出されますよね？」

「うむ、よろしく頼むのじゃ」

当然、隣がガヤガヤすれば丸聞こえなワケであるが、皇女としての

威厳を持って返答に望む。

内心としては、こんな英雄よりも我が神に助けに来て欲しかったが、それは我が儘というものだろう。

結局、この施設を出て、アラルブラ紅き翼の秘密基地とやらに移動することになったが・・・

アリカ姫は、ナギにお姫様抱っこされてしまい・・・真っ赤になりながらナギの腕の中で暴れていたことを明記しておく。

「なんじゃこのボロ小屋は！これが英雄たちの隠れ家とはな！」

オリンポス山にあるアラルブラ紅き翼の秘密基地に着いたとたん、テオドラの第一声がこれだ。

100人が見れば、100人全員がそう思うだろう。

しかし、本当のことでも言っていないことと悪いことがあるものである。

「英雄といえど、ただの傭兵だ、そんな金があるわけじゃねんだよ！」

脳筋英雄ラカンの怒号が狭い小屋の中に響き渡る。

その声だけで、壊れてしまうのではないかと思われるくらい・・・ボロいのだ・・・この小屋は。

しかし、一応雨風は凌げるし、食事もできるし、寝る場所もある程度ある・・・まあ、プライバシーは守られないが・・・。

「さてと、どうする姫さんこれから。あんたも俺たちも連合に居場所が無くなっちゃった」

「しかも、帝國とは敵同士だった関係上、今更・・・膝を折るわけにも」

思案顔で・・・アリカ姫にこれからの行動計画について話を進めていくナギとアルビレオ・イマ。

アリカは、英雄達が真剣に自分の事を心配してくれている様子が・・・今はとても嬉しかった。

王国の進退について思い悩んでいた日々であったが、自分には・・・こんなに力強い英雄達がいるではないか。

「そうか・・・ならば我が騎士よ」

「おいおい、なんだよ、その我が騎士っていうのは。俺はクラスで言えば魔法使いなんだぜ？」

「そなたたちはまた、私の傭兵に戻ったのでしょうか？ならば、貴方は私のモノ・・・」

「ああ・・・そうだな」

「帝國に連合、周りは敵だらけ・・・世界中が敵ということになりますよアリカ姫」

「ですが、貴方と紅き翼アラルフラは無敵なのでしょう？」

「いいだろう姫さん、俺の杖と翼、あんたに預けるぜ」

「世界全てが敵・・・良いじゃないか、こちらはたった7人、だが最強の7人だ！」

□ 千の呪文サウザンド・マスターの男』：ナギ・ スプリングフィールド、

□ 重力魔法使い』：アルビレオ・イマ、

□ 千の刃のラカン』：ジャック・ラカン、

□ 京都神鳴流キョウトシンメイリウ流劍士』：青山 詠春、

□ 無音拳の使い手』：ガトウ・カグラ・ ヴァンデンバーグ、

□ 謎多き魔法の担い手』：フィリウス・ゼクト

そして、アリカ・ アナルキア・ エンテオフユシア。

世界を敵にすると宣言した仲間を見渡し、高揚した気持ちが一つになる……そんな気がする。そう思うことが、なにか……こう嬉しい気持ちになるのがわかった。

ただ……

1人蚊帳の外の置かれた……いや、会話に入っていけないテオドラが、部屋の隅でポツーンとしていたが。

物語はまだ終わらない。



22話 姫と英雄（後書き）

．．．．．  
なかなか、思いど通りの言葉を綴れないのが．．．もどかしいです。

## 23話 神の血を引きし者

.....

パチパチパチパチ.....

手を叩く音がする。

パチパチパチパチ.....

誰？

パチパチパチパチ.....

周りを見渡す.....

だが、手を叩いてる人は誰もいない.....  
どこから聞こえるの？

私だけなの.....聞こえているは？

上を見る。

下を見る。

もう一度周りを見渡す。

まだ拍手が続く・・・

そして気づく・・・

誰もいない・・・

今の今まで目の前にいた人が、周りにいた人達がいない・・・

そう、この部屋に、私以外の誰もいない・・・

私以外が、皆消えた・・・

違うわ・・・アリカ良く考えるのよ・・・

そう私が、私だけが、あそこから消えた・・・？

拍手が止る。

「やっと認識したか・・・随分かったな」

言葉の出先に首を向けると、そこには、純白の神官服を着た男が立っていた。

つい今しがた、自分の周りには、英雄達が、少し離れたところにテオドラ姫が・・・いたはずなのに。

そして、こんな男は存在していなかった・・・はずなのだ。

ココハ・・・ドコダ？

アレハ・・・ダレダ？

「あなたは・・・誰・・・なの」

突如として現れた男に警戒心を抱きながらも、男が纏まとう黄金の翔粒が、そして、その背中に生える二対の純白の羽が、本能に訴えかけるのだ。

『あれは人ではない』

「聞け、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア・・・神の末裔・・・その血を繋つなぐ者よ。」

アリカに近づくことなく、ある一定の距離を置き、男・・・宿参スサノノ王は、言葉を続ける。  
声は大きくはない、だが、凜とし頭に直接入ってくるような錯覚を起こす。

「ここは人間の意識領海の外側・・・力あるもの・・・力を得たものだけが、達することができる領域・・・」

宿参スサノノ王は語る。

この魔法世界を破滅へと導かんとする組織、『完全なる世界』が暗躍していることを。

今回の誘拐事件も、その組織が起こしたものであるということ。そして、同時に、アリカの妹・・・アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアも攫われ・・・今も所在が不明だという

ことも。  
そして、その目的は、古より受け継がれし『血に潜む特別な力』だ  
ということも。

「アスナが!？」

ウエスペルタイア王家の女系だけが受け継ぐ・・・その血に秘め  
られた力・・・それは・・・

『魔法無効化能力』

対魔法戦においては、ほぼ無敵となりえる・・・この能力。  
魔法使いは、魔法以外で勝負するしかないが、こちらは魔法を行使  
することが出来る。

魔法社会においては、絶対的な強さを誇る・・・故に、秘匿とされ  
てきた能力なのである。

何故なら、魔法使い達が、魔法戦において勝てないとわかっている  
相手を、天敵を野放しにしておくはずがないからだ。

実際、過去に暗殺という物理的手段で、葬られた王族も何人かいた  
のだ。

だからこそ、その秘密は、ウエスペルタイア王族の女だけ・・・  
それも口伝でのみの継承。

そして現在、その秘密を知るものは、アリカ・アナルキア・エ  
ンテオフュシアのみ・・・のはずであった。

なのに、その秘密を・・・宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は知っているのか。

アリカは再び考える。

目の前の男を信用してよいのか？

我が王家の秘匿を知るこの男を信用していいのか？

「別に信用なんてしなくていい」

なっ！

思考を読まれたことに目を開く。

「それよりも、考えるべきことがあるはずだ」

考えるべきこと・・・それは・・・アスナのこと、今後のこと。

アスナが、妹が攫われたらしい。

話の流れからいくと、『完全なる世界』という組織が犯人なのだろう。

王城に居たにもかかわらず、姫たる王女が攫われるという事態・・・それはつまり、ウエスペルタティア王国内部には、味方がおらず、その完全なる世界の手が伸びているということか・・・。

なんてことはない、先ほど英雄達と確認しあつたではないか、世界中を敵に回したと。

だが、自分の母国にまで裏切られたという思いは・・・ことのほか重いものなのだ・・・と感じた。

そして、この先、何を目指すべきなのか・・・私はいつでも無力な姫でしかないのか・・・。

いや、違う！

私には、頼もしい仲間がいるではないか！

英雄が！

ナギが！

そう、私は1人ぼっちじゃない！

「気が入ったところで、これからの話をするが・・・お前達の真の敵とでもいうのか、この戦争の原因はメガロメセンブリア元老院と完全なる世界だ」

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王のKYなのか、KYじゃないのかわからぬ話のやりとり、若干ムツとするものの、有益な話には違いないので、文句を言わずにキチンと耳を傾ける。  
そして、アリカは頭の中で、これからのことを組み立てていく。

メガロメセンブリア元老院 〓 敵

ウエスペルタティア王国 〓 敵

完全なる世界 〓 敵

ヘラス帝國 〓 敵？

目の前の男は・・・敵？

「別にそれでも構わんさ・・・些細なことだ」

敵になることが、敵と認識されることが些細なことだと言い切る男・・・本当に何者なの？  
アリカは身構える・・・心の中でだが。

「ん？そうか・・・オレは『大神官』と呼ばれる・・・神の代行者だよ」

な！

この男が、噂に聞く大神官……  
英雄を防ぎ、ヘラス帝國を勝利に導く神の使い……  
アリカは目をカツと開き、大神官と自称する男の背中に注目する。  
あの白くて大きな羽……あの二対の翼はなんだ？  
あれは、神話に描かれた『天使』ではないのか？  
神の使い……天の使い……天使！？  
大神官の正体とは……天使なのか？

「ふつ、この姿だけでそこへ達するか（まあ、勘違いさせておこうか）」

ならば、耳に聞こえし奇跡の数々も納得がいくというもの。

そうか、天使か……天使……ヘラス帝國の大神官……ってだめじゃない！

ヘラス帝國〓敵。

つまり天使も敵？

駄目駄目駄目……っていうか無理無理無理！

天使相手に勝てるわけがない……ならば、ヘラス〓味方……それも難しい。

それならばいつそのこと……

「あなた、私のモノになりなさい！」

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は、思考の遙か上空の言葉に、時間が止まるのを知覚した。自分の正体が天使（間違いだが）だとわかってても、恐れず、敬わず、上から目線とその言動。



「申し訳ございません。大変失礼な事を・・・本当の申し訳ございませんでした」

一国の王女としても、年頃の娘としても、余りに恥ずかしすぎる言動であったと深く反省する。

しかし、目の前の天使様は、今、聞き捨てならない事を言ったような気がする。

そう、『姉上の血を引く』と。

「話すつもりは無かったのだがな・・・まあ、いいか。」

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王は、アリカに他言無用と念押ししながらも、気になるそのことについて説明をしてくれたのだった。

太古の遙か昔、この魔法世界<sup>ムンドゥス・マギクス</sup>を造り出したのは太陽神であるのだが、何百年経っても、文明といったものが発展しないことに腹を立てた太陽神・・・姉上のことだが、自らの写し身<sup>アバター</sup>を受肉させ、この地に国というものをお造りになった。

それが、ウエスペルタイア王国の始まりであり、この魔法世界が発展していく切っ掛けとなったのだ。

ある程度熟成していきたこの地は、異界人たちの戦略を受けたこともあるが、そこは、強くってカツコイイ神が降臨し、撃退したらしい。

「そして、その子孫になるのが、お前というわけだ」

話の内容が内容だけに、なかなか理解が追いついてこなかったアリカであったが、ゴクリっとその全てをのみこんだ。

つまり、伝わりし伝承は本場で、自分は神の血を正真正銘引いてい

るとわかった。

そうすると、始祖の弟？になるこの天使様のことは、なんとお呼びすべきなのかしら・・・そんな疑問が浮かんできたのだった。

「好きに呼べばいい、別にこだわらんよ・・・直接お前には関係のないことだしな・・・さて、戻るか」

関係ない・・・か。

始祖の弟であるならば、王族として敬わなければならないだろう。

しかし、自分の中に流れる血の数は、天使様・・・大神官様と同じでもあるはずだ。

つまり、血族と言えないこともないわけであるから・・・ならば、あまり他人行儀な呼び方も・・・

「そうだわ、ならば貴方のこと・・・『お兄様』と呼ばせていただきますわ！」

物語はまだおわらない。

23話 神の血を引きし者（後書き）

.....

アリカー人称・・・読みにくくてすみません。

やはり、連投できませんでした。

週休四日欲しいです。

## 24話 踏み越えるべきこと

.....

パチパチパチ・・・

「感動したよ。姫と英雄達が心を一つにするシーン・・・いやあ、感動したよ」

手を叩く・・・拍手の音がする方を皆が一斉に振り向くと、テオドラ姫の傍らで、うんうんと頷きながら、拍手をする男・・・大神官こと、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王が居た。

「なっ、お前は大神官！」

その姿に真っ先に気づいたナギが、アリカを庇うように前にでる。他の面々も、瞬時に臨戦態勢を整える。

後日、ナギは語る・・・その時は闘うしかないと思ったのだと。

「さがってな姫さん・・・大丈夫だ俺達が絶対守る！」

「あっ！ 待っ・・・」

「いくぜー!」

「「「「おう!!」「「「「」

アリの声を遮り、ナギの言葉を皮切りに、英雄達は、目標に向けて襲いかかる。

ずいっと、テオドラの前に出た宿参ノ王スサノオの真正面に対して、ガトウはいきなり大技を繰り出す。

「豪殺 居合い拳!!」

ガトウが繰り出す拳圧による居合い抜き・・・しかも5連撃!

ここは狭い小屋の中だ、飛び上がってかわすことは出来ない。

躍り出たガトウと宿参ノ王スサノオとの距離は2m・・・その間の空間では、拳圧と何かにぶつかる衝撃音と見えない拳だけが交差しているようだ。

そして押し出された空気が風を起こし、舞い上がる何かにより視界が一瞬悪くなる。

「神鳴流奥義!百花繚乱!」

その隙を突くかのように、真横から詠春が神鳴流秘剣にて、真空の刃と気で一直線に斬りかかる。

サムライマスターとしての意地と全力が込められたその一撃に対し、宿参ノ王スサノオは、『ダンッ!』と震脚と共に一言唱える。

「土角結界」

その言葉に応えるかのように、宿参ノ王スサノオの前面三方向に、猛烈な勢いで地面から迫出した土の立方体が、床を突きぬけ天井すらぶち抜いた。

詠春の一撃が防がれ、土の塊を砕きながらも止められたことがわか

ると、極大呪文を唱え終えたナギとアルの魔法が炸裂する。

「ディオス・テュコス雷の斧!!!」

「フレスト・グラビティ超重力弾!!!」

阿吽の呼吸で距離を取ったガトウを詠春の間を抜くように、土の壁を破壊しながら黄金の雷が、黒い重力弾が宿参ノ王スサノオに降り注ぐ!

だが、それだけでは終わらない・・・濛々もっもっと立ち込める土ぼこりの中へ、更なる一撃が突撃する!

「ラカン・インツ　パクトオオオオ!!!」

亜高速の拳が、空気の渦を巻き込みながら真っ直ぐに宿参ノ王スサノオへと突き刺さる。

周囲が吹き飛び、至近距離で爆弾が爆発したかのような惨状が目の前にあつた。

紅き翼の対大神官コンビネーションが炸裂したのだ!

そして!

そこには、両手を広げ・・・苦悶の表情をする宿参ノ王スサノオがそこにあり、その胴体に大きな穴が空いていた・・・

アリカは見た・・・見てしまった。

宿参ノ王スサノオの胴体のその穴の向こう側には、泣きながら驚きの表情で震えているテオドラの姿を・・・

「ぶはあっつ!!!」

盛大に口から大量の真っ赤なナニかを吐き出し、片膝を付く男の姿を見て安堵の表情をする英雄達を。

「イイヤアアアアア」

突然叫び出したアリカ姫に英雄達は驚き、何事かと周囲を見渡す。しかし、その空間には、涙を目に溜めながら叫ぶアリカ姫と、恐怖に怯えているテオドラ姫、そして、真っ赤に染まった神官服の男だけが居るだけだった。

そう、ただそれだけ。

英雄は敵を倒し、姫を守った・・・ただそれだけ。

それだけなのだ。

「くっ、ブハツ・・・さ、流石に英雄と言われることは・・・ある・・・か」

紅黒い液体を吐き出しながら、苦痛に顔を歪め、宿参ノ王スサノオは言葉を搾り出す。

その姿、言葉を聴き、目が覚めたかのようにテオドラは抱きついた。

「ス、宿参ノ王様！」

秘匿をされた名を口に出しながら、テオドラは、無敵であったはずの神に縋りつく。

その衣服は、真っ赤に汚れ、ヌルツとした液体の感触が、今ある現実を正確に伝えていた。

「すまない、テオドラ・・・約束・・・守れない・・・」

「喋らないで！今、今、治癒魔法を！」

「いや、この状態では・・・無理だ・・・」

「でも！でも！」

泣きながら抱きつくテオドラを抱きしめながら、立ち上がった宿参スサノ王は、真っ直ぐにアリカの目を見る。

「アリカ・・・これが現実。人の生き死にはこんなものだ。それを踏み越えて、初めて英雄となり、王となるのだ・・・お前が歩む道は険しいぞ」

真っ赤に腫らした目で宿参スサノオノ王を直視しながら、アリカは、何を伝えたかったのかを感じ取った。

人としての何かを捨て去らねば、人の上には立てぬということかもしれないと。

「むう・・・こ、ここまで・・・だな・・・さら・・・ば・・・だ・・・」

その言葉を待っていたかのように、一陣の旋風が巻き起こり、徐々に崩れ落ち、土くれに変わっていく宿参スサノオノ王を掃きだしていった。そして、後には何も残らない・・・ただ、泣きはらすテオドラ姫だけが、その場に居るだけだ。

「お・・・お兄様・・・」

えっ?!

ぎよつとした顔で英雄達は、アリカ姫を見、そして、その言葉の意味が何を指すのか考えた。

兄・・・とはいったい?

そして、土になり崩れていった大神官は、何者だったのか・・・

「姫さん・・・あいつはいつたい・・・」

ナギの言葉は、ここに居るアリカを除く全員の疑問であった。

帝國に与力する大神官を 『兄』 と呼ぶその訳は・・・。

「てん・・・いや、大神官様は、ウエスペルタティア王国に深く関わりのある方で、詳しくは申せませんが・・・私は、お兄さま・・・と呼ぶことにしていました」

なんですとお!

アリカ姫のビツクリ発言に、皆言葉を失う。

敵と思っていた男が、実は、アリカ姫の兄?で、さらに、問答無用でやつつけちゃって、そして、土になっていなくなってしまういた・・・って、ダメじゃん!

脳筋英雄達にも、今この場で起きた・・・いや、起こした一連のことが、非常にまずいことであるのは理解できた。

『どうすればいいのだ!?』とナギがアルやゼクトを見るが、彼らも呆然としており言葉が出せない。

どうしてこうなったのだ・・・と思う意外でできなかった。

「だから、待つてといったのに!何故、いきなり攻撃を・・・ああ

ああああ  
」

泣き崩れるアリカ姫に掛ける言葉を見つけれず、ただ立ち尽くすしかない英雄達。

取り返しのきかない事態に、泣くことしか出来ないアリカ姫。

しかし、アリカは思い出す、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王の言葉を、そして、これから立ち向かわねばならぬ敵と、救わねばならぬ妹と国の民たちのことを。

『泣いてなんかいられないわ』

そう思い、スクツと立ち上がると、英雄達を見渡す。

この英雄達は、自分を守る為に戦っただけ、彼らは、彼らの役割に準じただけのこと。

ならば、私も、自分の役割をしっかりとこなさねば・・・お兄様に怒られてしまうわね・・・そう言い聞かせ、目に堪る涙を袖で拭う。いつまでも、悲劇のヒロインではいられない、自らの足で踏み出さねば。

でも・・・テオドラ姫には、残念な結果となってしまうた・・・そのことを思うと、その身が背負うべき罪悪感が酷く重くノ圧し掛かるのを感じた。

「テオドラ姫・・・あの・・・なんといいのか・・・申し訳ありません」

床に座り込み泣いているテオドラ姫に、恐る恐る声をかけるのだが・

・  
スクッと立ち上がったテオドラは、こちらを見ることもなく、目を伏せながら、小屋を出ようとする。

扉に手を掛け、ピタッと止ると背中越しに、アリカへ一方的に話しかけた。

「今回の件は・・・お互い不幸であった・・・だから・・・私は感謝もせぬし、謝りもせぬ。それだけじゃ・・・」

そういうと、そのまま、外へ出て行き扉は閉められた。

重苦しい空気と罪悪感とその場を支配していたが、アリカは「ハツ」と気がつき、外へ駆け出す。

何故なら、ここは、山の中。

ヘラス族とはいえ、女の子一人が、気軽に歩き回れる場所ではないのだから！

しかし、外は鬱蒼と生い茂る樹木があるだけで、テオドラ姫の姿を探し出すことはできなかった。

物語はまだ終わらない



24話 踏み越えるべきこと（後書き）

.....

やってしまった・・・

やられてしまった・・・主人公・・・いいとこなしですね。  
でも、続きます。

楽しく読んでいただけたら嬉しいです。

## 25話 いたずらと思惑

.....

「わああくはっはっはっはっ.....」

ここは、ヘラス城内、皇女テオドラの室内。

大声で、笑い転げる1組の男女。

知らぬものが見れば、御乱心か！と思われても仕方がないほど、転げまわっていた。

突然スクツと立ち上がると.....男.....スサノオ宿参ノ王だが、キリツとした顔で、テオドラへ向き合っ。

「すまない、テオドラ.....約束.....守れない.....」

それに応えるかのように、さも悲しそうな顔で応えるのはテオドラ。

「喋らないで！今、今、治癒魔法を！」

「いや、この状態では.....無理だ.....」

「でも！でも！」

そして、二人は見詰め合う・・・

「……………ぷっ！わああはっはっはっ……………」

再び転げまわる二人なのだった。

思う存分笑ったからであろう、腹筋が痛くて、笑うことが苦痛になるほど転げまわっていた2人だが、ひと段落したのか、給仕にお茶の用意をさせていた。

何故に二人はココにいるのか？

詳細はこうだ・・・

いきなりの紅い翼による攻勢に、驚いた宿参スサノオノ王だったが、ガトウの攻撃をいなしている内に、ピンッと閃いた。

内心のニヤニヤを飲み込み、攻撃の隙を突いて、土角結界で視界を覆い数秒の時間を稼いだ間に、念話にてテオドラを会話をしていたのだ。

「テオドラ・・・面白いこと考えた！」

「ええ?!」

「お題は、この前劇で見たアレな！姫を守る騎士、その役目を全うする……………」

「いったい何を？」

「いいから、いいから、お前の演技力を楽しみにしてるからな」

こんな念話を取り交わされ、面白そうじゃ、ならば妾の演技力を見せ付けるのじゃ！と意気込んだらしい。

そして、写し身を新たに土角結界の土より作り出し、本体は小指くらいの大きさに縮身し、写し身の首元に張り付いたのだ。

テオドラは、おおまかな流れを指示され、言われるがままを演じようとしたのだが、余りの激しい攻撃に本気で怯えてしまい、宿参<sup>スサノ</sup>ノ王の背中を見つめることしかできなかつた。

詠春を退けた後の、ナギ・スプリングフィールドとアルビレオ・イマの魔法は、土角結界を抜けることは出来ず、しっかりと防がれていた。

受けきつた後、結界を破裂させ、攻撃が通った、又は結界破壊を装ったのだ。

その後突っ込んできたラカンの攻撃は、自前の障壁で受けきつたのだが、余波だけをその身に貫通させた。

すっばりと穴が空いたのには驚いた（テオドラはもつと驚いた）が、中々面白いので、そのまま対峙しようと考えたのだ。

冷静に分析していれば気づいただろう・・・

穴の開いた身体の真後ろにいたテオドラが無事なことを。

背骨を失った体が、真っ直ぐ自力で立ち上がれる訳がないことを。

吐き出された液体は、血液に似せた唯の水だということ。

だが、あの・・・ひっ迫した場面で、そこまで誰も冷静にはなれず、場の雰囲気<sup>キョウキ</sup>に呑まれた・・・いや呑まされていたのだ。

そして、『ハッ』と気がついたテオドラが、真迫の演技で冒頭のや

り取りを交わし、劇は終演となったのだった。  
その後、テオドラに移った宿参ノ王スサノオの指示で外へ出、超距離転移で戻ってきたのだ。

アリカには、ちよつぴり悪いかな・・・と思つたりもしたが、宿参スサノノ王は危惧したのだ、孤立した戦力の方向性を。

このまま行けば、確実に『紅い翼とアリカ姫』は暴走しただろう、世間知らずの姫と力任せの英雄達。

メガロメセンブリア元老院の老人たちに、うまく踊らされ、情報の真偽を確認しようとしてもしない杜撰ずさんさ。

慎重さを臆病と書き換え、無謀すら可能にできると思っていたようだが、そんなことでは世界の命運を任せるなど片腹痛い。

だが、我の強い紅い翼かれらに正面から真実を伝えたところで、素直に聞くとは思えない。

ならば、絡め手で躍らせるのが上策というものだ。

本人達は知らぬ・・・その行動そのものが神の意思であることに。

明確な目標を得た彼らは、きっと上手く踊り続けるだろうと宿参スサノノ王は確信していた。

後は、この魔法世界そのものが持つ予定調和と修正力の闘せめぎ合いだろう。

宿参スサノノ王はいつも思う。

英雄と呼ばれたモノ達が、幸せになった例は思いの外少ないということ。

暴れ所が無くなれば、居場所や行き場を無くす存在・・・それが英雄。

戦時であれば、敵を何百、何千と屠ほろむることで輝ける存在も、平時には、そうそう輝く機会がないのも事実。

だからであろうか、輝きが陰った英雄を、周りは疎外してしまうのは。

権力に、利権に振り回され、凋落していく英雄とその仲間達……そんな姿を数多と見てきたからこそ思うことがあるにはある。

だからこそ、この世界で新たに現れた英雄達を……ただの英雄で終わらせるには面白くなかった。

だが『男』を育てるなんてこと全く思わないし、やりたいとも思わない。

宿参ノ王スサノオは、ある意味……厳しい神なのだ。

そんなこんなで、世界の進み方を静観しようと思った故に、その存在を消そうと考えたのだ。

面白そうな事になれば、また、そのとき考えようかな……そんな軽い気持ちもあるのではあるが。

一方、神に期待されていることを知らない英雄達は、アリカ姫がもたらした情報（宿参ノ王スサノオからのモノ）により、世界各地の遺跡や戦地を飛び回ることとなった。

紅い翼アラルブラの目的は3つ。

1つ目は、アリカ姫の妹……アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフウシアの所在調査とその確保。

2つ目は、世界を戦争の渦へと巻き込んだ……らしい悪の組織『完全なる世界』の撲滅。

3つ目は、戦争の早期終結とその後の平和維持活動。

英雄としての名を馳せた紅い翼達アラルブラに、協力する人達は続々と増え、また、その影響を受ける人達も増えていった。

そして、孤児を引き取ったり、面倒を見たりと、戦いだけでなく、

平和維持への準備も若干ではあるが進めようとしていた。しかし、どんなに情報を得ても、アスナ姫の所在は不明。

「完全なる世界」の拠点は見つかるものの、本拠地に対する情報は見つけれないでいた。

日が経つに連れ、英雄達の疲労とアリカ姫の心労は積み重なっていく。

周りに明るく振る舞っているものの、その笑顔はどこか痛々しく、悲しみを帯びていた。

そんなアリカ姫を、周りは優しく見守りながらも、彼女を助けるべく全力で事に当たっていた。

そんな中、ある1人の情報屋がもたらした事実が、世界を叫喚させた。

物語はまだ終わらない。

25話 いたずらと思惑（後書き）

・・・  
前向きに頑張りますので、宜しくお願いします。

## 26話 大分烈戦争最終決戦前

.....

「なんだと！」

3日後に、ヘラス帝國は、ついに、メガロメセンブリアの直接侵攻を再開するという。

その情報は、軍部の極秘情報であったはずだが、アラルフラ紅い翼に賛同する・  
・商人達から漏れ出た情報だった。

そして、勿論その情報は、連合にも漏れることになり、首都を固める連合軍は混乱の渦に巻き込まれるのだった。

だが、驚いたのはそのことではなかった。

帝國の再侵攻に対し、メガロメセンブリア元老院がやるうとしてい  
る作戦・  
・ヘラス帝國首都直撃計画の全容がわかったからであ  
った。

なんと、浮遊大陸を数多く所有するウエスペルティア王国の浮島  
そのものを、ヘラスへ直撃させるといううはくばかく烏白馬角とした計画。

魔法力で浮遊する島ではあるが、その島自体を動かす、尚かつ落下  
させようとする発想に笑うしかない。

今までの常識であれば、鼻で笑い飛ばしていただろう・  
・なにを  
馬鹿な・  
と。

だが、ナギを始めとするアラルフラ紅い翼の面々は見たのだ。

『完全なる世界』の拠点で目にした不可思議な機械や装置を。

新世界出身者であるナギと詠春には判る・  
・コレは新世界の科学  
文明を凌駕している代物だと。

何故こんなものがココにあるのか判らないが、『完全なる世界』という組織の恐ろしさを垣間見た気がしたのだ。ただ、テレビ付き炊飯ジャーを発見したときの詠春の喜びようには、皆引いていたが・・・

「くっ、何故わからない！テレビを見ながら何処でも、ご飯が炊けるのを待てるという素晴らしさが！」

それはさておき、その計画自体を笑い飛ばすことの出来ない紅い翼アラルブラの面々は、速やかに決断をしなければならなかった。

アリカ姫は、その情報を聞き、悩む。

メガロメセンブリアの直接侵攻は、戦争の早期終結を目標に掲げる『紅い翼』アラルブラとしては、願ってもないことだ・・・しかし、そこに参戦すること・・・帝国と協力しあうことが可能なのだろうか・・・と。

また、母国での不審な動き・計画も気になる・・・今だ所在のつかめない妹の生死もさることながら、浮遊島を戦争の道具にしようとしているメガロメセンブリア元老院に激しく憤りを感じるのと同時に、その計画の一端になっているであろう父王やその重臣たちの愚かさに・・・涙が出そうであった。

逆に、ゼクトやアルは別のことを考えていた。

これを期に、不可思議な動きをする者達が必ず出てくるはず・・・その者達を洗えば、アスナ姫や完全なる世界の情報を得られるのではないか、というものだ。

今までの調査や集まった情報で考えると、メガロメセンブリア元老院は『真つ黒』だ。

秘密結社「完全なる世界」との繋がり間違いはない、だが、その評

議員全員が『真つ黒』と言い切れないが故にやっかいなのだ。であるから、評議員の中でも、最も「完全なる世界」に近い者達が、首都メガロメセンブリアを見限り、己の保身のみ固執し、「完全なる世界」の本拠地に逃げ込むのではないか……そう考えられるのだ。

ならば、我々『紅い翼』は、メガロメセンブリア侵攻戦に参戦せず、最優先事項である『アスナ姫の確保』、『完全なる世界の撲滅』に力を注ぐべきではないだろうか。

完全なる世界の本拠地を叩けば、ヘラス帝國への浮島攻撃をも阻止出来るかもしれないからだ。

「ひっかかりますかのお……」

テラスで紅茶を楽しみながら、最近では兄弟のように接する……

我らの神……宿参ノ王スサノオと共に最終作戦の詰めをしていた。

情報部が流した『メガロメセンブリア侵攻戦』これは囷だ。

囷はいえ、キチンとした戦力で攻め落とす腹づもりである。

売られた喧嘩には、キツチリ落とし前をつける……と皇帝は断言していたことであるし。

だが本命は、秘密結社『完全なる世界』の本拠地の強襲なのだ。

ナギ達紅い翼アラルプラとは別に、ヘラス帝國としても、その組織を野放しにしておくつもりはなく、手を打ってはいなのだ。

そして、今回……宿参ノ王スサノオは、世界を篩ふるいに掛けようとしていた。

ヘラス帝國、ウエスペルティア王国、メガロメセンブリア……この三国において、この情報を得た者達がどう動くのか、それを見

極める為の策でもある。

国を愛する者、責任を負う者は、その国のために動くであろう。  
国を売る者、己の権力・利権に固執する者は、逃げる又は、より強い勢力に縋るであろう。

だが、世界を破壊したいと願う者は？

帝國軍、連合軍・・・どちらかの陣営に属し戦いに身を投じる者は  
『白』

離脱または、ウエスペルタティア王国の王都オステイアへ逃げ込む  
ものは『黒』

そう断ずることとした故、離脱者は、秘密裏に輝ける漆黒ユキビヤニークラの使徒達  
が始末をつける。

誰であろうと・・・絶対にだ。

そして、ウエスペルタティア王国の王都オステイアの最深部にある

『墓守り人の宮殿』こそが『完全なる世界』の本拠地である可能性が高いと判明したため、最大戦力で強襲するつもりなのだ。

ただ、地続きでない浮遊島であるため、投入できる戦力は限られてくる。

完全なる世界に悟られることは前提条件とし、迎撃準備を間に合わせないことが作戦の肝になるだろ。

ヘラス帝國からは、強襲空撃艦隊 全師団と特務魔法隊 2師団。  
魔法都市アリアドネーからは、アリアドネー魔法騎士団。

NGO団体 悠久の風 (Austro-Africanus Aeternalis) からは、各旅団。

『完全なる世界』の危険性を理解できる者達だけが参加する・・・

各自思惑は多数あろうとも、自分たちの世界を守るという想いに掛けて、許せないものがある。

その一点にのみの共通点を持った多国籍軍。

そこに、なにかしらの正義はあるだろう・・・だが、皆が同じ正義を持っていないことが理解できているからこそ、力を合わせられるのだ。

世界のために。

自分のために。

愛する家族や仲間のために。

世界を巻き込んだ最終決戦の時は・・・目の前まで来ていた。

飛空船・・・空を旅する、又は移動するための船。

その船・・・その外装は物々しく、闘うことを前提とした船達。

いわゆる軍用船というものであるのだが、この魔法世界にある飛空船の約六割強が・・・ここに浮かんでいた。

そして、回転するプロペラの音や、動力の駆動音、そして、これから攻め入ろうとする、戦士、騎士、舞闘家、魔術師、僧侶、踊り子、商人達などが発する音・声がその場を埋め尽くしていた。

だが、その攻め手を待ちかまえるかのように、『墓守り人の宮殿

』と呼ばれる浮遊島にある、朽ちかけた遺跡の入口までの大きく拓けた場所に犇めくモノ達。

人でもなく、動物でもなく、昆虫でもない・・・造られたキメラなのか、呼び出された下級魔族なのか、知性を感じられない・・・そんな生き物達が科せられた使命は、侵入者の排除。

数 対 数の総力戦が始まろうとしていた。

そして、皆は待っていた、ここに集う者達の希望の星・・・英雄<sup>□</sup>

『<sup>アラルテラ</sup>紅い翼』を。

ヘラス帝國に舞い降りた神の使い<sup>□</sup> 大神官<sup>□</sup> を。

物語はまだ終わらない

26話 大分烈戦最終決戦前（後書き）

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
大暴れしたい！と思います。

## 27話 墓守り人の宮殿殲滅戦

.....

「それ！撃ち込むのじゃ！」

第三皇女テオドラの号令を皮切りに、墓守り人の宮殿殲滅作戦は開始されたのだ。

ドドオーン！！

ドドオーン！！

ドドオーン！！

ヘラス帝國が誇る強襲空撃艦隊、約180隻からなる軍船が放つ砲撃により、浮島から飛び立とうとしていた魔物が一掃され、接岸予定地に向けての怒濤の砲撃音が辺りを支配する。

リズムを刻むように放たれるその攻撃に、魔物達は、ただただ倒されていくだけであった。

暫くすると、接岸した殲滅チームが上陸し仮司令部を設置、墓守り人の宮殿への侵入準備に取りかかる。

そして、この地に存在する魔物を殲滅すべく、各地部隊がそれぞれの役割を果たしていく。

その中で、とりわけ目立つ成果を上げていく一団・・・といっても三人なのだ。

黄金のファントムマスクで、今までの鬱憤を晴らすかのように、縦横無尽に暴れ回っているのが、我らが『大神官』宿参ノ王。スサノオ

青色に三日月の模様があしらわれたファントムマスクで、スサノオ宿参ノ王をフオローするように範囲魔法を撃ちまくっているのが、『オイバ独りイマジック魔導炉』イマジック白昼の残月。

白色に猿面冠者が描かれたファントムマスクで、伸縮自在の棒術で好き勝手に、敵を薙ぎ倒しているのは『えんぎようじや猿行者』孫悟空。

マスクで顔を隠した一団は、当初、怪訝に思われたものだが、第三皇女テオドラ自らの出陣と説明により事なきを得た。(テオドラは、ピンク色のマスクを胸元に仕舞っていた模様)

「大神官様とその従者殿達も参戦なされることとなったのじゃ！」

そのテオドラが発した言葉の意味を理解した帝國軍人達のテンションは、ウナギ登り。

大神官様と共に闘う事の出来る栄誉・・・それはアル意味、今の帝國軍にとっては最高の事であるのだ。

そして、軍神とも呼ばれ始めた大いなる神の使いに『負け』は無いのだから。

言葉は発せぬものの、その身体から滲み出る波動は、本物であり、周りはこの世界の『王』であるかのような扱いをしたという。

斯くして、順調に殲滅戦が遂行されていく中、突入部隊は、墓守り人の宮殿に侵入を開始するのであった。

「さてと、オレ達もぼちぼち行くか」

まるでコンビニへ買い物でも行くかのように、三人は宮殿へと入っ

ていく。

中では、畏や魔物に苦戦しながらも、奥へ奥へと侵攻していく殲滅チームであったが、行き止まりとなった壁がそれ以上の侵入を拒んでいた。

「ここから先は、我らだけで進む・・・無駄に命を散らすことはない」

有無を言わせぬ強言で、部隊を留まらせると、両手を壁に翳す。

すると、ほんのりと壁の一部が光り、カシユウウウ・・・壁の一部が地面へと消えた。

三人はそれが当たり前のように、何も気にせず、ズンズンと進んでいくのであった。

何も知らぬ兵士たちは、『やはり、大神官様は違う・・・』と更なる畏敬の念を強くしたという。

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王達からすれば、自動ドアの電源を入れて、部屋に入ったようなもので、危険性などは露ほども感じていなかったのだが。

少し歩くと、『完全なる世界』に属する荒くれ者達が、お客様を出迎えていた。

ここに詰めているということは、それなりの腕前を有しているのだろう、その顔には、油断も慢心も感じ取れはしなかった。

しかし、ずいっと前に出た悟空が、ちよいなちよいなと挑発すると、『面妖な奴らめ』と斬りかかってきた。

「そんな腕で、わちきに斬りかかるたあゝ1億年早いやネエ！」

両端に金色の輪がはめられた神珍鐵<sup>しんちんてつ</sup>の棒、正式名称『如意金箍棒<sup>にょいきんこほう</sup>』お椀程の太さで使用するこの如意棒、長さを自在に操れることもさ

ることながら、重さは何と、一万三千五百斤（約8トン）。

そんなもので殴られた全ての者は、問答無用で言っても哀れな姿へと変わり果てる。

どんな鋭利な剣戟であろうとも、その棒を斬ることなど出来るはずもない。

そんな如意棒を振り回す悟空を先頭に、一行はズンズンと奥へと歩を進めていく。

「あらあら、珍しい素体ね」

残月が何かを察知したようだった。

すると、新たに出現した扉を守るかのように、白銀髪の少年が姿を現した。

「ここから先は行かせないよ・・・大神官とやら・・・障壁突破  
石の槍！」

そう言った瞬間、宿参スサノオノ王の足下から、丸太ほどある複数の鋭い石の槍が延びる。

だが、その全ては、障壁に阻まれ、反れるようにして天井へ突き刺さった。

「僕の石の槍が突破できない障壁は・・・初めてだよ」

少し焦ったのか、やや上擦っているその声の主に向かい、悟空が神速で如意棒による突きを繰り返す。

少年は、滑るような移動術で、後ろへ、横へと攻撃を避け続けた。その技術は賞賛に値するだろう。

なんせ天界の暴れ猿、斉天大聖 孫悟空の攻撃を避けているのであ

るから。

『ならば！』と悟空がギアを上げ、超神速に切り替える瞬間、ジャポントンと音を立て、いつのまにか出現した水たまりに姿を消したのだ。

そして、現れたのは、残月の後方。

物理的な攻撃では叶わないと知ったのか、一番弱いものから狙うのが上策と思ったのか、現れた瞬間 石の槍を繰り出したのだ。

だが、果たして残月は弱いのであろうか？

外見に見合わぬ大型の杖を手に持ち、どこから見ても魔法使いにしか見えないローブ姿。

対魔法戦の巧緻者、反則的な魔力をその身に宿した『オーバーマジック独り魔導炉』の二つ名を持つ白昼の残月という女性。

魔女と呼ばれることを心底嫌うこの残月も、当然のように、普通ではない。

いや、普通でなくなった・・・と言った方が正しいのだろう。

そんな彼女に・・・白銀髪の少年が放った、石の槍は見事に突き刺さったのだった。

背中から腹部を貫通し、丸太のような太い石の槍が突き抜けた。

だが、それだけであった。

そう、突き刺さった腹部を見ながら、『あらあら』とつぶやく残月。そこには、諦めも悔しさもない。

ただ、なんというか、『ご飯を食べてたら、おみそ汁こぼしちゃった・・・』的な感じであったのだ。

「いきなり、後ろからなんて、おませさんね！」

子供の悪戯をしかるお姉さんのような口調で、後ろを振り向くと、



真っ二つにされながら、青白い炎を上げて燃えていった。  
言葉を無くし、炭素の固まりとなったソレを放置し、三柱は・・・  
さらに奥を目指す。

物語はまだ終わらない

27話 墓守り人の宮殿殲滅戦（後書き）

.....

暴れたらないですね〜

もっと戦闘描写を勉強せねば・・・

頑張りますので応援お願いします。

## 28話 宮殿の奥にて

.....

「スー様、後方から・・・」

「ああ、やっと来たようだ」

敵を排除しながら進む宿参スサノオノ王一行は、後方より聞こえる足音に気を向けた。

足音から察するに人数は7人。

魔力保有量から察するに、紅アラルブラき翼の面々だと思われる。

「くそお〜もう敵が残ってないじゃねえかあ！」

「隊長さん達の話では、大神官の従者達が先行しているようですが・・・」

「我が騎士達遅いぞ！もつと早く走りなさい！」

「わかってるって！だいたい姫さんが、我が儘言うから遅れたんだろっが！」

「.....」

「だあ〜ラカン！ナギ！文句はいいから走るんじゃ！」

アリカ姫に叱咤され、ゼクトに怒られながら、アラルブラ紅き翼の面々は暗がりの回廊を駆けていた。

本当なら、今作戦……『墓守人の宮殿殲滅作戦』の攻撃態勢が整う前に到着し、関係各位に挨拶した後、先頭を切って戦いに参加する予定……そう、予定であったのだ。

だが、いざ出発の段になってから入った情報……『大神官とテオドラ姫も参戦』との報に、黙っていられなかった……じっとしていられなかった姫が1人。

「私も行きます」

周りは当然のように反対し、安全面の確保が難しく、危険と隣り合わせであるし、なにより、足手まといであった。

しかし、1度言い出したら聞かない性格であるし、テオドラ姫が参戦できて、私が参戦できない理由がない……と周りに反発する始末。

アラルブラ紅き翼達も、テオドラ姫を取り巻く環境（主に護衛の厚さ）との違いを武器に説き伏せようと試みたのだが、『私の騎士達は世界で最強なのでしょう？私を守ってはくれないのですか？』と切り返すのであった。

結局、折れた……というか諦めたナギが了承したので、付いてくることとなったのだが、そんな遣り取りに時間を取られ、戦闘開始時刻に間に合わなかったのだ。

別に思いつきだけで、参戦を強く希望下ではない。

アリカ姫には、アリカ姫なりの思惑や考えがあつてのことだったのだが……。

1つ目は、作戦戦域がオスティアにある『墓守人の宮殿』であ

る為、自分が参戦することで、ウエスペルタイア王国自体が、『完全なる世界』とイコールで無いということを世界に示さねばならないということ。

2つ目は、ヘラス帝国の姫が参戦しているのに、ウエスペルタイア王国の姫は自国の危機に対して、見ているだけの臆病者、卑怯者の誹りそしを受けるわけにはいかなかった。

何故なら、それは、我が騎士達……アラルブラ紅き翼にも影響すると思えたからである。

3つ目は、参戦すると聞いた『大神官……様』の存在の有無をこの目で確認したかったのだ。

あの時、目の前で消え去った……天使様……大神官様……お兄様……。

後から考えれば考えるほど、不自然と思えたあのコトを。

確かに、アラルブラ紅き翼達は強い。今まで見聞きした誰よりも強いことは理解しているのであるが、お兄様……が、ああも簡単に倒されてしまふモノなのか……共にあったテオドラ姫の態度……と冷静に考えてみれば、何かの理由を持ってソレをされたのではないか……という思い。

確かに、あの時まで、悲劇のヒロインじみた思いがあったと思うし、世間を知らぬ空論や理想で物事を判断していたとも思える。

だからこそ、目の前での過激な戦闘、人の生き死に、命の重さ……気持ちも思考も、今では……前進できたと思っっているし、しなければならぬと強く思っている。

そして、それは全て……お兄様が私の為に施してくれたのではないか？

そんな想いが……自分の中にあることを否定しきれなかったのだ。もしできることならば、直接会ってお話したい……それが一番の望みだったのかも知れなかった。

そんなアリカ姫を守るように、暗がりの宮殿内をさらに疾走する紅ラルブラき翼達。

この宮殿へ入るときに確認したが、先行するのは、『大神官様の従者殿達』という情報……。

今まで、大神官に従者がいたという話は聞いたことがなかったが……。

そして、神殿内各所に見られる戦闘の痕跡……いや一方的な殺戮のように見れるそれを確認しながら、先行する大神官の従者達の実力に身震いする。

なにをどうすれば、このような結果が生みだせるのか？

超重量に押しつぶされたような跡。

圧力により爆散したような跡。

凶悪な何かにえぐり取られたような跡。

およそ考えつくような、魔法や斬撃の類ではないナニカ。

いったいどのような戦闘が行われたのか想像もできない……そんな痕跡。

そして、炭化した人であったであろうモノ……

タンパク質が炭化するのに必要な温度……それは200 以上の高熱。

さらに急激な炭化を進めるための超高温炭化温度は、800 以上とされる。

つまり、ここに転がりし者どもは、火系呪文の攻撃でこうなった……ということなのだると予想する。

確かに、超高熱で敵を殲滅する火系上級呪文は存在するが……詠唱に時間がかかりすぎ、また、広範囲に影響を及ぼすその熱量は、このような狭い場所での運用を由としない。

敵はモチロンであるが、術者自身への危険も高いからである。だが、目の前にある結果の産物は、それを認識させる・・・その術式によるものか、術者の力量なのかは不明であるが、実に興味深い・・・新たな魔法に知的好奇心を刺激されたゼクトとアルは、この作戦が終わったならば是非聞いてみたいと考えていた。

「アル！奥に！」

「はい！感じますね・・・とんでもない魔力です・・・これは、ナギ以上ですよ！」

「いつたい・・・なにが!？」

アララアララ  
紅き翼達が辿り着いた宮殿の奥・・・少しひらけたその空間の更に奥に佇む人影。

凶悪な魔力を隠そうともせず、魔力干渉現象により、空気の間がたなびくような幻想的な姿を見せていた。

大きな黒地の布をすっぽりと被ったようなその姿、まるで、そう、その姿は死神・・・。

その姿を見た者は、無意識に生きることを諦めるだろう。

後日談となるが、ラカンですら、その時思ったらしい・・・『こいつには絶対勝てない』と

だが・・・だからこそ、そんな存在に、勇敢に立ち向かうのは英雄達だ。

誰もができないと言って諦める・・・それを成し得る者が英雄と呼ばれるのだから。

「お前は誰だ！」

「小賢しい猿共メ・・・我が名は、造物主ライフ・メーカー・・・この世の全てを凌駕する神だ！」

先頭をきるナギが、杖を構え、造物主ライフ・メーカーと名乗るその存在に対峙する。その後ろでは、アリカ姫を守りように、各々が武器を構えるのだった。

そして・・・

「ディオス・テュコス  
雷の斧!!!」

「メガ・ゲラピトン  
超重力子弾!!!」

「フランマ・フリゲランティア・ルビカンス  
浄北の紅き焰!!!」

ナギの雷撃が、アルの重力弾が、ゼクトの焰が、造物主ライフ・メーカーへ向けて放たれた！

3方向からの一斉攻撃・・・だが！

「だめじゃ！掻き消された！」

手応えのなさを長年の経験から、無効化と感づいたゼクトの言葉に、『ならば！』と物理攻撃の主とする面々が追撃に入る。

「豪殺 獣剛居合い拳!!!」

「 鳴神流秘奥義 真・斬魔剣 ！！！」  
「 これで決めるぜ！斬艦剣！！！」

ガシヤンツ！！

ライフ・メーカー  
造物主が張る障壁の碎け散る音が響き、攻撃が通ったのか胸を押さえる仕草が見て取れた。  
だが、それもつかの間・・・

「 ふん！我が2600念の絶望を知れ！」

そう言い放つ造物主ライフ・メーカーから急激に立ち昇る魔法結合圧が、この場にいたる全ての者に絶望感を与えた。

「 まずい、姫さん！みんな！守れ！」

ナギの喚起に、皆が防御呪文にその持てる力を絞り出そうとする。しかし、先ほどの高出力呪文の余波で、飽和状態となりつつあるこの空間の精霊力が、その呪文構成を邪魔するのだ。もともと防御魔法が苦手なナギは勿論、アルとゼクトも、紡ぐ魔力を上手く錬れないでいた。

「 ならば、私が！防げ！神鳴流対魔戦術絶待防御！四天結界独鉗錬

殻！」

青山詠春が四方に、懐から取り出した独鈷杵とくこしきを放ち、大きな三角錐の防壁をアリカ姫を中心に作り出す。

神鳴流が誇る対魔戦用の戦術防壁！

当然、魔法も防ぐ絶対的な防壁であったのだが……

『ピシッ！』

ライフ・メーカー  
造物主から放出される……魔力の濁流に張られた防壁が悲鳴を上げた。

そして、防壁の内側から、アルとゼクトが対魔力消滅壁と耐魔力壁を張るが、押し寄せる圧力はまだ止まらない。

ここまでなのか！？

そんな想いが一同の脳裏を掠めた……そのとき！

「見てられんな……」

誰にも聞かれることのない……ぼやきを口し、宿参スサノオノ王が地面から生えるように、張られた障壁の外側に現れたのだった。

物語はまだ終わらない



28話 宮殿の奥にて（後書き）

・ ・ ・ ・ ・  
色んな作家さんとの被りがないようにと思っても、結局は、似た様な流れになってしまう感じが強いのはご容赦下さい。  
頑張ります。

## 29話 神と魂のつながり

.....

ぬるつと・・・そういう表現が的確なのではないだろうか。

地面から生えたソレは、腕を組みながら、対峙する敵を爛々と睨み付ける。

ライフ・メーカー

造物主から押し出される魔力の濁流を、自らの障壁で受け止め、後ろのアリカ姫たちを守るように立ちはだかっていた。

「悲しみの縁より蘇りし、欲望の使者！謎の仮面、ゴールドスネーク推参！」

謎の仮面と名乗る妖しげな人物は、さらに仲間を呼び寄せた。

「白！蒼！」

その呼び声に応えるかのように、何処とも無く、宙を回転しながら飛来し、スタツと着地する・・・真つ赤なチャイナドレスに棍棒を持つ仮面の美少女？

「謎の美少女、白猿仮面、ここに参上！」

そして、霧が晴れるかのようにして現れる妙齡の美女？

蒼を基調としたシックな装いの・・・こちらも仮面をつけていたのだ・・・

「愛の伝導師、蒼月仮面、ここに見参！」

仮面にて顔を隠した3人？が、紅き翼と造物主の丁度中間位置に出  
現し、それぞれが構えをとる。

「そこまでだ造物主いや、ガーゴイル！」

「貴様ら！まさか！」

お互いに憎み合う関係なのか、周囲を覆う魔素はドンドン濃厚にな  
っていく。

先に動いたのは、造物主！

突き出した腕の先から、高圧超熱源線・・・レーザーを撃ちだした。  
青白い輝きを放ちながら、1200にも達する高熱が、謎の仮面、  
ゴールドスネークいや、宿参ノ王を撃つ抜く！

「神技、レーザー白羽取り！」

当たる瞬間のレーザーをつかみ取り、その射線を反らす！

3次元内での物理法則をねじ曲げるその技？に、それを見た者は唾  
然とする。

そんな周りを無視するやのように、謎の美少女・・・白猿仮面こと、  
孫悟空が目にも留まらぬ超高速で突きを繰り出す。

「だだだだだだだだだだだだあ！」

技に名前など要らぬと豪語する悟空の渾身の連撃が、造物主ライフ・メーカーの障壁を破き、貫通し、その本体へと撃ち込まれていく。

8トンの重みがある如意棒が、繰り出す神突は、子爵級魔神の障壁スペル・バウンドすら打ち抜き、呪圈の再構築スピードすら凌駕する連撃である。それを生身で受けた・・・決して無事ではあるまい。

「こんな・・・こんなところで・・・我は選ばれし者、この世界の神として・・・」

顔は見えない。

しかし、その虚ろな瞳が見つめる先には何があるのか・・・。  
自らを神と称する造物主ライフ・メーカーその存在は、何処で生まれ、何処から来たのか。

「ガーゴイル・・・いえ、ネメシス・ラ・アルゴール。貴方は人間よ・・・生体強化されたタダの人間・・・」

「ち、ちがう！我は神だ！選ばれし者！唯一の支配者！エウロペアの十・・・」

愛の伝導師・・・蒼月仮面ソウゲツこと、残月の言葉に反応する造物主ライフ・メーカーであったが、言葉を言い切らぬ内に、身体は、疾風の如く駆け抜けた宿参サノオノ王が繰り出す焰の剣撃により半分に切断された。

しかし、左右に分かれていくその半身が・・・炭化した切断面を食

い破るかのように伸びた触手同士が結合し、再び合体する。

「やはり、結合していたか・・・くそっ！」

地球が歴史を重ね、猿が人類へと進化していく過程で、初めて派生した初期型人類アウストラロピテクス。

進化・派生を作り出し、古代ネアンデルタール人を駆逐した新人類ホモ・サピエンス。

そして、現生人類の祖ともいえるホモ・サピエンスと他の古代人・旧人種の違いは、脳の容量と前頭葉にあるとされる。

突然の進化とは、何をもつて切っ掛けとなるのか？

地球環境、補食環境、生体環境・・・

旧世界に突然現れたソレは、人類の進化に手を加えた。

それが、智慧の実とも、禁断の果実ともいわれるナニか。

だが、それにより劇的な進化を遂げた人類は、その脳が命じる本能と原罪との狭間で苦しみながらも、文明を築いていく。

そして、いつしか、世界は支配する者と・・・支配される者という構図ができた。

支配する者達は、ある神に奉仕していた・・・彼らが信じた神・・・

それは『 科学 』

その神は、全ての者に平等に恩恵を与え、より良い環境をさらにより良くするように命じた。

神をもつと素晴らしい環境へ、我々をもつと素晴らしい環境へと。

神に奉仕する者を科学師と呼び、発見と進化、そして発見。

科学師達は、世界の全てを科学で証明していく。  
分子、原子、陽子……  
科学で語れぬものは……もはや無かった……いや、一つだけ……  
・そうひとつだけであった。

### 霊魂……魂の解明

彼らは、魂の力を霊子力と呼び、その研究をスタートさせた。  
人間は「肉体」と「精神」そして、「霊魂」という3つの部分からなる存在である。

その「精神」「霊魂」という目に見えないエネルギーの抽出または具現化を目指した。

時折、奇跡という名の次元外エネルギー派の感知を可能とした彼らは、高次元生命体いわゆる神の力と人間の霊魂の関係に迫っていく。脳と精神が強く結びつく意識領域の深層部……「元型」と呼ばれる無意識層の大海が結びつく先が霊魂であった。

そして、その繋がった霊魂の先こそが「大領海」といわれる魂の源・

魂の源とはなんだろうか？

魂の源とは、転生輪廻といわれる魂循環システムの末端……すなわち神の一部。

人間は、己が魂の末端が、神の末端との繋がっていることを突き止めたのであった。

そして……異端と呼ばれた科学師達の暴走が始まっていく。

彼らは、その魂から、更なる神の力の引き出し……神の力の行使

を目論んだのだ。

遂に彼らは、禁断の領域に足を踏み入れてしまった。

高次元生命体の力を使い、延命処置、肉体改造、生体調整・・・実験という名の残虐な行為は、留まることを知らず、しかし、確実に成果を出していったのだ。

さらに、召喚術といわれる古の秘術と、最先端霊子力理論の組み合わせにより、魔族と人間との融合といったことまで可能となっていく。

そして、科学師たちは、自らのことを・・・神であると言うようになってしまった。

守護すべき人間達の暴走・・・踏み入れてはならぬ領域への進入は、結果として神の怒りを受けることとなる。

当時、旧世界を統治していた國の名は・・・『アトランティルス』  
地上はもとより、海底、空中、地下、そして宇宙へとその覇勢を伸ばしていった根本には、霊子力理論の躍進が多なる科学の進歩に繋がっていたのだが、それは一昼夜にして消えることとなる。

神の軍団が旧世界に姿を現すと、その高次元エネルギー体濃度の急激な圧力により、海面高度が上昇。

地表のほぼ全ては海に沈み、空中大陸は、怒りにより粉々となった。地殻変動、火山の活発化、強震など、旧世界上で人間が、動物達が逃げられる場所などどこにもなかった。

抵抗する科学兵器は、全て神の軍団の前には無力であった。

唯一・・・そう、唯一通じたもの・・・それこそが、悪族や神族と

の融合合体を処置されたモノの直接攻撃。

神の力の一部をその身に宿すことで、神の軍団への攻撃を可能としたのだ。

だが、そのような紛い物達が勝てる要素は、0ではないが、無いに等しいと言つてよかつた。

融合体の使う力の源もまた、神の力である。

すなわち、攻撃すべき相手の力を借りて攻撃しているのだから・・・元より力の差は歴然であつた。

そして、世界の99.9%の生物が死滅した。

神の軍団とて、一枚岩ではなかつた。

故に、そのことに憂いを感じた一部の神は、特定の者をかくまったり、逃がしたりした。

その者達・・・は、各神が管理すべき世界で、平和を謳歌していくこととなる。

だが、神の領域へと足を踏み入れた科学師たちは、許されることはなかつたのであるが。

生物が生息できる環境でなくなった地球は・・・世界は・・・創り直された。

故に、管理神以外の、監視神をも置かれる、特別保護世界となつたのだ。

だが、緩やかではあるが、創世神の定めた時間の流れは変えることはできなかつたようで、同じように科学が進歩していることは、ある意味仕方の無いことなのかも・・・しれなかつた。

物語はまだ終わらない

29話 神と魂のつながり（後書き）

.....

ドンドン離れていく世界観に着いて来て下さっていますか？  
頑張りますので、お願いします。

### 30話 対峙する力

.....

露わになったその姿は、何処かで見たことのあるような・・・そんな錯覚を起こす瘦せ型の女性であった。

だが、微妙に・・・そう微妙に、切断された面の上下のずれであるう、顔のパーツが左右対称になっていなかったのだ。

しかし、そんなことは些細なことで、最も気にせねばならないのはその存在。

真半分に切断された人間が、何故生きていられるのか？

切れ離された切断面から伸びた触手が融合し、その身体を元に戻すような所業は・・・いったい？

「我は神なのだ、神に死はなく、永遠を支配する存在なのだ・・・我を崇めよ！」

真つ赤に輝く瞳が、更に光りを帯びると、その身体は、細胞の増殖を繰り返すかのように盛り上がり始め、肥大化していく。

次元内エネルギー法則を無視した肉体変異変態・・・何処から流入する力を吸収し、別の存在に変化すること、つまり完全変態活動

「スー様！魔力流入を確認。魔力転出先は、この真下と推測されます！魔力計測値さらに上昇中！」

報告する残月の言葉を肯定するように、目の前のその存在は、変化を促進していく。

腕は丸太のように太くなり、それに比例するかのようになり、巨大化する肉體。

古代ギリシャ神話のタイタンのような筋肉美を備えているが・・・腕の数は左右3本づつ。

大きく裂けたその口から見える・・・鮫のような牙は、あらゆるモノを噛み千切ってしまうのではないかと思わせる邪悪さに満ちていた。

爛々と光る赤い瞳に映るのは・・・何なのか。

人間を超越したことによって・・・得られたモノとは何なのであるうか。

「我が怒り、我が悲しみ、我が絶望をその身に刻むがいい!!」

計測値では、子爵級であった魔力が、今は伯爵級まで膨らんでいる。伯爵級魔族の一撃は、核のそれを遙かに凌駕する破壊力を持っているのだ、それがこの至近距離!

6本の丸太のような腕から繰り出される猛ラッシュが宿参ノ王達を襲う!

だが、時を同じくして『ダンッ!』と踏みしめた震脚と共に紡ぎ出されるのは、宿参ノ王得意の召還神術。

「土角結界! 石化結界! 鉄壁結界!」

宿参ノ王スサノオを中心に半円を描くように、三種の結界が召還される。巨大な土の立方体が迫り出し、その隙間を縫うように御影石のような円柱体ライフ・メーカーが造物主に向かつて伸びていく。そして、黒光りした鋼鉄製のモノリス型障壁が更に敵の空間侵入を防ぐ。

「聞け、英雄共！この真下に造物主ライフ・メーカーの魔力源がある！そいつを叩き壊せ！」

結界で攻撃を遮断した宿参ノ王スサノオからの指示で、悟空が石床に衝撃を与えると、大穴が開く。

ジェスチャーで、『行け行け』と下を指すも、英雄達は動かない。

それはそうだろう・・・突然現れて、闘いだした妖しい仮面の3人組。

圧倒的な攻撃力で造物主ライフ・メーカーを処断する技量と連携。それも、とてつもない攻撃力であり、自分たちのソレとは遙かに次元が違つうように見えた。

彼らは、惚けているのではない、目の前で行われている次元の違う戦いの様子に吞まれ身体が動かないのだ。

「早く行け馬鹿共！アリカ！お前の妹もそこにいる！」

その言葉を聞いたアリカ姫は、ハツと気を戻し、『行きましょう！』と紅き翼達アラルブラに降下を促す。目の前に敵をしながら、逃げるような行為に難色を示すが、『ここには邪魔になるだけなのかわからないのですか！』と言われると、自分たちの力を、目の前で行われている現実を理解し、思考を切り替え素早く降下していく。アリカ姫は、当然のように、ナギにお姫様抱っこされていることについては、もう何も言うまい。

「どお〜も守りながらの戦いってのは、難しいな・・・だが、これで全力で行けるぜ！」

結界の出力を限界まで上げ、攻防一体の結界術ライフ・メーカーが造物主を浸食していく。

土角結界は、あらゆる物理攻撃を防ぎ、触れるモノの土性抗体を書き換え土そのものに変格を促す。

つまり、土性抗体が弱くなり、土性攻撃への免疫力、抵抗力が奪われるということだ。

魔力の弱い者、抵抗力を持たぬ者ならば、土そのものにその存在を置き換えられてしまう程だ。

石化結界は、触れる者に石柱の物理的衝撃力と共に、石変資質にその抗体を書き換える。

触れた場所から石化していき、その身は石に置き換えられていく。しかも、石粉を吸い込むと内部からもその効果は発生する。

生物であれば、数分もかからずに内外からの石化変換で石像をなることは明白だ。

鉄壁結界は、神鉄でできた鋼鉄の壁が、魔力の変換現象と魔力そのものによる直接攻撃を跳ね返す。

神が鍛えたその鉄自体が持つ『聖なる力』を上回らない限り抜かれることはない。

アカデミー学園の実験結果では、子爵級は勿論、伯爵級の攻撃にも耐えられるとされている。

つまり、目の前で攻勢に転じている造物主では、この壁を抜けることは出来ない……いや、抜ける可能性は極めて低いのだ。

だが、魔性防御の高さに定評がある鉄壁結界にも弱点がある。

それは、コチラからの攻撃も出来ない……ということである。

つまり、完全防御系の術故に、内外からの攻撃を防いでしまうだ。

ソレを解消するために、相性の良い土系神術系に組み合わせで攻防

一体の結界攻撃を成せるのは、神界、仙界を見ても、宿参ノ王スサノオを含

め数少ないとされる。

何故か、それは、神も仙人も……『ド派手な攻撃呪文』が大

好きだからである。

そして、『攻撃は最大の防御論』は、今でも支持者が多いのが事実。

故に、地味で、派手さの低い、そして、消費魔力量の多いこの術は、使う者が少ない……というわけである。

「師匠……結界引つ込めて下さいよ。わちきが攻撃出来ないっす！」

「ん……なにいつてんだよ。次はオレの番だろうが！」

「違っつス、次はわちきの番っス！」

何故か、攻撃の順番を巡って睨み合う師弟。

宿参ノ王スサノオは、どこから出したのか、棘のついた金棒を握りしめ、悟空は、如意棒を構える。

「お前には、師匠を敬うことをもう一度、教育せねばならないようだな！」

「師匠には、弟子に出番を譲るといふ、広い心を持って欲しいもんつスね！」

「ぬぬぬぬ……」

ライフ・メーカー  
造物主に対峙したとき以上の、緊迫感と圧力が結界内に満ちあふれる。

天界の暴れ者師弟……そう呼ばれる二柱の神は、結界の外にいる存在を蚊帳の外に置き、一発即発の事態にまでなっていた。

物語はまだ終わらない

30話 対峙する力（後書き）

.....

### 31話 探し物

.....

蜂の巣のように敷き占められた、青白く発光している六角型の石に群れが、その空間の異様さを物語っているようだった。明かりがない・・・故に、床の光だけで見渡すのだが、暗すぎて広いのか、狭いのかさえも判らない。

「ここは、なんだ？」

「さあ、なんででしょうね」

上の階から、浮遊系魔法で降下した、ナギ達 アラルブラ 紅き翼の面々は、警戒しながら、周囲を伺う。

不気味な空間の先に、アリカの妹・・・アスナ姫がいると言われてきたのだが。

アルがライトの魔法で、周囲を照らすと・・・六角形の床がまるで蜂の巣のようにどこまでも続いていた。明かりが弱いのか、この場所が広いのか、壁という名の行き止まりは四方に見あたらない。

破壊しろ・・・と言われたものの、なにを破壊すればいいのか・・・見た感じでは、対象になるような建造物は見当たらない。

天井に空いた穴からは、大きな衝撃音や爆発音が聞こえる・・・きつと造物主との戦闘が激しく行われているのだ・・・そう思うと、ライフ・メーカー 急ぎ何か為さなければという気持ちでいっぱいになるのであるが・・・

。

アリカが逸る心をどうにか落ち着かせながら、どうするべきか、どこへ向かうべきか・・・そう思案していると、降りてきた穴から、やってきた者がいた。

「あら、まだこんな所にいたの？」

そう言いながら、青い仮面を付けたローブ姿の女性が、床にふわりと着地すると、『こつちよ』とスタスタと歩きだす。

何もわからない自分たちよりは、知っている者についていく方がいいだろうとの判断から、一行は、そのい後ろに従うように歩いていく。

そして、謎だらけの人物に、歩きながらもナギや、アルは質問を投げかけるのだが・・・

「あなた・・・名前は？」

「あら、聞いてなかったのかしら？愛の伝導師、ソウケン蒼月仮面よ」

「いや、それ、偽名だろ！本当の名前は何だって聞いてんだよ！」

「・・・失礼なおこちゃまね。でも、今、この時点では、なんの意味も持たないわね」

「だから、名前だよ名前！後、おこちゃま言っな！」

愛の伝導師・・・蒼月仮面と名乗る残月に、半分切れ気味に叫ぶナギだが、未知の経験に怯える自分をごまかすためだったのかもかもしれない。

「本当に失礼なおこちやまね・・・貴方、人に名を訪ねる時には、自分から名乗りなさいって教わらなかったのかしら？」

振り向くことさえせずに、ナギの質問を打ち返す残月であったが、その心は少しイライラを感じていた。

その理由は、この空間から感じる『気配』の正体に対して嫌な予感がしたからと、後ろで緊張感もなくギヤーギヤーわめくナギのせいであった。

「俺様は、ナギ・スプリングフィールドだ！」

「あらそう」

「あらそう・・・じゃねえ！さあ、名前を名乗りやがれ！」

「喧しいわね、貴方が今口にした名前が、本当に貴方の名前である確証がここにはないわ」

「はあ？なにいつてんだよ？」

「ナギ・・・彼女は、あなたが本当にナギ・スプリングフィールドであるかわからない、と言っているんですよ」

何をいつているのか判らない・・・そんなナギに助け船をだすアルだったが、その彼自身も、かみ合わない会話の意味について考えているのだが。

「俺は真正正銘のナギ・スプリングフィールドだ！わけわからないこと言うな！」

当然のように切れるナギだが、残月はまともに相手にしない。そして、歩きながら、淡々と打ち返しはじめた・・・もちろん振り向くことなど1度としてなかったが。

「貴方が、本物のナギ・スプリングフィールドである証拠は？、証明は誰がするのかしら？」

「その証明をする者が、本物で、且つ、信用のできる人物だと誰が証明するのかしら？」

「貴方は、言ったわね、本当の名を名乗れって・・・本当の名って何を意味するのかしら？」

「そして、その名前に一体なんの意味があるのかしら？貴方の名前には、どんな意味があるのか知っているのかしら？」

言葉の猛打を受け、ナギは撃たれるがまま、何も言い返せなかった。もちろん、その後ろを歩く紅き翼アラルプラの面々にも、残月の言葉の回答を持ち合わせていなかったのだから。

誰も気付かない、残月の言葉の意味を、その先に何があるのかを。暫く歩くと、依然として床は続いているのだが、残月は、後ろ面々に手で止まれと合図する。

『ここだわ』そう言うと、なにやら杖を構え、呪文のような単語を口にしていくのだが・・

「アクセス、223288956788、昔々あるところに、おじいさんとおばあさんがいましたとき、めでたしめでたし。アドミニストマスター権限発動!!」

残月の言葉に應えるかのように、空間に半透明の何かが出現し、徐々に物質化していく様子が見て取れた。

完全に物質化したそれは、巨大な扉。

そして、その扉の真ん中には、石でできたと思われる女性の胸像が鎮座していた。

「権限パスワード確認。入室パスワードを入力して下さい」

事務員の様な口調で、胸像の口が動き音声が聞こえたのだ。

その超比現実的な光景に、ナギ達も、アリカもジツと見ていることしかできないが、余りに、驚き過ぎて、声も出せない。



今までとは全く空気の質が違うことを肌で感じることもできる……  
そんな空間。

部屋の中央に位置する場所には、大きな水槽のような円柱が聳え立  
っていた。

中に何かいるのか……この位置からはわからないが、空気の泡が  
時折『ゴボゴボツ……』と出ているのが見える。

「さて、時間が無いわ……」

残月は、傍らのモノリスに自らの杖を差し込むと、何も無かった空  
間にいくつもの画面が現れ、空中にまるでキーボードがあるかのよ  
うな手さばきをしていた。

数値やグラフ、文字の羅列が画面を流れていくが、ナギ達には、全  
く理解できないものばかりであった。

「蒼月仮面とやら、ここで私たちは何をすればいいの？」

アリカが苛立ちながらそう言うと、残月は、めんどくさそうに、部  
屋の中心を指差す。

そちらに行け……そんな風にも取れる仕草に、アリカ達は、部屋  
の中心に向って……青白い液体が詰まった水槽に向けて恐る恐る  
近づいていく。

そして、見てしまった……そのモノに。

そして、愛すべきものの変わり果てた姿を。

水槽の中には、目隠しのようなもので顔を覆われ、何本かのチューブで繋がれた・・・少女の姿が。

だが、驚くべきその姿は、見るものから言葉を奪う。

腕が、脚が、胴が、切り離されているのだ・・・しかも、切り離されているパーツは、切り離されながらも元の位置に戻ろうとしている・・・そんな用にも見える。

五体満足・・・ただ、切り離されているだけ・・・そんな姿。

そも奇妙な姿を晒す少女は・・・間違いなく、アリカの妹、アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアであったのだ。

「そ、そんな・・・アスナ・・・嗚呼ああああ・・・」

変わり果てた妹の姿を見たアリカは、その場に泣き崩れる。

それはそうであろう、八方手を尽くすも探し出せなかった妹との再会が、こんな形になってしまったのだから。

あんまりな現実を目の前にし、<sup>アラルブラ</sup>紅き翼達も掛ける言葉を失っていた。

なんだこれは？

なにが目的でこれを？

いったい何が起きているのだ？

「心配要らないわ、彼女はまだ生きているから」

背後に現れた残月の言葉に、皆振り向く。

黒光りしたモノリスを左右に従え、なんてことは無いといった風で

あつた。

「おい、あんた、助けられるのか？」

皆の言葉を代弁するかのようにナギは、詰め寄るのだが、スイーと静かに移動するモノリスに接近を阻まれる。

モノリスが時折放つ、銀色の点滅光がとても不気味だ。

残月は、それを全く気にせず、カチャカチャと空中に取り出したキーボードを操作し始める

「生きている限り、ここではなんともなるわ・・・まあ、見ていなさい」

彼女の言葉がきっかけとなったのか、部屋全体に広がる青白い光がいつそう強くなる。

『ゴボツゴボボボツ・・・』と水槽の中のアスナ姫が空気を排出する音に、また、皆が水槽を見つめ出す。

「ゴメンね・・・少し貴方達の命借りるね・・・戻して上げられないけど、私にはここまでしか許されていないから」

誰に向って話しているのか・・・四方を見渡し、そして、タンツとポタンを押す。

ウオオオオオオンと部屋全体から何かが稼動する音が聞こえ、何か力が、大きな力が集まっているような気配がした。

すると、アスナ姫が浮かぶ水槽内が僅かに発光し、肢体の切断面に輪のような輝く何かが出現したのだ。

そして、吸い付けるかのように互いを接合し、あっという間に、元

の人間としての正常な輪郭を取り戻していた。

光が収まると、バシャアア・・・といった排水音が聞こえ、水槽内の液体がドンドン減っていく。

接続されていたチューブのようなものも消えうせ、中には静かに眠る裸体の少女だけが残った。

ウィーンと水槽の側面が開き、外気が彼女に触れるとブルブルつと身震いするのが確認できた。

「ア、アスナ！！」

駆け寄り、やっと出逢えた妹に、自らのマントをかけ、優しく、優しく抱きしめる姉の姿に皆、温かいものを心を感じたのだった。

「さて、本番はこれからね」

物語はまだ終わらない。

### 31話 探し物（後書き）

.....

お待たせしました。

書いては消し、書いては消すと、中々思うような表現が出来ず。

執筆は、ローペースになりますが、更新していきます。

頑張りますので、ご声援よろしくお願い致します。

### 32話 遺跡

.....

アスナとの再会に湧く彼らの傍らに置き、忙しそうに指を動かす残月を、物珍しそうに見つめるアルが話しかける。

「さて、我々はこれからどうすべきか・・・そして、この遺跡・・・興味がありませんね」

目線の先の女性は、そんなことには構っていられない・・・そんな感じに、いくつもある画面に目をやりながら、動かす指は止ることは無い。

他のメンバーも、遺跡内部の不思議に興味深々にキョロキョロしている。

そして、ひとつの画面に、ある男の姿が映る。

「あ、お嬢！こちらは一応順調です。ただ、全員となると時間が・・・」

「泣き言いうんじゃないの！あんたの能力を200%発揮させてでもやりとげなさい！死にたいのかしら？」

「はひい！死ぬ気で頑張ります！では！」

やれやれ・・・そんな風な表情をするが、すぐにキツと引き締めて画面を睨み出す。

なにやら逼迫した事態になっているようであるが、アラルフラ紅き翼には何も伝わっていないし、伝えていない。

残月とすれば、彼らに構っている暇すらも惜しい・・・そんな状況なのだ。

しいては、上で暴れているスサノオの為、そして、この世界の為。

「おい、さっきの男は誰なんだ？それに、お前は何してんだよ？」

今、世界で一番空気の読めない男・・・ナギ・スプリングフィールドが、イライラ値限界に達しそうな残月に話しかけてしまう。  
もちろん相手にされないことなどお構い無しだ。

「なあ、それとココの・・・なんだ、その見たこと無いものが色々あるが、これってなんだ？」

『 プチッ 』

そんな音が聞こえた・・・気がした。

「あんた達・・・邪魔だから、さっさとここから出ていきなさい・・・いいこと？ココで見たもの、聞いたことは絶対に口外しないよね？もし、一言でも漏らしたら・・・殺すから！」

言いたいことだけ言うとまた、画面に集中し出す残月に、『ハイそうですね』と従う面子・・・ではなかった。

「なんだよ！俺たちも出来ることがあるだろう！それに、上ではまだ、あいつらが戦ってるんだ！」

ナギの叫びは、ある意味正解で、ある意味間違っていた。

しかし、英雄と称される面々にも、意地やプライドもあるだろう、残月は『ふう〜』と息を吐き出すと、『そりゃそうだね』と思いついた。

自分が彼らの立場だったら、素直に従っただろうか？

あの時、時間や場所は違えども、彼らは私と同じなのかも知れない・・・そう思うと、少し余裕が出てくるのだった。

とりあえずの処置はした、後は詰めだけ・・・そうね、少し説明してあげてもいいかな・・・そう思うと、残月は、ピタッと指を止め、視線を彼らに向けた。

「仕方が無いわね。いいわ、説明してあげる。でもね、さっきも言ったけれど、ここで見たこと、聞いたことは、心の奥に仕舞いこん

で、二度と公言しないこと！いいわね？これはね、貴方達に為に言っているのよ？」

にこやかだが、その目が持つ圧力は、そこにいる英雄達を押し黙らせる。

視線だけで、人が殺せたならば、ここにいる全員がすでに冥界に旅立っていただろう。

残月は語り出す、この遺跡が異跡であること。

そして、ここが何の目的で作られたものなのかを。

今、現在進行形で起きている事態についてなど。

「ここはね、かれこれ・・・そう、あの時からだから、約2500  
念前の建築物になるわね。あなたが存在を確立する遙かなる昔に  
造られたモノ。詳しくは、禁則事項に該当するから教えられないけ  
れど・・・新世界の人類達が超文明と呼んでいる類のものであるこ  
とは間違いないわ」

残月は、四方にある壁や床、暗がりの中に青白く光るそれらを、懐  
かしそうにしながら、手元にあるモノリスを優しく撫でた。

「旧世界と呼ばれる・・・今は存在しない世界にはね、ある神が君  
臨していた・・・そして、それを崇める者達を『科学師』と・・・  
・そう呼ばれていたわ」

誰の顔を見るでもなく、空中に視線を漂わせながら、彼女はいった

いどんな光景を思い出しているのだろうか。

「彼らが、今ある新世界と明らかに違うのはね、ある力の解明に突出していたこと、そして、それを成功させてしまったことね・・・それが、全ての、大いなる厄災の始まりだったわ」

「科学師達は、その力を使い、世界に平和をもたらしたわ。人類は栄華を極めた・・・その力は、海を越え、空を越え、宇宙まで達したの・・・あなた達のは信じられないかもね、知ってる？新世界ってね宇宙から見ると蒼いなのよ？」

可笑しそうに笑う彼女は、少し哀しげだった。

彼女を見つめる面々は、語られる内容の大きさに、反応が出来ないでいたのであるが。

「永遠に、そう、永遠に続くと思われた平和はね・・・結果として人類の手で終焉を迎えることになったのよ・・・人の欲望には限りがない・・・それは、始祖が食したとされる智慧の実がもたらした最大の罪・・・無知の罪から来ることかもしれない」

平和に包まれた、神が造りし楽園・・・エデン。

そこは、浮遊大陸であったとも、異空間であったとも考えられていたが、アダムは、イブの言葉を受け、『食べてはいけない』とされていた果実を食べてしまう。

何故、イブはアダムに食べるコトを進めたのか？

何故、食べてはいけないモノが、そこに実っていたのか？

結果として、楽園を負われたアダムとイブは、原罪を背負い、寿命を制限され、限られた生を全うしなければならなくなった。

本能とせめぎ合う原罪。

その中でも、人類に文明をもたらし、発展させた原動力とはなにか？

それは、欲望……

限りない何かを望む欲こそが、その原動力になっていたのだ。

そして、その根底にあったのは、もう一度樂園に戻りたいという、アダムの願いがあったのかのようにも思えた。

人類は、その知能が故に、何かを知ること、別の何かを連鎖的に知ってしまう、又知ろうとする。

そして、その先には？さらに、その先には？

知識を追い求める欲望のスパイラルは、留まることなく、突き進んでいく。

知らないことが恐怖となり、知ることが救いとなる瞬間が訪れる……。

科学師達は恐怖したのだ、自分たちが知らないことがあることを。

物事の全てを解析し、知識として理解することで、やっと安心できる……そんな知識を追い求めつづける呪いに掛かっていたのかも  
しれない。

知らないことが、大いなる罪であるかのように……。

そして、彼らは紐解いてしまっ、決して開けてはいけないパンドラの箱を。

まるで、始祖が嚙った、あの実のように。

大いなる力の存在を支配した……いや、支配できると勘違いした

科学師達は、自らを、錬金術師であり、無から有を作り出す『神  
』であると称し始めた。

実際は、そうなるうと藻掻く、魂の根底からの叫びだったのかもし  
れない。

神になることで、神の造りし樂園に戻ることができるのではないか  
・ ・ ・ と。

「まあ、それでね、色々あって、今に至るわけだけど、この施設は  
ね、ある目的の為に造られたモノ・ ・ ・ 人類の進化を促す研究の為  
の装置なの・ ・ ・ そして、その動力源は・ ・ ・ 」

そういつて、手元のボタンをタンッと押すと、六角形の床板が、  
『パシユツ』と空気の排出音を出し、スウーッと迫り上がる。

床だと思っていたモノは、蓋であった・ ・ ・ 六角形の石柱の蓋。

石柱が動きを止めると、六角の内3面が透明になっていることに気  
付く・ ・ ・ 中に見えるのは・ ・ ・ 人の姿。

「えっ!？」

誰が漏らしたのかわからないが、皆、同じ思いであったことである  
う。

石柱の中に閉じこめられた人・ ・ ・ 静かに眠るように佇むその姿は、  
まるで・ ・ ・ 眠り姫。

その眠り姫も、一つ希有な特徴が見て取れた・ ・ ・ 誰の目にも明ら  
かな特徴。

それは、耳の長さ。

まるで、馬の耳を細長くしたような・ ・ ・ そんな形の耳が1ツ対生  
えている。

絵本に出てくる、精霊の民・ ・ ・ エルフ、そう呼ばれる幻想の中の  
生き物が目の前に・ ・ ・ いた。



物語はまだ終わらない

32話 遺跡（後書き）

・ ・ ・ ・ ・  
なかなかストーリーを進められないです。  
楽しんで頂けると嬉しいです。

### 33話 人ではない存在

.....

『ゴゴゴゴゴゴ.....』

突然の地震に少しふらつくも、しっかりとした足腰は身体を支えきる。

砂埃が天井から少し降るが、たいしたことはなさそうだ。

「さて、それで、貴方達には急いでここから出て行って欲しいのよ」

その言葉に、再びナギが噛み付こうとするが、アルと詠春がそれを押さえる。

両腕を抱えられては、ナギといえど身動きが取れなかった。

「その理由を聞かせてはもらえないのですか？」

アルの問いかけに、残月は天井指差し、そして、再び画面へと目をやる。

カシャカシャと指も忙しげに動かし始めた。

「この浮き島ね・・・浮遊力を失いつつあるの・・・つまり、沈みかけているのよ」

彼女の説明では、上で戦っている造物主が、この島を中心にして、ライフ・メーカー周囲の浮島から過度な魔力の抽出を行っているということ。

抽出した魔力をこの遺跡をフィルターとして、自らの力としていること。

その行為は、半径50km以内の浮島に影響を及ぼし、そして、大小様々な浮島の地中隠された魔石が力を失いつつあること。

よって、魔力を浮力に変換していた浮島は、現在進行形で、高度を下げ続けているので、このままいけば、地表に激突し、自らの質量により浮島は木っ端微塵となってしまうだろうということ。

「だから、貴方達は早くここを脱出する必要があるのよ・・・わかつたかしら？」

冗談ではなかるうか？

そこにいる面々は、そう思った・・・だが、目の前で忙しなく何かをしている姿を見れば、その言葉の全てが現実なのであるうことは理解できた。

「それはわかった・・・けど！あんたらはどうするんだよ！この・・・なんだ、ここは沈みかけてるんだろ！」

自分たちに逃げろという目の前の女性が、しっかりと腰を据えてい

ることに、ナギは、何故自分たちだけに逃げるといつのか、何故、自分は逃げないのか、それが不思議であったし、理解できないことでもあった。

「貴方達は、貴方達しかできないことをやりなさい！私は、私にしか出来ないことをするだけよ！」

駄々をこねる子供を叱りつけるかのように、大きな声で、イライラの隠しもせず、残月は、厳しく言い放つ・・・その剣幕に、迫力にアリカもナギも英雄達もが、一歩下がってしまう。

<sup>アラルブラ</sup>紅き翼は気づけなかった、いや、気づくはずもないのだが、画面の点滅する警告音、そしてそれを意味する言葉の意味を。

『 A k t i v i t ? t ? b e r d e m k r i t i s c h e  
n p u n k t . . . . . 』 (活動臨界点突破を観測・・・)

『 E x t r e m g e f ? h r l i c h 』 (極めて危険)

これから、自分がやるべきことは、リンクの切断、魔力抽出の停止、できることならば、魔力の復元。

そして、一番の優先事項は・・・<sup>ライフ・メーカー</sup>造物主への魔力供給の停止。早くしないと！

私は何を惚けていたのか！

そうであった、<sup>ライフ・メーカー</sup>私が造物主の立場ならばそうするに決まっているじゃないか！

そんな思いが頭の中を駆けめぐり、早く動け、早く動けと自分の指

に念を込めながらプログラムの書き換え処理に集中していく。  
間に合え、間に合え、間に合え……でないと！  
残月の心の叫びは……間に合うのだろうか。

その頃、ライフ・メーカー造物主と対峙する宿参ノ王は……

「あゝっはっはっは……オレに勝とうなんて、100億年早いわー！」

胸を反らしながら、高笑いをする宿参ノ王であったが、切り傷や、  
打撃の跡など、衣服の端々には、激しい戦闘の跡が見て取れた。  
床に大の字になって伸びている悟空にも、それ相応の傷跡がそこい  
ら中に見ることができる。

そう、結界の中で行われた壮大な師弟バトルは、当たり前のように  
スサノオ宿参ノ王に軍配が上がったようだ。  
ライフ・メーカー造物主という、明らかに人外な敵を前にして、他事とは……そう  
思われてもしかたがないのであるが、だが、それも予定調和内……  
・スサノオ宿参ノ王は待っていたのだ、信頼すべき右腕が、成すべきコトを  
やり遂げるのを。

やるべきコト……それは、遺跡からの魔力供給を絶ち、吸収した  
魔力を逆転させること。

魔力の供給が無ければ、あの肉体を維持が出来ないことはわかって  
いるのだ……そして、それが、可能なのは、この遺跡の秘密を知

る残月<sup>ちからわな</sup>だけだ。  
力業<sup>ちからわざ</sup>で解決するつもりだった宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王であったが、ガーゴイルの正体を知った残月の・・・気持ちを汲んだ形となったのであるが、ソレを許した。  
過去の清算・・・それは、自ら決着せねばならぬ・・・いわば宿命といってもよかった。

「わわわわわ、我ははははは、かかかかか、神みみみみみ、かかかかか、神なななななのだ！！」

結界を下げた後、目の前にいた存在は、もはや、原型を留めておらず、肉団子のように膨れあがった巨大にして歪<sup>いびつ</sup>な何かになっていた。手もなく、脚もなく、ただただ、奇怪な文様に彩られたこの世のモノとは思えない存在。  
そして、その球体の真ん中に、ムンクのように歪<sup>ゆが</sup>んだデスマスクが、叫びをあげている。

過度の魔力吸収に耐えられなかった肉体と精神が、既に造物主<sup>ライフ・メーカー</sup>が今まで、喰らってきたモノの力に過度に反応し、反発し、増大していた。  
アレの魂が、移されていないければ、その存在自体を保つことすらできなかつたはずである。

「かかかかか神みみみみみみみ！！」

叫びと共に、球体より産み出された触手が、目の前の餌を捕らえよ

うと幾重にも襲いかかる。

融合と吸収の果てにできた蛭子・・・キメラとも言えるのか・・・  
尚も己の欲望を満たさんがために、その力を求め続ける。

「がががががびびびびびび！」

触れるだけで、肉体を、存在を喰らうその触手が、更にスピードを  
上げ、宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王を攻める。

触れることは出来ない、何故なら、神の力すら喰らうその能力は、  
神や魔に対抗すべく産み出された科学の産物。

その触手は、ただの肉塊ではない、エーテル振動数に干渉し、同調  
し、融合する喰手でもあるのだから。

故に、避けるしかない・・・避け続け、じつと、時が・・・その時  
が来るのを待つしかなかった。

「くら、見てないで、手伝え！」

宿参<sup>スサノオ</sup>ノ王の後方で、床に座り込みながら、観戦モードでくつろいで  
る馬鹿弟子に、叱咤を飛ばす。

悟空は、どこからか取り出した、ポテチをポリポリと嚙りながら、  
『いけっ！』だの、『そこだっ！』だのと声を上げていたのだ。

「ふふふ、やっと、わちきの出番っスね！」

よっこいしょ……と立ち上がった悟空は、おもむるに、髪の毛を  
ブチッと抜き千切ると、『ふう〜』と息を吹きかけ髪の毛を吹き散  
らす。  
すると、不思議なことに、その髪の毛の一本一本が、孫悟空と成り  
代わった。

「 身外身の法！」

孫悟空が修めし仙術が一つ、身体の体毛を媒体とした、高等仙術で  
ある。

その変化の幅は、36通りとも、72通りともいわれ、本偽の見分  
けはつかないとされている。

数十体にもなる己の分体を作り出した悟空は、一斉に造物主ライフ・メーカーに飛び  
かかる。

全方位攻撃ともいえるその、棒術の極意を繰り出すのであるが、そ  
の威力が発揮されることも、驚異を目の辺りにすることも叶わなか  
った……何故なら……

「あ、喰われた……」

マヌケな声を出す悟空の姿が……そこにあつた。

そう、既に造物主ライフ・メーカーは、全面が、吸収体となっており、それに触れる  
もの全てを吸い込み喰らい、自分の力に変換してしまう……そんな  
存在になっていたのだ。

「馬鹿！、オレがなんで避け続けてるのか、見ててわかんなかったのか！」

余りの馬鹿さ加減に、脱力しそうな宿参ノ王スサノオは、今も触手を避け続けていた。

「いやあ、わちきはてつきり、師匠が遊ん．．．いや、そいつを疲れさせるためにやってるのかと思ったんすよ」

「いやはや、失敗失敗．．．そんなぼやきが聞こえて来そうなほど、ホンワカしている馬鹿弟子を『ああ、やっぱり、きつちりと折檻．．．いや、修行をしてやらんとな！』と苦々しく心に刻む宿参ノ王スサノオであつたのだが。

後は、悟空本体を喰わせてみて、内部からの崩壊を目論むか．．．もしくは、『燃える天空』でこの島ごと焼き尽くすか．．．そんな物騒なことも考えていた。

「ぐおおおおおおお．．．．．」

突然、造物主ライフ・メーカーは、苦しむような叫び声をあげ、今まで攻撃に転じていた触手は、真っ直ぐに張りつめ、長さを縮めていく。

今まで、驚異であつたそのモノは、まるで水分が抜けた餅のように、ドンドン乾燥し、ひび割れ、粉に成っていく．．．

「なあんだ・・・間に合ったっすか」

良かったのか、悪かったのかわからない調子で、悟空は言うものの、気は抜けないでいた。

それは、紛い物とはいえ、魔族との融合を果たしてる可能性がある以上、肉体の消滅、魔力の消失だけでは、存在そのものを滅ぼすことには成らないからである。

何故なら、マテリアル・アetherラル・パデアル・パディ 肉体・精神・霊魂の、三つの神秘体の中枢に位置する、

根幹の核・・・『コア』とも呼ばれる『永久原子』を破壊させない限り、その存在を消滅させたとはいえないのである。

そして、永久原子の完全破壊こそが、高位生命体ともいえる、神魔に属する者のような、ロスト超意識体の存在を完全に幽子レベルに分解し、因果律の中から消失させたことを意味するのである。

物語はまだ終わらない

### 34話 神に近づきし者達

.....

「.....最後に、お聞きしたいのですが.....」

『ふう』と息を吐き出し、やるべきコトをやった.....そんな顔になった残月に、恐る恐るアルは声を掛ける。

結局、アリカやナギ達は、アスナ姫を介抱しつつ、逃げることもせずそのまま居座っていた。

「ライフ・メーカー造物主とは、何なのですか？」

くりつと、顔をアルの方へ向けた残月は、醒めた視線で刺すように見つめる。

テスト問題の、解答だけを求める子供に対する教師のように。

「それは、貴方達を知る必要もないこと。例え知ったとしても意味のないコトよ」

「おい、知ってるなら教えてくれてもいいじゃねえか」

取り付く暇もない返事に、ナギは嘔みつくが、残月は相手にしない。

再び、画面に視線を戻し、カタカタと指を動かし始めた。

『知ったところで理解できないことがあるのよ……理解できたとしても、意味のないことも』

理解できない知識は、己を苦しめるコトだけであることをよく知る残月は、何も語らない。

その思いは、どこから来て、どこへ帰るのか。

彼らには解らないであろう、どんなに言葉尽くしたとしても。

例えば、『林檎<sup>リンゴ</sup>』を知らぬ者に、『林檎<sup>リンゴ</sup>』についてあれこれ語ったところでその全てを理解することができないように。

暴走し吸収融合体となった造物主<sup>ライフ・メーカー</sup>が、この世界そのものと融合しようとしていたことなど、彼らが知る必要もないし、知ったところで何も変わらない。

すでに、魔力吸収術式の起動により、危惧した可能性は潰したものの、まだ、何かが起きるような気がして落ち着かない……

残月は、早急にここを封印し、主の元に戻らなければと思うのだった。

分離崩壊現象が進んでいく造物主<sup>ライフ・メーカー</sup>に異変が起きたのは、地下施設からの撤収を終えた残月とアリ力達が、悟空の開けた穴から顔を出した頃であった。

双方の手にトゲトゲがついた金棒<sup>かなぼう</sup>を構える宿参ノ王<sup>スサノオ</sup>と如意棒を構える悟空が、油断無くその変化を見つめる中、それは姿を表した。

「ハアハアハア……まだまだ！まだ終わぬわ！」

砂粒化した肉体が崩れ去り、造物主は、元の老人の姿に戻ったが、宿参ノ王達を睨む目は、まだ意志を失っておらず、爛々と真つ赤な輝きを見せていた。

己を維持するための力は、残っているとは思えず、いつの間にか手に現れた杖のようなもので、辛うじて身体を支えているように見える。

その意志を表すかのように、カツと見開いた瞳のと同時に、床に蒼い光が走り、造物主を中心とした空間に、浮かび上がるのは、積層型魔法陣。

二柱を巻き込む形で出現したソレを眼にした瞬間、残月はそれに向かい駆け出していた。

だが、時すでに遅く、完成した魔法陣が張る空間断層型結界の壁により、それ以上近づくことができなかつた。

「我は神……誰にも邪魔は……させぬ……我が望み……今、成就されん！」

その言葉を切つ掛けとして、膨大な魔力が魔法陣を稼働させ、中に囚われた二柱は束縛系捕獲結界に閉じこめられる。

そして、その結界内に響くエーテル振動の強制変質効果が、神と讃えられるべきその存在を粒子に変換していくのだった。

「なっ！」

「おっ！」

「なっ！ まさか、完成していたというの！」

「ふっわっはっはっは………扱える！扱えるぞ！超高次元体といえど我が科学の摂理には購えぬ！」

驚く残月を気にもせず、造物主は己の脳内マルチタクスの効果維持とは別に、稼働した術式に意識を向ける。

そして、捕獲された宿参ノ王と悟空は、足下から粒化していく己の写身を見つめているコトしかできなかった。

己の構成を維持すべきエーテル振動値の変質により、自由を奪われ、力の消失を確認したからである。

身動きできぬ写身………なすすべもなく消失していく己であるが、ただそれだけのこと。

肉体は消失しても、その存在は決して消失しない………その存在は、摂理を支える柱であるから。

約束された復活………それが、何年先、何万年先になるかは不明であるが。

意識すら希薄となったいくその過程において、その眼には何を映し出していたのであろうか。

結界の外に隔離された残月が、殺気立った眼で、ただ、そのままそれらを見ていただけかというと、そんなことはなかった。

力押しでの進入が不可能であることを悟ると、それを上回る力押しで対抗するしかない………とばかりに頭を切り替え、結界への直接アクセスを敢行すべく、宮殿中心部にある魔力集積装置を再び起動させ、己の身体を媒体とした術式への強制浸入を発動させる。

「私は、二度と諦めないと言ったのよ！」（もう、ひとりぼっちになるのは嫌！）

残月の身体にいたるところ……いや、身体全体に現れた幾何学模様と線と輝き。

残月は、ただの女性でも、魔法使いでもなかった。

彼女は、錬金科学の申し子。

哀しき科学の実験体。

旧世界で、事実上初めて神との複融合を果たした完成品。

その存在は、神でもなく、人でもない。

現代に蘇った……古代神のなれの果て。

「魂に刻まれし古き名において懇願す…我が身に宿りし女神…今、ここに力を示さん！」

言霊は力を発動する。

残月を包むように光が身体を走り、そのスタイルを惜しげもなく顕にしたバトルスーツに姿を変える。

瞬時に物質変換されたのは身にまとうものだけではなかった、その体そのものが別の何かに創りかえられたようだった。

神は、時に常識を覆す超常現象を行使する。

手の平を結界に当て、その内側へと意識を向ける。

するとどうだろうか、残月の手が……溶けるように……溶け込むように……ズブリと結界に壁に侵入し、その内側へと突き抜けていくように見えた。

今、残月は、結界そのものを発生させているプログラムに直接アクセスし、己を構成するその全てを電脳粒子に置き換え、結界内部に自分自身を転送を開始したのだ。

旧世界で開発された粒子変換転移技術……通称ワープと言われる超科学の粋。

己を電脳粒子という名のデータに置き換えることで、超光速移動を可能とし、転移軸近くで再び物質変換にて固定させる。

何万光年もかかるという宇宙での移動を、より現実的に行う為に、研究されたいたものであるが、研究当初は、再変換の際、変換しきれない現象も確認されている。

つまり、もともと自分のものではない何かが、己の身体に元々あったかのように存在する現象になる場合もあれば、単純にロストする場合もあり、最悪、再構成された瞬間、只の肉片になっている場合もありえたのだ。

次元の壁を越えるべく考えられた危険な研究。

魂すら粒子に変換する技術……その魂を構成する1粒でも失われれば、それは別の魂となる可能性とであるのであるから。

結界の中にノイズを纏いながら、己を再変換固定した残月。

あるべき数%の素体情報ロストが確認できたが、今はそのことに関する暇はなかった。

何故なら、プログラム修正により、捕獲結界内の粒子変換速度は下げることが出来たものの、強制停止をかけることはかなわなかった

のだ。

残された手段は……直接、造物主ライフ・メーカーのコアを粉碎すること！

結界の壁を蹴り、音速に近い速度でロケット弾のように飛び出した残月。

粉碎すべき対象との距離は約10m。

粒子融合プログラムに意識が向いている今なら、余力など無いに等しい。

残月は己を超高速の弾丸とすべく、更に加速させた。

「神術：超加速」

超高速に加速した時間の流れの中で、瞬時に距離の縮まった二人の眼は言葉を交わす。

『 我はお前達を許さない 』

『 私はお前達を許さない 』

それは、人の壁を越えながらも神に成り切れなかった者と、神に成らざるおえなかった者の最後の交わりであったのかもしれない。

それを読み取った造物主ライフ・メーカーに驚きの表情が見て取れたが、それも一瞬。

ザシュッ！！

己を自身を武器とした残月が、防壁を易々と貫き、吸い込まれるように標的のコアを粉碎し、そして、そのまま、その向こう側へ到達

する。

肉体を構成するいくつもの何かをまき散らしながら、胸に大きな穴が空いた老人は、その結果を考える間もなく、言葉を発することもなく、ただ、崩れ去る…

虚空に手を伸ばしながら。

広大な魔法世界の裏にて千年以上も暗躍した……嘗<sup>かつ</sup>ては、賢者とも呼ばれていた人物としては、呆気ない終幕であった。

物語はまだ終わらない。

### 34話 神に近づきし者達（後書き）

超久方ぶりの投稿で恐縮です。

筆の進みが・・・と言いつけてもしかたがない。

折れずに頑張りますので、また、よろしくお願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0893o/>

---

ネギま？ 天空の彼方から

2011年1月18日19時35分発行